
とある都市（まち）の都市伝説

蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある都市まちの都市伝説

【Nコード】

N2117M

【作者名】

蓮

【あらすじ】

学園都市には数多くの都市伝説がある。虚数学区・五行機関、妹シス達、もう一つの超電磁砲幻想殺し、多重能力者、そして…測定不能ロストレベル。その測定不能の少年、白羽翔と、幻想殺しを持つ少年、上条当麻。2つの都市伝説が交差する時、物語は始まる。

現在休載中です。

第一話：風紀委員へジャッジメント（前書き）

不定期更新です。魔術の方が出て来るかは現在検討中です。よろしければお気に入り登録してください。

第一話：風紀委員へジャッジメント

「ジャッジメント風紀委員だ！お前たちを障害、および窃盗の容疑で拘束する」

「はあ？お前……頭大丈夫か？」

まだ夏だというのにコートを羽織った少年、しりほかけの白羽翔は、ジャッジメント風紀委員の勳章をスキルアウト不良集団達に見せつけながら言った。中肉中背で平均的身長をした、服装以外どこから見ても普通の少年だ。

「頭大丈夫か？やれるもんならやってみるよ」

リーダーが白羽に殴りかかり、白羽はその攻撃を後ろに下がって避け、思考を巡らせる。

(さて、どうする)

格好良く言つてはみたものの、翔の敵はおそらく喧嘩慣れしたであろう5人のスキルアウト不良集団達、対してこっちは1人だけ。どう考えても現在レベル1低能力者の白羽では勝てない。

(よし……逃げよう)

ダッ、と白羽は突然スキルアウト不良集団達に背を向けて走り出した。

「待ちやがれ臆病者！！」

「うるせえ！そういう事はタイムン一対一でかかってきてから言え！！」

不良集団スキルアウトに叫びながら白羽はコートジャケットのポケットから携帯を取り出し、風紀委員の支部へ電話を掛ける。

「はい、風紀委員第177支部です」

甘ったるい声が電話に出た。

「初春か？俺だ、白羽だ。さっきの銀行強盗のスキルアウトバカどもを見つけた……。つてか現在進行形で追いかけてる。白井あたりを呼んでくれ！」

「はい、分かりました。後1分位頑張ってください」

「よろしく」

さっきの甘ったるい声の少女は初春飾ついはあさり、風紀委員177支部ジャケットに所属する白羽の同僚だ。

(応援も読んだし、後は……逃げるのみ！)

白羽は内ポケットに手をつ込み、中からまきびしを取り出して不良集団スキルアウトの進路を防ぐようにまいた。

「バーカ！こつち来てみるよ」

不良達をまきびしで足止めし、白羽はその先で不良達をおちよくる。何故そのまま逃げないかと言うと、白羽が逃げてしまうと、応援は翔の携帯のGPSを元に向かってきているので逃げないのではなく逃げれないのだ。

「調子に乗るな！臆病者！！」

不良の一人が念動能力テレキネシスを使い、白羽の撒いたまきびしを白羽に向かって投げ返した。

「ゲッ！」

「まったく、やっぱり貴方は馬鹿ですね」

突然、何処からともなく現れた茶髪ツインテールの少女が白羽に罵声を浴びせ、空間移動テレポートで白羽ごと数メートル後ろに下がった。

「白井！」

「勝てもしない喧嘩を売らないでほしいですの」

「ははは…ゴメン」

この少女は白井黒子しろいくろこ、さっきの初春と同じく風紀委員ジャッジメント177支部所属の白羽の同僚だ。

「さあ、片付けますのよ」

「ああ」

白羽はコートの内ポケットから金塊の形をした鉄の塊を、黒子は太股に忍ばせた鉄矢を、それぞれ取り出して臨戦態勢になった。

「二人になったからって大して差はねえんだよ！！」

スキルアウト
不良集団達のリーダーの少年は叫び、そこらに落ちていた廃材を持ち2人に殴りかかった。

第一話・風紀委員へジャッジメント (後書き)

原作のキャラの口調(特に黒子)がおかしいかもしれませんが、
んだん慣れていくつもりです。

第二話 地下街（前書き）

お気に入り登録してくださった1名の方、ありがとうございます。
励みになります。

第二話 地下街

ウーウー

アンチスキル
警備員によつて手錠を掛けられた少年達が連れていかれた。

「ふー疲れた」

「って貴方はほとんど何もしていないですよね？」

「ははは……そう？」

「そうですね。私はもう支部に帰りますが貴方はどうしますの？」

「俺はもう少し見回りをして帰るよ」

「そうですね。ではまた後で」

白井はそう言つてどこかへと空間移動していった。
レポート
さて、と白羽は歩き出した。時刻はだいたい1時、土曜日なので学生も多い。つまり犯罪の起こる確率も多いのだ。

そして、約一時間後

「見つからねえ……」

犯罪の『は』の字もなかったが、「まあ……良いことだよな」と気を取り直して見回り続ける。

今、白羽がいるのは学園都市の地下街だ。多くの学生が行き来するので何かしらの事件が起こると思えば来てみたが、逆にこんな人通りの多い所ではそういうやつは何も起こさないうつだ。

「まあ、ジャッジメント風紀委員がいるってだけで何かの抑止力になるだろ」

30分後

「何で…こんなことに」

白羽は服屋にいた。

理由は買物だ。といっても白羽の買物ではなく、クラスメイトの佐天さてん涙子なみこの買物に付き合っているのだ。

「ねえねえ白羽、これなんかどうだと思う？」

佐天が持ってきたのは青のワンピースだった。が、ファッションに興味のない白羽にはそれが良いのか分からないので言われても困るのだ。

「一般的にはそれが良いのかは分からないけど……俺的にはかなり良い」

「そっか、じゃあこれに決めた」

「俺の意見であって、世間一般ではどうかは知らないぞ」

「良いよ別に」

女子ってつくづく分からねえ、と白羽は思いつつここまでの経緯を
思いだす。

何故こうなったかと言つと、それは約25分位前に遡る。
何処へ行くと無く、白羽は地下街をうろついていた。

「あ、白羽くん」

すると、初春が後ろから声をかけてきた。その隣には現在レジに並
んでいる佐天もいた。

「おう初春と佐天、ジャケット風紀委員の仕事はもう終わったのか？」

「はい、だから佐天さんとショッピングしているんです」

「そっか、じゃあな」

そう言つて白羽が行こうとすると

「ちょ、ちょっと待つてよ白羽」

佐天に引きとめられた。

「何だよ佐天？」

「あつ…あのさ………」

「佐天さんは白羽くんとお買い物がしたいんですよ」

「何で俺？俺はそんなファッションセンスねえぞ」

さっきから初春がニヤニヤしていたが、あまり白羽は気にしなかった。

「そこは気にしないから……さ」

「まあ、どうせヒマだからいいけど」

「良かったですね佐天さん」

「う、うん」

ということでも3人は地下街を回り、何故か途中で初春が消えてしまっ
ってこうなったのだ。

「まあ、良いか。何も起こらないし」

第二話 地下街（後書き）

次回、事件発生です。戦闘はもう少し先になります。

第三話・事件（前書き）

今回、アイツが登場します。と言ってもも本当に登場だけですけど

第三話：事件

白羽が佐天の買い物に付き合っているのと同時にツンツン頭の高校生、上条当麻かみじょうつとまもまた、地下街に来ていた。

理由は、冷蔵庫に食材が無かったためキレた暴食シスターインデックスの怒りを鎮めるために、いつか風斬かざきりと来た学食レストランを訪れたのだが

「不幸だー！何で今日に限って臨時休業なんだよ！」

と言う訳なのだ。

「とうま、もう私はお腹がペコペコなんだよ！！」

ぐるぐる、と今にも上条の頭に噛みついて来そうな顔でインデックスは上条を睨んでいる。

「分かったから俺を昼飯にしないでくださいインデックスさん」

「じゃあ、あの人が食べてると同じのが食べたいかも」

インデックスが指差す先の人食べていたのは、いつか御坂みさかにおごつてもらったあの2000円ホットドックだった。

「だめだインデックス、あれは高すぎる。あれを食う金があれば上条さんは1週間は生活できるぞ！」

「と~~~~ま〜」

ぎゃあああ、という叫び声が地下街に響いた。

遠くで聞こえた気がした叫び声に白羽は振り向いた。

「？」

「どづしたの白羽？」

「いや、何でもない」

気のせいだよな、と思いなおして先を歩く佐天に着いて行く。白羽達は服を買い終え、何処かへ消えた初春を探している最中だ。

「にしてもいないな、初春」

「うーん（初春め、わざと逃げたな！）」

と、ふらふら歩いていると、ガガガガガという物凄い音の後『ピーー』と耳を突く様な音がスピーカーから響いた。

『この地下街にいる全員に告ぐ、この地下街は俺たちが占拠し、出入り口も封鎖した。全員、速やかに中央広場に集まれ。繰り返し』

「……佐天、俺を見失うなよ」

「へっ！？はっひあー！」

「どづした？」

「なんでもない」

佐天の顔が真っ赤だったが、幸い白羽はさっきの放送の放送の事で頭がいっぱいで気がつかなかった。

「どういふ事なんでしょうね？」

「わっ！初春」

突然背後から初春が飛び出してきた。

「分からない。だけどこれはヤバイな」

どこらかともなく不良集団スキルアウトが大量に出てきて、そこにいた人たちをたちを連れて行き始めた。

「初春、佐天、隠れるぞ」

白羽たちは少し離れたところにいたので運良く見つからずに近くの店の中に隠れるとこができた。

しばらくすると、不良集団スキルアウト達はほかの場所へ去っていった。

「初春、ここの監視カメラ見れるか？」

「はい、やってみます」

そう答えると小型のパソコンを開き高速でキーボードを叩き始め、数分すると、初春は手を止めた。

「終わりました。どこの映像を写しますか？」

「中央広場の映像を頼む。あと、出入り口も」

「分かりました」

カタカタと初春が少しキーボードを叩くと画面に広場と出入り口の映像が映し出された。

「シャッターは閉まってるな。広場は……？……見張りがいない？」

「ところで白羽くん、何故こんなことをしたんだと思います？」

「大方、能力者狩りだろ。不良集団達のしそうなことだ」
スキルアウト

「ね、ねえ」

佐天がそつと2人の会話に割って入った。

「何だ、佐天？」

「とりあえず、あたしらはどうするの？」

「お前と初春は助けが来るまでここで待機。俺は……行ってスキル
アウトアウトを止めてくる」

「えっ、ちょっと待ってよ白羽」

「初春、応援を読んでおいてくれ。目立たないように少数精鋭で」

佐天が止めるのを無視して翔は1人で行ってしまった。

第三話：事件（後書き）

次回、2人が出会います

第四話：都市伝説VS都市伝説（前書き）

題名であんまり期待しないでください。そんなに戦いません。

第四話：都市伝説VS都市伝説

上条当麻は隠れていた。さっきの放送の後、不良集団達スキルアウトがわざわざ出てきて広場に行くように言ってきたが、ドサクサに紛れて近くのゲームセンターに隠れることができた。

「おい、インデックス」

……。

上条の後ろにいたはずのインデックスから返事がない。

「ま、まさか」

ゆっくり上条が後ろを振り向くと、やはりそこには誰もいなかった。そっつと上条が外を見ると、そこには3、4の不良集団スキルアウト達に連れて行かれるインデックスがいた。

(しまった。しかもあの人数じゃ勝ち目がねえ)

どうする、と考えているうちにインデックスは連れて行かれてしまった。

「くっそー！」

上条はゲームセンターを出て地下街を走り出した。とりあえず向かうは中央広場だ。

「はあ……はあ、はあ」

白羽はたった今3人の不良集団スキルアウト達を拘束したところだった。

(いったい何人いるんだ？しかも不良集団スキルアウトのくせに全員能力者って
どういうことだ)

店を出てからきりも無く不良集団が出てきて、白羽は合計で10人
くらいの不良集団を拘束していた。しかも無能力者の集団であるは
ずの不良集団スキルアウトなのに、全員がレベルは低いようだったが能力者だっ
た。

「とりあえず、応援が来るまで俺がどうにかしなきゃな」

白羽がとりあえず広場のほうへ行こうとしたその時、目の前の交差
点にまた不良集団らしきツンツン頭で高校生くらいの少年が走って
きた。白羽は知らなかったがこれは上条であり、不良集団ではない。

「げっ！」

少年がこちらに気付き、驚いた一瞬に白羽は思いつきり殴りかかっ
た。

「らあああー！」

「ッー！」

上条は間一髪で身を右にひねって避け、その勢を利用して裏拳を白
羽の背中に叩きこんだ。

白羽は前に踏み出してそのダメージを軽減させた。

(こいつ、さっきまでの奴らより強い)

白羽はコートの内ポケットから鉄の塊2つ取り出し、右手で持った。すると鉄の塊がゆっくり変形し、2つのトンファーが出来た。

「能力者！」

「メタルディフォーム金属変形ロストレベルつて言うより測定不能の方が有名か？」

ロストレベル測定不能は学園都市の都市伝説としてけっこう有名である。

「ロストレベル測定不能？確かそいつつて都市伝説だろ？」

「いや、俺実在してるし」

「じゃあ、何でその都市伝説がロストレベル不良集団スキルアウトとこんな事してるんだよ
！！」

「へー！？……まさか、あんた不良集団スキルアウトじゃない？」

「あ、ああ」

瞬間、翔は物凄勢いで土下座した。

「すみませんでした！！」

「えっ……えっつと……つまり俺もお前もお互いを不良集団スキルアウトと勘違い
していたってことか？」

「はい」

「それじゃあ、お互いさまって事で……と言っか早く顔を上げてくれ。何か5人ほどの不良集団スキルアウトさんがもうそこまで来ちゃってるんですけど」

言われて白羽が顔を上げると、確かに5、6人ほどの不良集団達はこちらに向かってきていた。

第四話：都市伝説VS都市伝説（後書き）

次回、2人が共闘します。

第六話：絶体絶命（前書き）

今回も題名は課題表現です。あまり期待はし過ぎないでください。

第六話：絶体絶命

「あつ、下がってください。これは風紀委員ジャッジメントの仕事です」

白羽は土下座を止め、上条に下がる様に言った。

「あの人数相手で大丈夫なのか？」

「はい、ギリ大丈夫じゃないです」

「……俺も手伝う」

「お願いします」

白羽は改めてトンファーを構え直し、白羽と上条は不良集団へ突っ込んだ。

怯んだ所に、顔面をトンファーで思いっきり殴り気絶し1人脱落。

「このー！」

殴った勢いを利用して回転し、後頭部に思いっきりひじ打ちをして気絶しもう1人脱落。

「うらあー！」

白羽の背後から襲ってきたヤツを上条が殴り飛ばし、そいつを白羽が手錠と足枷をしてまた1人脱落。

「くそっ！こっとなったらー！」

残る2人が念動能力テレキネシスで近くの店のイスを飛ばしてきた。

「なっ！」

その攻撃自体は大したことはなく、難なく上条と白羽はその攻撃を避けた。

上条が驚いたのは、普通は不良集団スキルアウトは無能力者《レベル0》の集まりで能力者はほとんどいない、それなのにこの2人は2人とも能力者だったからだ。

「お前たち能力者多すぎだろ！」

上条と白羽は飛んでくるイスやら机やらを避け、残りの2人の懐へ入り込み、同時にアッパーを放った。

白羽のアッパーした方は気絶しなかったがちゃんと拘束し、そのあと気絶しているだけのヤツも拘束して全員を戦闘不能した。

「ご協力ありがとうございました。えーっと」

「上条当麻だ」

「上条さん。俺は白羽翔っていいいます」

そのあとお互いの事情を話し、2人でとりあえず広場へ向かうことにした。

「……………見張りが…いない？」

「とりあえず、誰も拘束とかはされてないっばいですね」

「ああ、これからどうする?」

「とりあえず、出入り口に誘導します」

それから、白羽と上条で広場にいた人達を出入り口に連れて行った。途中、数人の不良集団達に遭遇したが、先頭に来た不良集団達は白羽が、最後尾に来た不良集団達は上条が、それぞれ撃退した。

「行きます」

白羽が出入り口のシャッターに手を触れ、能力を発動した。ゆっくりとシャッターが変形していき、完全に出入り口が開いた。

「さあ、慌てずに出て行ってください」

人達は我先にと出ていたが、幸い負傷者は1人もいなかった。

「おお、翔に小萌先生とこの子じゃん」

出入り口を出た所には警備員アンチスキルが待機していて、白羽の知り合いの警備員アンチスキル、黄泉川愛穂あいはが声を掛けてきた。

「あつ、黄泉川さん。上条さん知り合いなんですか?」

「あ、ああ。うちの高校の先生なんだ」

「そうなんですか」

「で、翔。中には何人くらい残ってる？」

「ジャッジメント風紀委員が1人、一般人が1人、スキルアウト不良集団達の指示に従わなかった一般人が不特定数、あとは不良集団達がかなりの数います」

「そっか、それならアンチスキル警備員が行くのはマズいじゃない」

2人の会話に上条とその隣に居るインデックスが首をかしげている。

「なあ翔、何でアンチスキル警備員が行くのがマズいんだ？」

「アンチスキル警備員は基本的にパワードスーツ駆動鎧がないと普通の人なので、多人数と戦うのはムリです。さらに、パワードスーツ駆動鎧を着ていると一発でアンチスキル警備員だとバレて、人質を取られる恐れがあります。だからアンチスキル警備員が行くのがマズいんです」

「そうなのか」

「やっぱり、少数精鋭のジャッジメント風紀委員が行くのがベストじゃないですか？」

「翔もそう思うじゃん？」

「ええ、とりあえず応援を呼んでおいたんで………そろそろ来てもおかしくないんですが……」

そのとき、突然白羽達の所に人が現れた。

「白井と………何で御坂さん？」

第六話：絶体絶命（後書き）

インデックスは流石にここで見せ場はないので、お留守番です。

第六話：再会

白井と一緒に現れたのは学園都市第3位の超能力者《レベル5》、
御坂美琴みさか みことだった。

「御坂！」

「短髪！」

「アンタ達！」

上条とインデックスと御坂は何やら知り合いらしく、険悪なムード
になっていた。

「え〜っと2人はお知り合いですか？」

「そ、そんな感じだな」

上条が引きつった顔で答えた。

「で、御坂さんは何でここに居るんですか？まさか風紀委員ジャッジメントにはい
った訳ではないですね？」

「え〜っと、白羽くんだったっけ？今、風紀委員ジャッジメントに誰もいなかった
んで来たのよ」

「そうですか。超能力者《レベル5》にご協力いたたけると助かり
ます」

「じゃあ、そろそろ行きますのよ」

白井がそう言い、白羽たち（インデックス以外）は地下街に入っ
て行った。

白羽が能力で出入り口を再び閉じ、4人はとりあえず2組に別れ、
初春と佐天を救出に行った。

「白羽くん、初春と佐天さんはちゃんと無事ですよね？」

「初春が監視カメラを見てるからたぶん捕まっては無いと思う」

「ねえ、何で私は黒子となの？白羽君」

「えっ、単純に出入り口を突破できるのが俺と白井だけで、御坂さ
んと上条さんが仲悪そうですし……」

「私も超電磁砲レールガンで壊せるけど……」

「でも、あれ危ないじゃないですか？それに俺、御坂さんの能力と
相性悪いですし」

渋々と言った感じで御坂は白羽の提案を受け入れた。

「じゃあ、白羽くん。危なくなったらちゃんと応援を呼んでくださ
いのですの」

「ああ」

そう言って白羽たちは白井たちと別れた。

初春と佐天は捕まっておらず、しばらく探しているとあっちの方から出てきた。

「白羽くん！と…上条さんですよね？」

「ああ」

「とりあえず早く行きましょう。残ってる人が誰もいないのは監視カメラで確認しました。それに、残りの不良集団スキルアウト達が半分ずつでここを見回りしていて、今ちょうどその半分が私たちの後ろにいるんです」

「な！」

それは予想外のことだった。白羽達は不良集団スキルアウトがさっきまでの様にバラバラに動いているという前提で来たので、白羽は上条と来たのだ。

「じゃあ、とつとと行こうぜ」

白羽が確認を取ると、初春はコクリと頷いた。

「それにこの不良集団達は少しおかしいんです。何故か…ほぼ全員が能力を使用しているんです」

「それは俺も思った。15人位拘束したけど、ほとんどが能力者だったしな」

「ならより早く行ったほうが良いな」

上条が言い、白羽たちは出入り口に向かって行こうとした。

が

「おい！お前たちか！広場のヤツらを逃がしたのは！」

後ろから思ったより早く不良集団達がやってきて、白羽たちに向かって怒鳴った。

「初春、白井達に応援を頼んでくれ」

「ダメです。白井さんたちも今戦っています」

「そうか……上条さん…レベルは何ですか？」

最初に戦ったときに能力を使わなかった事で答えは予想出来ていたが、藁にもすがる気持ちで白羽は上条に尋ねた。

「ゼロだ」

第六話・再会（後書き）

次回は白羽の見せ場です。

第七話：測定不能（前書き）

今回、測定不能についての説明がでます。

第七話：測定不能

結果として、白羽たちは捕まった。白羽と上条が戦ってる隙に初春と佐天は逃げる予定だったのだが2人だけでは大量の不良集団達を止められず、結果として全員捕まってしまった。

今は全員白羽の持っていたカギ穴のない手錠を掛けられ、武器を取られ、4人の不良集団に囲まれている。

「おい！どうやってこの手錠を外すんだ！！」

不良集団達の1人が怒鳴った。さっき戦ったときに他の不良集団達は白羽に手錠と足枷をされ動けなくなっていた。しかも、その手錠は白羽たちが掛けられているの物と同じでカギが無く、白羽の能力が無ければ外すことができない。

「……」

もちろん誰も答ええない。

「答えないと……そうだな、こいつの顔切り刻むぞ！」

「やっ」

さっきの不良集団が佐天の顔にポケットから取り出したナイフをつきたてたそのときだった。

「やめろ！……！」

白羽の叫び声が響き、佐天にナイフを突き立てていた不良集団の手

からナイフが2メートル位吹き飛んだ。

「ッ！テメエ何しやがる！！」

不良集団のナイフを吹き飛ばしたのは白羽だった。白羽が手錠を變形させ不良集団に投げつけたのだ。佐天はその隙に白羽の後ろに逃げた。

「な、何で……」

上条が驚いたのは、白羽の能力のスピードとだ。さっきまではゆっくりと變形していたのに今は物凄いスピードで變形していた。

「白羽君の異名を知っていますか？上条さん」

「ロストレベル測定不能だったよな」

「はい、その由来がこれなんです。ロストレベル測定不能は感情によってレベルが変化するんです。だから測定不能なんです。今は強能力者《レベル3》ですかね」

上条は自分の右手を見た。そこには幻想殺し《イメージブレイカー》という、異能の力なら神様の奇跡システムでさえも打ち消す力が宿っている。だが、今はその力も役に立たない。

神様の奇跡システムでも壊せるのに、今自分の手を縛っている手錠でさえ壊すことさえできず仲間を守るとこの出来ないその右手を睨むように見つめた。

「お前1人で俺達4人を倒せ」

「うつせえ!!……そんな事は関係ない。お前たちは俺を怒らせた」
「……殺れ」

その一声で3人の不良集団達は白羽に向かって行った。

1人目の拳が白羽に届く寸前に白羽は体を左にひねりながら前に踏み込み回転で拳を避け、その勢いで後頭部へ裏拳を叩きこんだ。後遺症の残る可能性のある文字通りの必殺技だ。その戦い方はそれまでの戦い方とは違う、相手を倒す戦い方だった。

「ッア！」

白羽は次に来た1人に裏拳の勢いでそのまま上段蹴りを決めた。

「うらああ！」

その次に来た1人が背後からパンチを白羽に繰り出すが、横から飛び込んできた上条のタックルで怯んだ隙に白羽が不良集団の顎に全体重を乗せたアッパーをくравせ気絶させた。

「なっ……」

残ったのは佐天にナイフを突き付けたヤツだけだった。

「くそ!何なんだよテメエエエエエエエ!!!」

残った不良集団は発火能力者だったらしく、1メートル位の火の球を白羽に投げつけてきた。

「なに、ただの都市伝説だ」

白羽はそう言って火の球を避けようとして気付いた。

(ツツ！佐天！)

そう、白羽が火の球を避けるところに居る佐天に当たってしまうのだ。

「ツクソ！」

白羽は齒を食いしぼり、火の球に背を向けた。

「白羽！！！」

佐天の叫びと共に火の球が白羽に辺り、白羽が倒れた。

「ははは！ははははは！」

「何笑ってやがんだ三下！」

その笑い声はそこで途絶え、起き上がりながら上条が告げた。

「白羽の代わりに、テメエは俺がぶっ飛ばす！」

第七話：測定不能（後書き）

一応「お前は俺を怒らせた」と「ただの都市伝説だ」が決め台詞です。自分でもわかるほどカッコ良くないです。もっという決め台詞とか提供していただけるとありがたいです。

第八話：置き去り（前書き）

上条さん好きの方すいません。上条さんのバトルが少ないです。

第八話：置き去り

上条は地面を蹴って爆発的勢いで不良集団に接近した。

「あああああああああ！！！！！！！」

上条の接近に気付いた不良集団が火の球を上条に向かって投げつける。上条は手錠によって縛られた手でその火の球を殴った。火の球が上条の右手に触れると同時に火の球が弾け飛んだ。が、幻想殺し《イマジンプレカー》のない左手が焼ける痛みを襲われ少しひるんだ。

「それが、どうした！」

その痛みをこらえて上条がまた爆発的に前に踏み出す。

「あああああああああ！！！！！！！」

また不良集団が火の球を投げつけるが上条の拳に当たった瞬間に弾け飛んだ。今度は左手の痛みを怯まずにもう一步踏み出して、不良集団に全体重を乗せたパンチを繰り出した。

「あ、あああああ……ああ」

2メートルほど転がってようやく不良集団は止まった。

「う、うう」

白羽が起きるとそこは見覚えのある病室だった。起き上がると背中がズキズキと痛んだ。外は日が高く昇っていた。

「やあ、気がついたかい」

出入り口がウィーンと言う音とともに開き、カエル顔の医者が病室に入ってきた。

「あつ、カエルさん」

「その呼び方は止めてほしいんだけどね？」

カエル顔の医者は今の状況について白羽に説明してくれた。

「つまり、あの不良集団スキルアウト達は上条さんと、御坂さん、白井のおかげで全員捕まって、俺は約半日眠っていて今は朝の11時なんですけどね？」

「ああ、そうだよ。もうすぐ退院できると思うから安静にしているね？」

カエル顔の医者はそう言っただけで病室を出ていった。そして、それと入れ替わりに佐天が入ってきた。

「白羽…えっと、その……………ありがとう」

「?…何が?」

「白羽さ…あの時あたしを助けなかったら……………そんな怪我することもなかったし……………」

佐天はもじもじとして下を向いて言っている。

「何言ってるんだよ。お前がこうなったら悲しむ人がいるだろ。親とか、兄弟とかさ……………俺さ、置き去り《チャイルドエラー》だし、大して悲しむ人もいないしな」

「……………に言ってるの」

「え?」

「何言ってるの!…白羽がそうなって悲しむ人はいるよ!初春だつて白井さんだつて……………私だつて……………だから、無茶はしないで!」

「……………分かった。無茶はしない」

「うん…よろしい」

佐天がいつもの様な笑顔で言った。

ドクン

白羽の顔が火照り、いつもの何倍も心臓の音が大きくなった気がした。

(え…何だ？今の)

その時、病室の出入り口が突然開き、誰かが飛び込んできた。

「翔っっっっっっっ！！！！！！！！！！」

第八話：置き去り（後書き）

次回からはしばらく平和な感じですよ。

第九話：桜野美鈴（前書き）

今回はオリキャラが3人も出ます。

第九話：桜野美鈴

「美鈴ちゃん!？」

白羽の病室に飛び込んできたのは白羽達のクラスメイトで風紀委員、
佐天のルームメイトの桜野美鈴なぐさのみずすずだった。

「あつ……………佐天ちゃん……………」

「えっと……………どついう事?」

どついう事、と言うのは普段は桜野はこんな感じではなく、おとなしく清楚な感じなのだ。しかも普段は白羽の事を『白羽君』と呼ぶ。

「え〜っと、私……………どつちかって言つとさっきのが素なの」

「ええ!〜!」

「それと、アレの事秘密にしておいてね」

「うん……………」

「ありがとう。で、翔」

ゆっくりと、桜野が白羽の方を向きながら言った。

「はい」

「私……………わたし……………」

目尻に涙が溜まっていき、やがて表面張力が限界に達して桜野の目から涙がこぼれた。

「心配したんだからあああああああ！……！！……！！」

(……白羽、メツチャ悲しむ人いるじゃん！)

「ゴメン！だから泣くな」

慌てて白羽が止めるが、桜野は泣き止まない。

「うっぐ……じゃあ……ひっぐ……今日一日私の言う事聞いて」

「分かった。分かったから」

「うん……えっぐ……分かった」

やっと桜野は泣くのを止めた。

「じゃあ……1時にこの病院の玄関に来てね、佐天ちゃんも」

「え！、私も!？」

「嫌なら良いけど」

「嫌じゃないけど……」

「じゃあ、ちゃんと来てね」

そう言って桜野は佐天を連れて病室を出て行った。

白羽はその後、安静を条件に退院することができ、今は病院の玄関で桜野と佐天を待っている。

「白羽君」

「白羽」

そこへ桜野と佐天がやってきた。

「来たな。で、何処へ行くんだ？」

「うーんと……えーっと……何処行く？」

「考えてなかったのか」

数秒の沈黙の後、佐天のケータイが鳴りだした。

「あ、初春からだ。もしもし、白羽と美鈴ちゃんというよ。うん、うんうん、分かった行く行く」

「何だったの？」

「今からウェブカタログ用の写真を撮影するんだけど人数が足りないから来ないか？だって」

「私行きたい！」

「じゃあ俺は帰るな」

「男子の人数の方が足りてないって言ってたから帰っちゃダメだよ
白羽」

「…じゃあ、適当に誰か呼ぶか」

そう言って白羽がケータイを取り出し、誰かに電話をかけ始めた。

「もしもし、涼……ヒマか？。そうか、おう分かった。理由と場所は後で地図を送るから」

一度ケータイから耳を離し、他の番号に変えてもう一度通話をする。

「もしもし、じゅん。…お前今ヒマ？…うん、なら来い。場所は後で地図送るから…え？お前は絶対喜ぶから。じゃあ」

「前田と関原？」

「ああ、あいつらどうせヒマしてるしな」

「じゃあ、行こうか」

目的地のビルには初春、白井、御坂、固法、婚后、湾内、泡浮がいた。

「佐天さん、白羽くん、桜野さん」

「結構集まってたんだね、女子は」

「常盤台は女子中なので……」

「俺が後2人だけ呼んでおいたので大丈夫じゃないですか？」

そんな話をしていると後ろから声がかかった。

「おお！女子がいっぱい！！」

「うるさい変態。翔、地図ちよつと間違ってる。」

先に喋ったのが『じゅん』こと関原純二。せきはらじゅんじ大柄な体格で元気な変態だ。その関原にツットミを入れたのが前田涼だ。まえだりょう前田はどちらかと言つと小柄な方で、いつも何と無くボーっとしている。2人共白羽たちの同級生で関原は一般生徒だが、前田は白羽と同じ風紀委員1ジャッジメント77支部の所属だ。

その後全員は自己紹介をした。

「じゃあ、男子陣はまたセットで」

そう言つて女子たちは建物の中の更衣室へ入って行った。

「じゃあ、俺たちも行こうか？」

「行こうぜ、行こうぜ、早く行こうぜ！」

「そう言えば、さらつと地図の事スルーするなよ。」

そんな事を言いながら白羽たちも建物の中の更衣室に入って行った。

第九話：桜野美鈴（後書き）

みなさん御察しの通り、桜野は佐天の恋敵役です。

第十話：誰が一番（前書き）

この話は、単に変態の作者がやりたかったただけではなく、なんか息抜きの回がほしいな〜と欲していたからでもあります。

第十話：誰が一番

白羽たちは特に迷ったりすることなく水着を選び、今は最先端技術で実体化された海で女子たちを待っている。

「なあ翔、涼。誰の水着姿が一番楽しみ？」

突然関原がお決まりのような話を始める。

「初春。」

「ええ！涼、お前あの歩く花瓶が好きだったのか！？」

「うん、それが？。」

別に何ともないように前田は答えた。

「じゃあ、翔は？」

「うん……そう言うじゅんは誰だよ？」

「俺か？おれはな。」

待ってましたとも言いたそうな顔で関原が答える。

「あの婚后さんって人！」

「理由は？大体分かるけど。」

「もちろんあのバストだよ」

「言うと思った」。

白羽と前田の声がハモった瞬間に後ろから声がかかった。

「……お待たせしました」

白羽たちが振り向くと、女子たちがいた。初春がワンピースで、御坂と泡浮がスクール水着風の水着で、他は全員ビキニだった。

「ゴメン翔、涼、前言撤回。俺、固法さんにする」

関原がそう言った理由は明白だった。簡単に言うと、固法の方が婚后より大きかった。ただそれだけだ。

「え、何の話してたの？」

「誰の水着姿が一番楽しみかっていう話です」

「そう、関原くん。ありがとう」

固法が苦笑いを浮かべながら言った。

「白羽君は誰なの？」

その話には桜野が食いつき、白羽にキラキラとした目で聞いた。

「うん……」

その答えを初春や白井、佐天もひそかに聞いてた。

「うっ……やっぱ美鈴かな？」

「ありがとう、嬉しいわ」

（そうなんだ……）

佐天の切なそうな顔を見て初春が質問をした。

「しっ、白羽君！なんで桜野さんなんですか？」

「ん？一番美人だから」

「そ、そ「それは聞き捨てなりませんわ」婚后さん!？」

初春のフォローに割って入ったのは婚后だった。

「一番美しいのは私ですわ!!!」

「……はい。それでいいです」

「分かればよろしい！」

その場にいた全員が絶句していた。

「そういえば桜野って翔以外の男子とあんまり仲良くないな」

「それに翔は桜野を下の名前で呼ぶよな。」

「まさかお前から付き合ってるんじゃないだろうっな〜?」

「なっ、何言ってるんだよ!」

白羽があたふたと否定したが、その隣で桜野はうつとりしていた。

「私と白羽君が……うふふふふ?」

「とっ、とりあえず落ち着いてください」

ついに喧嘩っぽくなってきた白羽たちに初春が叫んだ。

「……………ここは年上の私が…」

そう言って御坂が白羽たちを黙らせようとしたその時だった。

「うるさい!」

固法の怒声がスタジオに響いた。

「貴方達もう少し静かにできないの!??」

「す、すいません」

「分かったならそれでいいわ、さあ海なんだし楽しみましょう」

第十話：誰が一番（後書き）

このほのぼのな感じは次回までです。

第十一話・料理は愛情ですよ（前書き）

これでほのぼのな感じは終わりです。

第十一話：料理は愛情ですよ

「…………ヒマだな」

白羽は砂浜から少し離れた木の下で寝転がっている。他の者は海で遊んでいるのに白羽が寝転がってヒマをしている理由は簡単だ。

「あんな無茶するんじゃないかな……」

白羽は一樣安静にしていなければならぬ身なので、余りはしゃげないのである。

「のどか湧いてない？白羽」

「ん、佐天」

佐天が『トロピカルベジタブルジュース』を書かれた怪しげなジュースを白羽に差し出した。

「ごめんね、何か……」

「気にすんなよ」

「ねえ、白羽ってさ…………美鈴ちゃんが好きなの？」

白羽が危つくジュースを噴き出しかけた。

「なっ、何言いだすんだよ！」

「だってさ、美鈴ちゃんが一番かわいいとか言ってたし」

「もしそうなら……お前はどっと思っ？」

「そうだな」

佐天がじっと考え込む。

ドクン

顔が火照り、いつもの何倍も心臓の音が大きくなった気がした。

（まただ）

「ムカツクね」

「へ！？」

「だ・か・ら、ムカツクの」

「そうか……じゃあ、そうじゃないって事で」

そう言っつて白羽はニッコリと笑った。

その後、誰も昼食を食べていない事が分かり今全員で昼食を食べようと言っ事になっている。景色はさっきとは変わり、山中のキャンブ場的なところだ。

「で、何を食べたいのか意見がある人は挙手して」

「はい！」

婚後が速攻で手を上げた。

「私はカレーが食べたいです」

「あつ私も」

「私達も」

私も、俺も、と全員の意見が一致した。

「じゃあ、役割分担ね。この中に発火能力者パイロキネシストいない？炊飯係になつてもらいたいんだけど」

「はい！俺そうです！！！」

「じゅん、お前は爆破するからダメ。」

「それなら、お姉さまのIHでどうでしょうか？」

「それで行きましょう。次は調理の係ね。出来る人は何人いる？」

それで手を上げたのは白羽、佐天、初春、桜野だった。

「じゃあその四人で。他の人は私に着いてきて」

「GO!GO!ReadyGO!DA・I・SU・KI, Yes」

「！」

白羽たちは調理係なので具を切っていた。

「ふふふふ」

「何よ初春……何か怖いよ」

「佐天さん、D・A・I・S・U・K・I、って誰の事を言ってるんですか？」

その言葉で、佐天の顔が真っ赤になった。

「だっ、誰って……そりゃ……私の好きな人だよ」

「白羽くんですか？」

その言葉でさらに赤くなった。

「なななな何でそそそそうなるのよ」

「だってバレバレですよ？」

「そ、そう？」

「はいバレバレです。佐天さん、ここでポイントを稼いでおきましょう。佐天さんは料理が得意なんですから」

「それっていいのかな？」

「はい。男の子は家庭的な女の子が好きなんですよ」

「でも、なんかあれに勝てる気がしないんだけど」

佐天が指をさす方向には、まるでストラップのように切られた人参を持った桜野がいた。

「すげえ、なんか人参が彫刻みたいだな」

「私、料理は得意だから」

「……………料理は愛情ですよ！佐天さん！！」

「愛情でも勝てる気がしないんだけど……」

そんなこんなで出来たカレーを食べて、撮影は終わった。

第十一話・料理は愛情ですよ（後書き）

次回はそろそろキャラ紹介でもしようかと思えます。

オリキャラ紹介（前書き）

キャラ紹介です。身長、体重がおかしい場合は言ってください。

オリキャラ紹介

白羽翔 しろはかける

この小説の主人公。身長162?、体重44kgで中肉中背。風紀 ジャック委員177支部に所属。置き去りとして学園都市に捨てられた。学園都市の都市伝説とされる測定不能で、感情によってレベルが変化する。普段は低能力者 レベル1で、最高は大能力者 レベル4まで到達したことがある。過去の嫌な思い出を思い出すことで異能力者 レベル2までは自力でなることができる。能力は金属変形 メタルデIFORM。右手と、右手に触れている金属に触れている金属の形を変形させる事が出来る。基本的にトンファーと手錠を組み合わせて戦う。普段から着ているコートには無数のポケットがあり、その中に入れた金属も稀に使う。

桜野美鈴 さくらの みすず

白羽たちのクラスメイト。身長150?、体重38kgでかなり小さい方。学校では物静かな様に装っているが、本当はかなり甘いん坊な性格。白羽と同じく風紀委員177支部の所属。能力は不明。

関原純二 せきはらじゅんじ

身長168?、体重48kg。元気な変態。

前田涼 まえだりょう

身長160?、体重42kg。言葉の最後に「。」をつける独特の

喋り方をする。白羽、桜野と同じく風紀委員ジャッジメンの所属。

オリキャラ紹介（後書き）

次回からはシリアスに戻ります。

第十二話：幻想御手へレベルアップ（前書き）

シリアス展開に戻ります。

第十二話：幻想御手へレベルアップ

「非常にマズい事態よ」

「何かあったんですの？固法先輩」

ジャッジメント
風紀委員177支部に所属する全員が支部に集められていた。

「みんな、レベルアップ幻想御手を覚えているかしら？」

「レベルアップ幻想御手……」

レベルアップ幻想御手、それは以前白羽の測定不能と同じく学園都市の都市伝説とされた、簡単にレベルを引き上げる音楽ファイルの事である。

そのせいで能力者による犯罪が激増し、この177支部からもかなりの負傷者がでた。

「それが…どうなったんですの？あれはもう流通していないはずですよね？」

「実は、そのシステムが見直されて秘密裏に研究されていたらしいの。その製造法が、先日の地下街占拠事件で警備員をアンチスキル引きつけて警備が手薄な時に不良集団に盗まれ、今も学園都市じゅうに広まって行っているわ。スキルアウト

しかもその幻想御手はまだ未完成でどんな副作用があるか分かっていないらしいの」レベルアップ

白羽たちが巻き込まれたあの事件はただの能力者狩り《スキルハン

ト》ではなく、レベルアップ幻想御手強奪のための罠だったのだ。

「まずいんじゃないですか？それ」

「ええ非常にマズいわ。しかもこの幻想御手レベルアップは前のような音楽ファイルではなく、錠剤なの。さらに、能力を保っておくためには継続的に服用しなければならぬので不良集団の資金源スキルアウトとなっていて聞いたわ」

「まるで麻薬ですね……それで、俺たちはどうすればいいんですか？」

「とりあえず、能力者狩りスキルハントが流行る可能性が高いからパトロールの強化をする事になっている。それだけよ」

「それだけですか？」

「ええ、幻想御手の流通を止めるのは警備員アンチスキルに任せることになってるらしいわ。とりあえず、手が空いている人はパトロールをしてきて。解散！」

そう言われて、白羽たちはパトロールに出た。

「くそつ、何人出てきやがんだよ」

白羽は走っていた。しかもその後ろには8人ほどの不良。

「オイ待てよ！腰ぬけ風紀委員ジャッジメント！！」

「うるせえ！そういう事はタイムン一対一でかかってきてから言え！！って何か言い覚えあるぞこの台詞」

詳しくは第一話を読み直しましょう。そして第一話よろしくコートの内ポケットから携帯を取り出し、支部に電話をかけた。

『はい、ジャッジメント風紀委員177支部ですの』

「もしもし白井！助けて！！」

『……また、追われていますの？』

「そうだから早く助けに来て！あぶね！！」

叫びながら白羽がテレキネシス念動能力で飛んできた鉄マイプやら廃材やらを避ける。

『分かりましたの。もう少し頑張って逃げていてください』

「よろしくうっおっと！！」

それからしばらく不良たちの猛攻をひたすら避けていると、テレポ空間移動で白井が現れた。

「まったく、本当に馬鹿ですね。白羽君はあ」

その声には物凄く怒りが込められていた。

「御免なさい白井様」

「何度めだと思ってますのお?」

「さっ3回目?」

「5回目ですよ!今日だけで何度呼び出しする気ですよ!?!?」

「あの…マジすいません、マジすいませんから…先にあちらの不
良さんたちを蹴散らしてください。お願いします」

数分後

「もしもし白井!もう一度助けてください!」

もう数分後

「もしもし、うんまた。本当にこれ最後だから助けて」

その後、白羽はもう2度白井にSOSを出したのだった。

第十二話：幻想御手へレベルアップ（後書き）

次回はオリキャラたちが頑張ります。

第十三話：有能力不良へバッドスキル（前書き）

上条さんはまたもう少しすると出てきます。

第十三話：有能能力不良へパッドスキル

白羽が不良たちから逃げ回っているころ初春は

「あの時の白羽はカッコ良かったな」

パトロールをしていて偶然佐天に出会った初春は、一緒に街を歩いていた。

「身を盾にして佐天さんを守りましたしね」

「常にあのカッコ良さならいいのにな」

「普段がアレですしね」

そんな話をしていると、気弱そうな高校生くらいの少年が初春たちの所にやって来た。

「あっあの」

「はい。なんですか？」

「君、ジャッジメント風紀委員だよな？」

「はい。そうです」

「ちょっとここに来てくれます？」

そう言つて少年は初春たちを裏路地に連れて行つた。

「同じです」

少年が立ち止つたのは裏路地のご真ん中だった。

「はい？」

「おいおい風紀委員ジャツジメンだからつてこんなガキ連れてくんなよ」

「俺達にロリコン趣味はねえぞ」

そう言いながら近くのわき道からぞろぞろといかにも悪党面の少年たちが現れた。

「なっ……何なんですか貴方達！」

「俺たちか……有能バッドスキル不良とでも呼べよ。有能おれたち不良はもう前みたいな雑魚じゃねえんだよ。だから、今まで世話おまえになつた分風紀委員らにお返ししてやろうと思つてな……風紀委員狩り《ジャツジメントハント》を始めたんだ」

有能不良が初春たちに手を伸ばしたその時だった。

「ほんと下種ね」

「ッッ！」

声が聞こえ、パチンコ玉が有能バッドスキル不良の手をはじいた。

「美鈴ちゃん！」

「2人共！早く逃げて！！！」

ポケットから大量のパチンコ玉を空中に投げ、それを能力を使って自分の周りにドーム状に浮かせた。

桜野の能力は風力使い《エアロシューター》、強能力者《レベル3》。能力がそれ程強力ではないため、パチンコ玉を武器にしてそれを補っている。

「はっはい！」

「きゃっ！」

初春はその隙に有能力不良の間をぬって逃げ出したが、佐天は捕まっていた。

「佐天さん！！！」

「良いから初春ちゃんは誰かを呼んできて！佐天ちゃんは私が助ける！！！！！」

「はい！」

初春はそのまま裏路地を表通りに向かって走って行った。

（強がりはこちらまでよ美鈴。佐天ちゃんを助けるを最優先）

自分に言い聞かせて桜野は有^{バッドスキル}能力不良たち^{バッドスキル}に突っ込んでいった。

(なんでこんな所にも！)

初春の前には3人の有^{バッドスキル}能力不良が立ちふさがっていた。その先頭の有^{バッドスキル}能力不良が言った。

「残念だったなお前らが逃げないように見張っ」

「後ろがガラ空きですの。」

突然、先頭の有^{バッドスキル}能力不良の後ろから白井の声が聞こえた。

「!!!」

有^{バッドスキル}能力不良が後ろを振り向くが、そこには他の有^{バッドスキル}能力不良しかない。
い。

「なんてな。」

今度は前から声があるが、そこには初春しかない。
そして、その数秒後に先頭の有^{バッドスキル}能力不良の頭に物凄い勢いの踵落と
しが落ち、有^{バッドスキル}能力不良は白目をむいて気絶した。

「で、何をしてるんだ？お前達。」

「前田くん」

踵落としを落としたのは前田だった。

「おい！州!!!」

「大丈夫か？」

残りの有^{バッドスキル}能力不良が心配そうに声を掛けた。

「今までよくもやってくれたな！！」

「！」

後ろの方の有^{バッドスキル}能力不良の怒声に前の方の有^{バッドスキル}能力不良が慌てて振り向くが、後ろの有^{バッドスキル}能力不良は逆に驚いている。

「バカだろ。気付けよ俺の能力だつて。」

今度は上から声がして、有^{バッドスキル}能力不良たちが上を向くがそこには誰もいない。

「がつ！！」

代わりに前田のアップパーが有^{ボイスチェンジャー}能力不良の顎に突き刺さり、気絶した。前田の能力は音声変換、異能力者《レベル2》。自分の声を自分の半径3メートル以内ならばどこからでも発音することができる能力で、白井や有^{バッドスキル}能力不良の声をマネしたのはただの特技だ。ちなみに腹話術もできる。

前田は能力があまり戦闘向きではないため、白羽と同レベルの体術が使える。

「11のー」

「1対1なら能力もいらねえよ」

最後の有^{バッドスキル}能力不良が殴りかかるが前田が懐に入ってパンチを決め、そいつを沈めた。

「ま、前田君…どこから来ました？」

「ん？……屋根から。と言つか何かあった？」

「あっそつです！佐天さんと桜野さんが…」

事情を聞いた前田がその場所へ行ったがもうそこには誰もいず、代わりに一枚のコピー用紙が落ちていた。

第十三話：有能力不良へバッドスキル（後書き）

次回もオリキャラが頑張ります。

第十四話：仲間（前書き）

投稿少し遅れました。どうしても関原の能力名が思いつかなくて…

第十四話：仲間

「ジャッジメントハント風紀委員狩りですって!？」

固法は8人ほどの有能力不良に囲まれていた。

「ああ、そつだよ。これからはお前らジャッジメント風紀委員を狩るんだよ」

「じゃあもう能力者おそひは安心ってか？」

突然、固法の周りにいくつものスーパーボールが飛んで来た。

「固法さん！ふせてください!!」

その言葉に反応して固法が伏せた瞬間パチンと言う音がし、そのスーパーボールが爆発した。土煙が上がりそれが消えた時、固法の前には関原が立っていた。関原の能力はラバーボム、大能力者レベル4。自身が触れたゴムを爆発させる事のできると言う能力だ。

「関原くん!!」

「どもつす」

「テメエ何もんだ？」

「俺？俺はただの変態」

関原の変態宣言に固法律を含め、その場にいた全員が硬直した。

「すつきだつらけ」

関原がウエストポーチからスーパーボールを有能バッドスキル不良に向けて投げつける。関原が指をパチンと鳴らすと空中でスーパーボールが爆発し、有能不良《バッドスキル》《たちをを吹き飛ばした。

「（逃げましょう。固法さん）」

小声で固法を呼び、土煙に紛れて関原たちは逃げだした。

「ありがとう。関原君」

関原と固法は風紀委員177支部に戻ってきた。見回りに出ているので他には誰もいない。

「いいえ、俺は女子なら誰でも助けるんで！」

「ははは……で、関原君あれは何か知ってるかしら？」

「あいつらすか？あいつらは有能バッドスキルとか名乗ってるやつらで固法さんも聞いた通り、風紀委員を狙ってボコツたりしてるらしいです。まあ、全部聞いた話なんですけどね……」

「有能バッドスキル不良……とりあえず全員に風紀委員狩り《ジャッジメントハント》の事を伝えないと……」

固法が支部の電話から電話をかけようとしたその時だった。

「固法先輩！」

「前田君？どうしたの」

血相を変えた前田が駆け込んできた。

「桜野と佐天がさらわれたって初春が。」

「なっ！」

「今の本当か？涼」

続いて白羽と白井も戻ってきた。

「ああ、それでこんなもんが落ちてた。」

前田が一枚のコピー用紙をポケットから取り出し、白羽に手渡した。

「何だよこれ……」

「奴らの居場所の地図と……」

そのコピー用紙には有能バッドスキル不良たちの溜まり場らしき場所の地図と、傷だらけになつた桜野の写真だつた。

「あいつら……ふざけやがって……」

「行くのか？。」

「当たり前だろ」

「待てよ」

白羽を引きとめたのは意外にも関原だった。

「何だよ。じゅん」

「有能あいつの不良は総勢150人を超える大所帯だぜ。お前1人で大丈夫なのか？」

「可能不可能じゃねんだよ。たとえムリでも俺は行く」

それを聞いて何故か関原が手を額に当てた。

「はあ、そういう意味じゃねえよ。一緒に行つてやるつか？つて言つてんだよ」

「あ、それ俺も。」

「私もついて行つて差し上げますわ」

「私も行くわよ」

「みんな……ありがとう」

言い終わった瞬間、誰かが支部の中に入ってきた。

「白羽君……はあ……私も……忘れないでください」

「初春……（しまった置いてきたの忘れてた）。」

「ああ、お前もな」

「みんなとりあえず呼べるだけ応援を呼んでみて、とりあえず20分後にこの地図の場所に集合で、解散！」

第十四話：仲間（後書き）

はい、関原の能力名が大惨事でしたね。作者だってどうにかしたかったんですけど……はい、言いわけですね。すみません。これからは精進しますのでよろしくお願いします。

第十五話：突入（前書き）

今回、殴りこみです。

第十五話：突入

「これで全員かしら？」

その場に集まったのは白羽、関原、白井、固法、その他風紀委員ジャッジメントが2名だった。

白羽はコートを2枚着、関原は5つのウエストポーチを装着、白井は鉄矢を入れた物をマシンガンの如くまとう、と言った戦う気満々のフル装備だ。

バッドスキル有能不良の溜まり場は裏路地にあり、その一番奥が本拠地らしい。

「そうみたっすね」

「じゃあ、行きましょう」

白羽たちが有能不良バッドスキルの領地テリトリーに入るとわらわらと有能不良達バッドスキルが集まってきた。

「何だよテメエら？」

「俺達？俺達は、風紀委員ジャッジメントだ」

「ああ、さっき連れてこられた奴らの仲間か」

「さあ、佐天と美鈴を返してもらおうか」

「何言っただテメエ、俺達全員をブハッ！」

バッドスキル有能不良の話でイライラが限界に達した関原が話している有能不良バッドスキル

不良の顔面に蹴りをお見舞いした。

「前置きが長げえんだよ脇役！」
エキストラ

それが開戦の合図となった。

「全員吹っ飛べ！」

全員で一固まりとなって向かってくる有能不良バッドスキルに向かって3つのスーパーボールを投げつけた。

「全員伏せる！」

味方が伏せたのを確認してパチンと指を鳴らし、スーパーボールを爆発させる。

バッドスキル
轟音と共に有能不良達が吹っ飛びその隙に白羽達が奥に進む。

「おい！名前知らねえ奴ら！！！」

「はい！！！」

「ここたのんだ！」

それだけ言って白羽達は奥へと走って行った。

「え！ちよっ！！！」

そんな事を言っている間に復活した有能不良達が襲いかかって来バッドスキル
て、結局名もなき風紀委員は入り口で有能不良を食い止めておくバッドスキル
ジャッジメント

役になった。

「お前達が俺達の溜まり場を荒らしてくれてるって言う風紀委員か
ジャッジメント
？」

現れる有能バッドスキル不良を倒しながら進むと、幹部っぽい奴が現れた。

「だったらなんだ？」

「そうだな……ぶっ潰す」

良い終わった瞬間そいつが消え、白羽たちの背後に現れた。

「テレポーター空間移動能力者！」

「俺はもう大能力者《レベル4》には達してるぜ！」

「ならば私がお相手しますわ。皆様は先へ」

「白井……」

「私を誰だと思ってますの？」

白羽達は白井を置いてさらに奥へと進んで行った。

「お前らが殴りこみ風紀委員か。ジャッジメントなるほど面白そうな奴らだ」

「面白そうと思うならどいてくれるかしら？」

さらに有^{バッドスキル}能力不良を蹴散らしながら進んでいくと、一人だけでいる有^{バッドスキル}能力不良がいた。

「ゴメンなそれはできんだよ。そんな事をすると東雲^{しのめ}のリーダーにボコられるんだよ……それより一番強い奴こいよ。俺の能力は肉^{スト}体強化、レベルはたぶん4だ」

「なら私が相手してあげるわ」

「固法先輩！」

「何？私より貴方の方が強いって言いたいのか？」

固法が冷たい目線で白羽に尋ねた。

「え〜その〜」

白羽が返事に困っていると固法が言った。

「それに、私が一番相性が良いみたいだし」

「お〜い。誰か決まったか？」

「ええ、私が相手になってあげるわ。白羽君、関原君、行きなさい」

「「はい！」」

白羽と関原は奥へと進んで行った。

「さあ、残りは私が相手になっ」

「翔、先行け」

「え？」

また出てきた強そうな奴が良い終わる前に関原が言った。

「人の話を聞きなさい！」

「何言ってるんだよじゅん、お前の方がレベル高いし」

「そう言う事じゃねえんだよ」

関原が珍しく真顔で言う。

「あいつらの主人公ヒロはお前なんだよ。だから行け」

「……………分かった」

白羽はさらに奥へと進んで行った。

第十五話：突入（後書き）

展開の少年漫画っぽさはガマンしてください（笑）。

第十六話・それぞれの戦況（前書き）

はい、特に書くことなしです。

第十六話：それぞれの戦況

「はっはっはっは。お前、今更だけど本気で俺の相手をたった1人で出来ると思ってるのか？」

「貴方こそ、私を相手に仲間を1人も使わずに倒せると思ってますの？」

白井と幹部っぽい有バッドスキル能力不良、篠山しのやまは睨みあっていた。

「そろそろ始めようか」

「私はいつでもよろしいですよ」

「そうか、なら……行くぞ」

瞬間、篠山が消え白井の背後に現れた。

篠山が白井に殴りかかると白井は空間移動テレポルトで上空へ移動し、鉄矢を

篠山の居る場所へ空間移動テレポルトさせる。だがその鉄矢は地面へと落ち、

篠山が落下する白井の真下テレポルトに現れた。

白井はその真横に空間移動し回し蹴りをするが、その瞬間には篠山は白井から離れた場所に居る。

(AIM拡散力場の影響で空間移動能力者同士はお互いを飛ばせないのがネックですわね)

「そろそろ良いか？」

背後から不意に声が聞こえて、白井が振り返ると顔に握った拳が突

き刺さりゴロゴロと地面を転がった。

「ッッ!?!」

前方を見ると篠山は元の位置に戻っていた。

(今、目の前に居たのに)

白井が殴られた時、確かに篠山は白井の前方に居た。

「分かねえだろうな。クソ真面目な風紀委員長様よお」
ジャッジメント

(あれはただの空間移動じゃありませんわね……)
レポート

「この!」

固法が固く握った拳をお気楽そうな有能不良バッドスキル、岸田きしたの原に叩きつけた。

「だから効かねえよ!」

岸田が虫を追い払うように固法を払い、その勢いを利用して固法が後ろに下がる。この繰り返しだった。

「何度やっても同じだ。俺にそんな弱いパンチは効かねえよ」

「そう言う貴方も私を1発も殴れてないじゃない?」

「んなもん本気を出せば」

次の瞬間、固法は宙を舞った。

「があ!？」

ゴロゴロと地面を転がり、ようやく固法は止まった。

(何?今の)

「クッソ！」

同じように、関原も苦戦していた。関原の相手の有バッドスキル能力不良、みねさき峯崎の能力は風力使い《エアロシューター》で関原の起こす爆風が一切届かないのだ。しかも、その爆風をそのまま返されて、かなりのダメージを負っていた。

「ふふふふ……私を無視したバツよ！」

「…根暗おばさんめ」

「何か言ったかあ？」

その形相は女子好きの関原ですらかなり引くほどのものだった。

「死ねや風紀委員おおおおお!!」

バッドスキル有バッドスキル能力不良が金属バッドを振り回しながら白羽に襲いかかった。白羽はそれを左手のトンファーで受け止め、右手のトンファーで有バッドスキル能力不良を

力不良を殴りつけた。

それで有^{バッドスキル}能力不良が怯んだ隙にコートの中から手錠を出し、両手と両足に掛けて拘束した。

「ふう、これで全員か？」

白羽の周りには手足を拘束されて動けなくされた有^{バッドスキル}能力不良が大量に転がっていた。

「てめえタダで帰れると思うなよ！」

「お前こそ俺にそんなこと言ってタダで済むと思ってんのか？」

「……………」

有^{バッドスキル}能力不良が言葉を失った。今、自分たちは手足を拘束されて何もできないことに気がついたからだ。有^{バッドスキル}能力不良が黙るのを確認し、

白羽は奥へと進んでいった。

傷だらけで所々から血を流した体を引きずりながら。

第十六話：それぞれの戦況（後書き）

次回は佐天と桜野の方です。

第十七話：ゲーム（前書き）

よければ感想お願いします。

第十七話：ゲーム

「何？じろじろ見ないでくれませんか？」

桜野と佐天は有能バッドスキル不良の本拠地にいた。2人は手足を縄で縛られ、床にじかに転がされていた。桜野は顔や腕にアザを作っていた。

「ふふ、中学生ガキでもお前は上物だと思ってな」

「何？変態ロシコンですか？」

桜野がキツと睨むが、有能バッドスキル不良は全く気にしていない。

「あんまり俺をイラつかせるなよ。出来れば傷を付けたくねえんだよ」

「ふんっ」

その後しばらくすると、有能バッドスキル不良達にリーダーと呼ばれるかなり大柄の少年が佐天と桜野の元にやってきた。

「おい、どつちが有能おれたち不良を4人も病院送りにしてくれた風紀委員ジャッジメだ？」

「はい、背の低い方です」

東雲が桜野を睨みつけた。

「何？」

「お前には落とし前をつけてもらおう」

「私には、ね。ならもう一人には手を出さないでくれる？」

東雲は少し考えてから言った。

「ならこうしよう、お前が俺の蹴りに耐え続ける限りはこいつには手を出さねえ。だが、お前がギブアップしたらこいつにも容赦しない」

「それでいいわよ」

「そうか、ゲームスタートだ」

宣言と共に東雲は桜野を蹴り飛ばした。リーダーと呼ばれるだけあり、その蹴りにはかなりの威力があった。

無言で桜野を蹴り続ける東雲が突然口を開いた。

「そろそろ諦めたらどうだ？」

「何で諦めるのよ。翔が来てくれるまでの辛抱なのに」

「はあ、何言ってるんだ。おれたち有能力不良は全員で150人を超えるんだぞ。ジャッジメント風紀委員の支部が3つ一気に攻めてでも来ない限りムリだ！」

隣に居た、見たまま下っ端のバッドスキル有能力不良が言った。

「来るよ」

微かな、それでいて力強い声だった。

「ああ？」

「白羽はゼツタイ来る！！」

それを言ったのは佐天だった。

「佐天ちゃん…」

「そいつはそれほどの男なのか？」

「当たり前！」

2人の声にはコンマ数秒の差もなかった。

「そうか、たしかにそうらしい」

「「？」」

歩いてきていた。もう春だというのにコートを羽織り、中肉中背で平均的身長をした服装以外どこから見ても普通の少年が怒りに顔をゆがませて。

「翔？」

「白羽？」

第十七話：ゲーム（後書き）

今回短かったので、次回は早めに投稿しようと思います。

第十八話：主人公へヒーロー（前書き）

早めに投稿するとか言っておいて大分遅いです。すいません。

第十八話：主人公へヒーロー

来た少年は、見た目はそのまま白羽だった。だが何か、何かが違う。違っていた。

「恋する乙女には敵わないって事か。」

その語尾に「。」を付ける独特の口調を2人知っていた。

「前田くん？」

「その通り。」

前田が顔に手をかけ、ベリベリと引き剥がす。すると、その下から普段の前田の顔が現れた。

「他のヤツはどうした？」

「ああ、大丈夫だ。俺は上通って来たから誰1人倒してない。」

「上、か。簡単に言ってくれるが飛び降りたら即死の可能性もある高さだぞ」

東雲が近くのビルを見ながら言った。

「かかってこいよ。」

「お前達、相手をしてやれ」

「「「へい!」」」

東雲の傍に控えていた有能バッドスキル不良達が前田に襲いかかった。

「待て。」

前田の目の前まで有能バッドスキル不良が突然後ろから聞こえた東雲の声に驚き後ろを振り向く、が東雲はそんな事を言っておらず、むしろ驚いている。

「敵を目の前にして後ろを向くだなんて論外だ。」

慌てて有能バッドスキル不良が振り向こうとすると、振り向く首に合わせて足が向かって来た。

短い悲鳴と共に1人が気絶し、それで怯んだ隙にもう1人の顔面に思いっきりパンチを決める。

「痛つてえなあ!」

結構頑丈なヤツだったようで、余り怯まずに前田に殴りかかってくる。頭に血が昇り大振をするが、前田にあっさりと避けられ、カンターのアッパーで気絶した。

「このやろっ!」

ラスト1人が地面に手を付いた。

「?……降参か?。」

「んな訳ねえだろ!」

「！」

突然地面が變形し、前田の足を飲み込んだ。
前田が動こうともがくが地面はかなり固く、全く動けなかった。

「はあはあ……」

だが、有^{バッドスキル}能力不良も力を使い果たし倒れた。

「お前の敗因を教えてやるつ。俺達が不良^{スキルアウト}集団ではなく有^{バッドスキル}能力不良
だった事だ」

東雲が腕を高く振り上げ、振り落とした。

ドスンと言う鈍い音と共に前田を動けなくしていた地面が割れ、前
田が地面にめり込んだ。

「前田！」

「前田くん！」

「さあ、ゲームを再開しようか」

「があっ！」

「ギブアップか？」

前田が倒れて5分が経った。

ついに東雲の蹴りに耐え続けた桜野が血を吐き動かなくなった。

「美鈴ちゃん！」

「死んでは無いだろっ、そこまで強くは蹴っていない。それより自分の心配をしたらどうだ？こいつがギブアップしたから次はお前だぞ」

「だ、れが…ギブアップし…たのよ」

桜野が最後の抵抗で東雲の足を掴んだ。

「……最後の情けだ。すぐに終わらせてやるっ」

東雲が手を振り上げ、振りおろそうとしたその時だった。シュツと風を裂く音がし、東雲の手が鉄の球に弾かれた。

「ハア…ハア……大遅刻だな」

2人が振り向くと、そこに居たのは2人が来てくれると信じた主人^キ公^クだった。

第十八話：主人公へヒーロー（後書き）

次回からちょっと投稿遅れます。

第十九話：反撃の狼煙（前書き）

もうちよっと遅くなる予定で書いてましたが、できました。

第十九話：反撃の狼煙

「白羽！」

「か…ける」

「お前、が白羽翔か」

駆けつけた白羽は体中傷だらけで、コートも所々破け、額からはかなりの血が流れていた。だが、それよりも白羽の得物の方が大量の血が付いていた。

「全員、そのトンファーで殴り倒して来たのか？」

東雲は仲間が血を流すまで殴られた事にかなり怒っていた。

「いや、殴ったのは10人ほど。他は手錠で動けなくしたただけだ…
…なあ、ふと思ったんだけどな」

「何だ？」

握った握力で白羽のトンファーの持ち手が変形した。

「美鈴と涼をそんなにボコったのはお前か」

「ああ」

「そうか、お互いブン殴る理由があるな」

白羽が東雲に向かって駆け出し、あっという間に距離を縮め東雲に殴りかかろうと最後の一步を踏み出したその時だった。東雲が腕を振り上げ間髪いれず振り下ろした。

「ぐうっ！」

白羽が何かの力に抑えつけられ跪く。動けない白羽に東雲の全力の蹴りが突き刺さった。地面を転がり、やっと白羽を抑えつけていた力が無くなったが、東雲が腕を振り上げ、振り下ろすとまた力が白羽を押さえつける。

「何だよ、その能力」

「重力倍加、指定した場所の重力を倍増させる能力だ。まあ、それを知ったところでお前にはどうしようも無いがな」

東雲がまた白羽を蹴り、能力で押さえつける。そんな一方的な暴力が何十分も続いた。

「もう止めて！」

「佐天……」

それを見ているのに耐え切れなくなった佐天が叫んだ。

「残念だな、止める気はない」

「ッー！」

佐天が立ち上がり東雲にタツクルをした。東雲がわずかに体制を崩し、佐天が転がる。

東雲が体制を戻して腕を振り上げ、

「止めるおおおおおおおおおおおお！！！！」

白羽の叫びもむなしく東雲の腕は振り下ろされ、地面が揺れるほどの振動が響いた。

「ぐう」

篠山に踏みつけられ、白井が呻き声を上げた。

「っはっはっは、ざまあねえな風紀委員ジャッジメント！お前アレだろ？超電磁砲レールガンレールガンの金魚のフンだろ？お前がこの程度じゃ超電磁砲も大したねえんだろうな」

白井の眉がピクリと動いた。

「今、何と言いましたの？」

「超電磁砲レールガンも大した事ねえなって言ったんだよ！」

突然白井が消え、上空に現れた。そして、白井が告げた。

「お姉さまを侮辱した罪、償ってもらいますわ！」

固法は廃墟ビルの中に隠れていた。あのまま岸田と戦い続けていても状況は好転しないと判断したからだ。

「お〜い！出てこいよ〜！！どうせ誰も助けに何か来ねえって。どうせ風紀委員おまえらなんてもう全滅してるぞ〜！！」

その言葉を聞いて固法は廃墟ビルから飛び出し、篠山の顔面に本気の蹴りを入れた。

「今のは私の逆鱗に触れたわよ」

「ふふふふふふふふどうしたのお？最初の威勢はどこへ行ったのかしらあ？」

「くっそう」

関原がスーパーボールを投げ、指をパチンと鳴らす。が、その音に合わせてように烈風が吹き爆風が関原に帰ってくる。

関原の使う爆発は爆熱はあまり発生せず、爆風で相手を吹き飛ばすタイプの爆発なのでそれを返されると相手にダメージを与えられないのだ。

「ふふふふ貴方分かりやすいのよ。能力を発動するとき指を鳴らすからタイミングがまる分かりなの。

それに、貴方のお友達の翔君だったっけ？もうやられちゃってるんじゃない？あんな雑魚そうな子」

関原が呆れたように呟いた。

「おいおい、そんな訳ないだろ？あいつは主人公ヒロだぜ。それにあいつは誰かを守るとき最強になるヤツだ」

東雲は倒れた佐天を踏みにじる様に踏みつけた。佐天はもうピクリとも動かなかった。

「どけるよ」

白羽は言った。それは頼みでも、願いでもなく、警告だった。そう、白羽の目が語っていた。

「なら、どかせてみる」

東雲が腕を振り上げ、振り下ろした。何倍もの重力がかかり、白羽の体を押しつぶそうとする。

だが

白羽ヒロは、立ち上がった。

第十九話：反撃の狼煙（後書き）

次回は前後編です。

第二十話〈後編〉：逆襲のとき（前書き）

今回は白井と固法の方です。

第二十話〈後編〉：逆襲のとき

「はあ、超電磁砲おねえさまを侮辱した罪を償わせる？どうやってだ？お前は俺に触れないんだぞ」

「貴方、私が空中にいるときは攻撃を仕掛けて来ませんでしたわね」

「！」

篠山は明らかに動揺していた。確かに、今も白井は空中から落ちかけては空間移動テレポートで空中に移動する事を繰り返しているが、篠山は一向に攻撃を加えない。

「貴方は空間移動能力者ではなく、私が見える場所を故意に変える能力ですわね」

「だっ、だからってお前にはどうしようもないだろ！」

実は背定している事に篠山は気付いていない。そんな篠山を無視して白井がポケットから無線を取り出した。そして電源を入れ一言話すと、飴玉を転がすような甘ったるい声が応答した。

「1メートル前方の地上で静止しています」

「分かりましたの」

白井がその位置の真上に空間移動テレポートし、何も無い空間に踵落としをする。それには一切の迷いが無かった。

「ぐう！」

何か地面に叩きつけられ、篠山が呻き声を漏らす。白井はその隙に空中に空間移動し、また無線からの声を聞く。

『ターゲット、3メートル前方に移動。あつ、こけました』

「了解ですの」

白井が鉄矢を取り出し、また何も無い空間に空間移動させる。すると、鉄矢が見えない何かを地面に縫い付けた。

「何だよ！俺の姿はもつと前の方に見えてるはずだろ！！」

「ええ、私には貴方が全然違う所に見えてますわ。でも、私の相棒はこの無線のカメラ越しに見ているので平気なんですの」

さあ、さっきの言葉を訂正して頂きますの、と言つ白井に篠山は真つ青な顔で怯えていた。

「そうか、でも逆鱗に触れたからって何だよ？」

固法の蹴りを受けても岸田は大したダメージを受けていなかった。

「それで何だつて事だ！」

岸田が固法に向かって勢いよく走りだす。それに向かって固法も走り出し、岸田の拳がギリギリ当たるか当たらないかのタイミングでし

やがんで交わり、そのまま岸田の軸足を捌いた。
体重を掛ける所を失い、走る勢いのまま顔面から壁に突っ込んだ。

「倒した？」

動かなくなつた岸田に近づき、手錠を掛けようとした時だった。

「うらああー！」

「！」

岸田が裏拳を繰り出し、固法はすばやく腕をクロスしてガードした。だが余りの力に1メートルほど飛ばされる。慌てて立ち上がり、岸田と反対の方向に走り出す。腕がヒリヒリしていて、もうガードはできそうにない。

「逃げんなよ！」

岸田が地面を思い切り蹴り、高速で固法に殴りかかる

が

不敵に、固法は笑っていた。

「（掛つたわね。その高速移動を…逆手に取る！）」

岸田が固法にパンチを繰り出す。固法はそれを手を後ろに回し、ジャンプした。

そのまま自分の体重で一回転し地面に足を付け踏ん張り、自分が走っていた勢い、岸田が走っていた勢い、自分の一回転の勢い、岸田

のパンチの勢い、全てを乗せて岸田を投げた。

「うおおおおおー!!」

ノーバウンドで10メートル近く空を仰ぎ、岸田は廃ビルの壁に頭をぶつけ、昏倒した。

第二十話〈後編〉…逆襲のとき(後書き)

次回は白羽と関原です。

第二十話〈後編〉：彼らの反撃

「さあ、そろそろ終わらせるぞ」

そう言いながら関原がウエストポーチの中のスーパーボールの数を確認する。かなり持つてきていたのだが、もう5つしか残っていなかった。

「そうね、そろそろ飽きて」

峯崎が言い終わる前にスーパーボールを地面に向かって投げ、パチンと指を鳴らして起爆させる。土煙が舞い、周りが見えなくなった所で2つ空中に投げ、自分は前に走り出し、パチンと指を鳴らしてスーパーボールを起爆させる。

爆風で土煙を吹き飛ばすと同時に自分も加速し、1つスーパーボールを前に転がす。

「人の話を聞けえええええ！！！」

ヒュウンと風を着る音がし、勢いよく走っていた関原の動きが止められた。そのまま峯崎が風の塊を飛ばし追撃した。

が

突然、爆発が起こり土煙が巻き上げられた。峰崎が風の塊を飛ばして土煙を吹き飛ばすが、そこにはもう関原はいなく、代わりに首筋に冷たいものが押し当てられた。

「俺さ、別に指鳴らさなくても能力使えるんだよね」

「そんな所で能力を使ったら貴方タダじゃ済まないわよ」

関原は人差し指と親指でスーパーボールを挿み、峯崎に押し当てていた。

「俺もタダじゃ済まねえけど、お前は最悪死ぬぜ」

「……負けよ負け、私の負けです」

関原の覚悟を感じ取った峯崎はお手上げ、と両手を上げて降参した。

「ッ！何故立てる！！？」

「お前が俺を怒らせたからだ」

よく見ると、鉄が白羽の右手からコートを通して地面に伸びていて、それが杖の様に白羽を支えていた。だが、自分の能力に絶対の自信を持っていた東雲は、混乱してそれに気付けなかった。

「行くぞ！有^{バッドスキル}能力不良！！」

白羽が地面を全力で蹴ると同時に、地面に伸びていた鉄でも地面を押し加速する。

東雲の能力の効果範囲を抜けたところで、同時に地面に伸ばしていた鉄を^{トシフア}変形させて得物を作り、もう一度地面を蹴りさらに加速する。

「うおおおおおー！」

「それに何でもつと大人数で来ないの！そしたら翔がそんなボロボロにならなくも済んだのに！！」

「あ…え…つと…」

2人に怒鳴られて白羽は少しずつ後ずさりし、小石に躓いて仰向けに倒れた。

「でも…信じてたよ」

「……………」

「「？」」

よく見ると、白羽はさっき頭をぶつけた衝撃で気絶していた。こうして、有能バッドスキル不良のリーダーを倒した主人公ヒーローはたった2人の少女ヒロに倒されたのであった。

第二十話〈後編〉：彼らの反撃（後書き）

ほんとスイマセン！！テンションあがり過ぎて間違っ
てしまいました。

第二十一話・恩返し（前書き）

ほんとスイマセン。何も言えません。

第二十一話：恩返し

「うっ…うっ」

目が覚め、視界が広がる。目前に広がるのは白い天井、おそらく自分はその病院のあの部屋のあのベッドに寝ているんだなと予測、と言いか最早確信する。時刻はおそらく早朝、窓際だから朝日が眩しい。

周りを見回すと、隣のベッドには佐天が、前のベッドには桜野が、右斜め前のベッドには前田がそれぞれ眠っていた。

「やあ、グッドタイミングだったみたいだね？」

「ああ、カエルさん」

ちょうど病室のドアが開き、カエル顔の医者が入ってきた。

「君は何度言ってもその呼び方を変える気はないんだね？後、安静の意味も知らないみたいだね？」

「ははは、と笑ってごまかすが、確かに無茶をしたせいか体中が軋む様に痛い。」

「君は幸せ者だね？君が眠っている間ずっと、隣のベッドで寝ている彼女と前のベッドで寝ている彼女が看病してくれていたんだよね？」

佐天も美鈴も優しいな、感謝感謝。と、思っている白羽は最早鈍感を超えてバカの領域に入っているのかもしれない。

「うん？…か…ける？……翔！！」

桜野がベッドから飛び起き、白羽に突撃する。

「ぐふ！……つて、お前カエルさんの前ではネコ被らないのかよ」

「ネコ被るって何よ。それに両生類にその必要はないでしょ」

流石に両生類は効いた様で、カエル顔の医者はシヨボンとなって病室から出て行った。

「美鈴くっ付くな！今体中痛くて動けないんだよ！！」

そんな煩いやり取りでムクつと佐天が起きてきた。

「白……羽あ？……白羽！起きたの！？」

「煩い！！眠れないだろ！！！」

瞬間、全員が黙った。前田が叫ぶ事はそれ程滅多にないのだ。と言うか気迫に圧されて全員が前田が一番煩いという事に気付かなかった。

「まあ、とりあえず離れる。美鈴」

「うん」

「で、え〜っと……どうなったんだ？」

東雲を倒してすぐ、佐天と桜野に気絶させられたので白羽はその後の事情を知らなかった。

「まず、あの後初春ちゃんが応援に呼んだ風紀委員の支部が2つ一ジャッジメント気にあそこに攻めて行って、有能バッドスキル能力不良は全員拘束されたよ」

桜野が口を閉じると、次は佐天が苦笑いを浮かべながら言った。

「その代わりに固法先輩は責任者と言う事でたっぷり始末書を書かされてるけどね」

「ちなみに言うとお前は2日間も眠ってたんだぞ。」

「マジ……って事は学校2日も休んだのか!!?」

ずくん、と言う擬音語が素晴らしく似合う姿勢で白羽は項垂れていった。

「白羽って真面目だね。学校サボれたとか言わないし」

「佐天は普通に言ってたけどな。」

「ははは、でも何でもみんなは風紀委員ジャッジメントに入ったの?」

このままでは自分の部が悪くなると踏んで佐天が強引に話題を変えた。

「翔に誘われたから。」

「翔が入ったから」

「恩返し」

サラっと言った。白羽については結構重い事を言っているが、桜野と前田は完全にスルーだ。

「恩返しって？」

「俺が置き去り《チャイルドエラー》って事は話したよな？」

「う、うん」

白羽が、昔を懐かしむ様なゆっくりとした口調で話し始めた。

「俺の両親は、俺を預けて蒸発したんだ。2人とも元々、天涯孤独でさ……俺には身内が誰一人いないんだよな。それで、俺は学園都市に育てられているから学園都市のために何かしたくて、ジャジメント風紀委員になった、って事なんだ」

「……………」

「将来は教師になりたいと思ってる。それで学園都市の孤児院に寄付とかしたいな。俺みたいにレアな体質の奴は学校からの金で生活出来るけど、そうじゃない奴はどうしようもないしな」

佐天は、何も言えなかった。白羽がジャジメント風紀委員になった理由がそこまですべて考えていたものだど知っていなかったただけではない。白羽が、それを辛そうな笑顔で話していたからだ。

（白羽…………）

佐天は思った。この少年の事をもっと知りたいと、もっと知って、この少年に近づきたい、と。

ちなみに、その後白羽は佐天と桜野にたっぷりお説教されたのだっ
た。

第二十一話：恩返し（後書き）

次回から少しの間シリアスっぽくないですが、この話は終わってません。

あと、突然ですが時期を春から夏に変更です。突然ですいません。あと、次回上条さん出ます。

第二十二話・指名手配（前書き）

やっぱりシリアス展開継続します。

第二十二話：指名手配

「……………」

学園都市の第3位、御坂美琴は裏路地の廃ビルで息をひそめていた。どこまで行っても味方はいない。それどころか、目の前に現れるのは全て彼女の追っ手である。第三位である彼女がそれを撃退しない理由は、相手が第1位や第2位だからではない。簡単な理由だ。数が多過ぎるのだ。

学園都市の頂点である超能力者^{レベル5}の第3位、御坂美琴は学園都市から約230万人^{約230万人}から逃げていた。

「そんな訳ありませんの!!」

ジャッジメント
風紀委員177支部に送られてきた資料を見て白井は叫んだ。その声の大きさに視線が白井に集まった。白井は慌てて取り繕う笑みを浮かべ、誤魔化する。

「どづしたの？白井さん」

そこに固法がやって来て、聞いた。白井は少しためらってからその資料を見せた。

その資料を読んで、固法の表情が強張った。

「私も信じたくないわ。でも、全員に通達するわ」

「……分かっています。だからと言って私はそれを信じたりはしません」

「私も、よ」

その後、固法によって送られてきた資料について通達された。その内容は連絡網により、まだ退院して数日しか経っていないく、休日と言う事もあって非番になっていた白羽の元へも伝わった。

「御坂さんが！…そんな訳ない……よな？」

『当たり前ですよ！貴方もお姉さまを見つけたら連絡してください。あと、周りの人にも伝えてください』

白井が、携帯しでも煩いと感じる様になに大声で怒鳴ったので、傍に居た佐天、桜野、前田がビクツとなった。

「分かった。見つけたら連絡する」

そう言って白羽は通話を切り、携帯をコートの内ポケットにしまった。

「何の話だ?。」

「キャパシティダウンってあったろ?あの能力を封じるヤツ。あれが能力者の犯罪防止のためにまだ研究されてて、ネット回線を通して盗まれたって……」

全員の顔が強張った。それは全員がその恐ろしさを知っている事ともう一つ。

「じゃあ、御坂さんって……」

「セキュリティが固くて、現状でそれを越えることが出来るのは超能力者で唯一電撃使いの御坂さんだけって事らしい。だから発見したら警備員に連絡しろって。実質指名手配だな」

そのあと白羽達は解散し、白羽は昼食を食べに近くのファミレスへ入った。

「いらっしゃいませ。ただ今お席の方満席になっておりまして、会席であれば御案内できますが?」

「じゃあ、それでいいです」

そう言うウエイトレスは席を回って会席でも良いかを聞き始めた。そして、3番目の席でOKをもらったようで、白羽の方へ戻ってきた。

白羽をその席に連れて行き、御注文お決まりになりましたらこちらのボタンでお呼びください、と言ってその場を去って行った。

「どうも、ありがとうございます。って上条さん!？」

良く見るとその席に座っていたのは以前、事件解決に協力してくれたツンツン頭の高校生、上条当麻だった。その隣には物凄い勢いで料理を食べ進めるシスター、インデックスも一緒だった。

「おお!白羽じゃねえか」

「この前はありがとうございました。上条さんがいなければどうなっていたか……」

「いや、そこまで感謝されても逆に困るんだけどな……」

本当に困ってる感じなので白羽は他の話題を探し、見つけた。凄く気になる話題を。

「上条さんはどんな節約術をお持ちなんですか？」

「へ!？」

白羽の視線の先を見て上条は納得した。

「ああ、無能力者《レベル0》で大して金を持っていないはずの俺がこんな量をこいつにおごれてるんだから、何か凄い節約術があると?」

「はい、その子どう見てもお金持ってそうにないので」

「ふふふん、そうかそうか聞きたいかこの上条さんの節約術を!！」

「はい!!」

勢いよく返事すると、誰かに肩を叩かれた。振り返るとさっきのウエイトレスがいて、白羽に店内ではお静かに、と言って帰って行った。

「え、あまりテンションを上げずに行きましょう」

「そうだな」

その後上条は数時間ずっと節約術について語り続け、白羽はそれを熱心にメモし、インデックスはその間ずっと料理を食べ続けた。

第二十二話・指名手配（後書き）

ここからがこの話の本番です。

第二十三話・学園都市最強の電撃使いへエレクトロマスターへ（前書き）

感想、大歓迎です。ダメ出しでもOKです。凄く励みになります。

第二十三話・学園都市最強の電撃使い〈エレクトロマスター〉

「なっ！」

白羽に節約について語りまくった上条は、帰ってきて何気なくつけたニュースをみて驚愕した。

そのニュースは、超能力者^{レベル5}の御坂美琴がキャパシティダウンと言う能力を封じる音のデータを盗んだ可能性が高いため、御坂美琴を発見次第、警備員^{アンチスキル}に連絡をしてほしいと言ったものだった。

「んな訳ねえだろ……」

上条はもう自分の部屋を出て行こうとしていた。もちろん御坂を探すため。

「わりいインデックス、ちょっと用事出来た」

「とうま?」

「たぶん夜までには帰ると思うけど、もし遅くなったら小萌え先生とこ行つといてくれ」

「とうまー!!」

インデックスの静止も聞かずに上条は部屋を飛び出した。当ても無く、上条は走り回った。

「……………」

御坂美琴はあの橋に来ていた。辺りはもう暗く、周りには誰の影も見えない。それが、御坂を安心させる同時に不安にもさせていた。御坂は心のどこかで信じていた。あの少年がまたあの時のように、学園都市最強の超能力者^{レベル5}を倒し1万人もの妹達《シスターズ》を救った時のように、やってきてくれると。

「来るわけ…ないか……………」

御坂が立ち去ろうとしたその時、足音が聞こえた。その音はだんだん近づいてくる。

（まさか…………）

確率的には230000対1だ。その場から大急ぎで逃げ出すのが正しい選択だと言える。だが、御坂はそうしなかった。

それは、信じていたから。そう言ったら本人は否定するだろう。それでも、御坂はその場を動かずに足音の主を待った。それがあの少年だと信じて。

しかし、世界はそんなに優しくなかった。

「はあい あんたが御坂美琴ね」

そんな気の抜ける様な確認と同時に、閃光が瞬き、御坂を襲う。御坂は地面を転がってその閃光を交わした。その少女は御坂よりも少し年上の、あの少年と同じ位の歳の少女だった。

「アンタ、何者？」

「あたし？ そんなの教えてやんない だって教えたら調べられるじゃん …… ていうかここで殺すんだけどねえ」

良い終わると同時に閃光が御坂に向かって飛んでくる。だが、御坂はそれを避けない。それは早くも諦めた訳ではない。相手の能力を見切ったからだ。

閃光は御坂に触れる前に不自然に軌道を変えた。

「アンタはアタシと相性が悪いみたいね。電気はアタシには効かないわよ。それでも学園都市最強の電撃使いなんですね！」

御坂も言い終わると同時に電流を放つ。人を殺してしまうようなレベルではないが、それでもかなりの力を込めた一撃だ。相手の能力もなかなか強力だったが、軌道を変えることはできないだろう。

「はあ？ 学園都市最強の電撃使いエレクトロマスターあ？ 元、学園都市最強の電撃エレクトロマスター使いの間違いでしょあ？」

だが、その電流は不自然に軌道を変えた。

「あたしが新 学園都市最強の電撃使いエレクトロマスターよ」

第二十三話：学園都市最強の電撃使い（エレクトロマスター）（後書き）

突然！次回予告

突然現れた自称、学園都市最強の電撃使い《エレクトロマスター》
の少女は事度とく御坂の技を退けていく、御坂は超電磁砲レールガンに望みを
掛けるが……

第二十四話：超電磁砲（前書き）

お気に入り登録数が増えない……みなさん、どうやって増やしてるんですか

第二十四話：超電磁砲

「なっ……んで……？」

「何でって あたしがあんと同じレベルだからよ」

御坂と同じレベル、確かに今の現象を説明するのに1番簡単な考えだ。だが、それはあの少女が8人目の超能力者《レベル5》だと言う事だ。そんな事はほぼあり得ない。それは、新しい超能力者《レベル5》が誕生したならかなり大きなニュースになっていて、御坂もそれを知っているはずだからだ。

「そんな訳ないでしょ！！」

御坂がもう1度電撃を放つが、その電撃は不自然に軌道を変え少女には当たらない。

「何度やったって一緒」

（なら……）

突然、御坂が橋の外に向かって走り出す。少女もそれを追いかける。

「なに？逃げるの」

河川敷まで走った御坂はそこで足を止めた。

「はぁ……はぁ……っはぁ。あんだ走るの早すぎ……」

少女は語尾の が無くなるほど疲れていた。

「アンタが走るの遅すぎなのよ。 って言うか逃げてないわよ」

御坂がしゃがんで地面に手を付け、何かを引き上げるように立ち上がる。御坂の手には巨大な砂鉄の剣が握られていた。その砂鉄の剣はチェーンソーの様に高速で振動し、少女には似合わない凶器となる。

「場所変えただけよ！」

砂鉄の剣が少女に向かって行く。だが、少女は動かない。

「私には効かないって」

砂鉄の剣は少女に当たる寸前に勢いを失い、その形を留めていた力を強制的に取り除かれてただの砂鉄に戻り、風に吹かれて飛んで行った。

「残念 それも効かないみたいね」

（それなら、どうする……）

これはある程度予測していた事態なので御坂はそれ程驚きはしなかった。

おそらく相手の実力は本当に御坂と同じか、ともすれば上かもしれない。何故、と言う疑問は後で考えることにした。

砂鉄の剣も電撃も効かなかった。ならば、希望はあと一つ。コインに電磁加速を加えて放つ、御坂の異名の由来となった彼女の必殺技。

レールガン
超電磁法。

(そうと決まれば……)

御坂は地面を思いつきり蹴って跳躍し、一気に少女との間合いを詰める。少女が電撃を飛ばすが、御坂は軌道を変えてそれを退け、少女の目前にまで迫る。

「くらえ！」

腰をひねって全身の力を拳に溜め、相手の顔面に向かって振るう。慣れた動きでヒラリと交わされるが勿論それは計算の範囲内。その勢いで前に進み、相手がこちらを振り向く前にポケットからコインと取り出す。

「本命はこっちよ！」

そして振り向きざまに放つ。直接当てると殺してしまうので、少女いる所の目の前の地面を吹き飛ばしてその破片を当てて戦闘不能にすることを狙った。

だが、まるでそれが分かっていたかのように少女も御坂と同じコインを同時に放ち、そして、御坂のコインを押し返した。

「ははっ」

「なっ！」

そのコインは御坂の目の前の地面へと飛んで行き、地面を吹き飛ばした。その破片が御坂も飛んで行き、大きな塊の1つが御坂の足に直撃した。

瞬時に後ろに飛んでダメージを軽減させたが、それでも右足のダメージは酷く、しばらくは立つことが出来ないだろう。

「痛い！」

「残念ね 必殺の超電磁砲レールガンもあたしに効かなくて」

少女が御坂に近づき、御坂を蹴り飛ばす。動けない御坂は電撃で抵抗するが、電撃は少女の目の前で軌道を変え、少女には当たらない。しばらく蹴り続け御坂が抵抗しなくなったのを確認し、少女は御坂から間合いを取って力を溜め始めた。

（まさか……落雷）

ゴロゴロという音が轟き、黒雲が御坂たちの所に近づいてくる。もう御坂にそれを退けるだけの力は残っていない。

「（……助けて）」

やがて黒雲は御坂の真上で動きを止めた。

「死ねえ」

第二十四話：超電磁砲（後書き）

突然！次回予告 その2

動けない御坂に迫る黒雲（くろぐも）。その時、あの少年は現れるのか！？

第二十五話：助け（前書き）

『突然！次回予告』はあった方が良いですか？いららないですか？御意見お願いします。

第二十五話：助け

ゴロゴロゴロと轟音が轟き、雷が落ちた。

しかし、それは御坂には当たらなかつた。その雷は、息も切れ切れに御坂の傍まで走ってきた少年の右手に触れ、消え去つたのだ。

「なっ！そんな！！」

少女はその現象が理解できなくて を付ける事も忘れてパニックになつている。

だが、御坂はそんな無茶苦茶な事を出来る人物を1人だけ知つていた。

「わりい御坂……はあ……遅れた……」

「バカ、遅いのよ」

「落ち着け、落ち着け。大丈夫………まあ良いや ついでに死んじゃえ」

少女が電撃を上条に飛ばす。それに対して上条は右手を突き出しただけだつた。

電流はその性質により上条の右手へと吸い込まれていき、右手に触れた瞬間に消え去つた。

「何で御坂に……はあ……んな事しやがつた？」

「教えない 『教えてください』 って言ったら教えてあげるかもよ」

「教えてください これが良い？」

その声は少女の後ろから聞こえてきた。それは声は上条の物でも、御坂の物でもなかった。その声の主はまだ夏だと言うのにコート^{ジャケット}を羽織り、肩に風紀委員の勲章を付けた中学生位の少年だった。

「なに？ あんた？」

「俺？俺は風紀委員^{ジャケット}だけど。障害の容疑で拘束させてもらっぞ」

「白羽！」

白羽は訳が分からなかった。

お茶を買いにコンビニに行こうとしたら高校生くらいの爽やかイケメンに橋の方で能力者が喧嘩してるって聞いて、橋に言ってみたら誰もいなくて、少し歩いた場所で何か電気がチカチカなって、そこに行くと搜索中の御坂がいて、そしたらその御坂がボロボロで、その隣に上条がいて、その前には御坂をボロボロにした犯人っぽい奴がいて……とにかく、色んな事が一度に起きすぎて状況が理解できなかった。

「（…このままだとマズいわね）」

戦闘不能の御坂は良しとして、正体不明の能力者に風紀委員^{ジャケット}。どう見ても自分の方が不利だと理解した少女は……逃げた。自分の体に電磁加速を与え、さっきとは比べ物にならない位早く逃げた。

「あー！」

つと言つ間に少女は白羽たちから見えなくなつた。

「つて言うか何があつたんですか！上条さん！御坂さん！」

白羽は上条たちの所に駆け寄つた。上条はともかく御坂の怪我は手当をしなければならぬレベルだ。

「俺はテレビで、御坂が何かの犯人にされてるつて言つてたから探して……」

「……凄い行動力ですね。まあそれは良しとして、御坂さん。怪我が結構酷いので手当てしましょう。2人とも家に来てください。話もそこで。」

俺よく怪我するんで道具もそろってますし、同居人ルームメイトも理解ある奴なんです」

御坂と上条はコクリと頷いた。

第二十五話：助け（後書き）

上条さんをもつと頑張らせたかったんですけど、ここらへんで御坂と白羽が会つとかないとあとがメンドクサイんで。

まあ、上条さんはまだまだ大活躍するので待っていてください。

第二十六話：同居人（ルームメイト）（前書き）

ちよつと投稿遅れたんで、2話連続投稿してます。

第二十六話：同居人（ルームメイト）

「翔。知らない人。そしてまさの御坂さん。」

驚いている感じの台詞をまったく驚かずに言ったのは、実は白羽のルームメイトだった前田だ。

白羽たちの部屋は2LDKで、玄関から廊下を進むとリビングがあり、その両端にそれぞれ白羽と前田の部屋へのドアがある。

「涼、救急箱取ってきて。上条さんと御坂さんはリビングでくつろいでいてください」

「はいはい。」

「おう」

「一通り御坂の治療が済んだので、白羽たちは今後の予定について話し合う事になった。」

「まず、御坂さんに事情を」

「待て。」

白羽が御坂に説明を求めようとした所で、前田が会話に待ったをかけた。

「何だよ涼？今更俺が部屋に怪我人連れてきても驚かないだろ」

「そうじゃなくて、この人誰か説明してくれよ。」

前田が、上条を指差して言う。白羽は忘れていたが2人は初対面だ。前田が言うのも無理はない。

「ああ、そつか。この人は上条当麻さん。以前、事件解決に協力してくれたんだ」

「どうも上条さん。俺は前田涼、翔と同じく風紀委員で177支部ジャッジメントの所属です。よろしくお願いします。」

「こっちこそ、よろしく」

「じゃあ、今度こそ御坂さんに事情を説明してもらおうか」

御坂は頷き、ここまでの経緯を話した。

それによって、御坂にも今の状況が分かっていないこと、さっきの少女が新学園都市最強の電撃使い《エレクトロマスター》と名乗り、御坂の超電磁砲レベルガンでさえも打ち破ったことが白羽たちに話された。

「あいつは何者なんだ？」

上条は一人言のつもりで言ったのだが、それに白羽が返事をした。

「あくまで俺の私見なんですけど……」

「何だよ？」

「あれは幻想御手レベルアップによってレベルを上げた能力者じゃないかと思うんです」

誰も否定も肯定も出来なかった。白羽が知っている技術ではそれ以外に考えられなかった。

「まあその話は考えようがないから置いておこう。で、どうする？
ずっとここに隠れてる訳にもいかないと思うけど。」

「まずはあの女を探そうと思う。たぶん、あいつはこの事件に何か
しら関係していると思うし」

「俺もそれで良いと思う」

「私もよ」

今後の方針が決まり、白羽たちは少し早めに夕食を食べた。
そして白羽は重大な問題に気がついた。

「…上条さんはともかく御坂さんって行くところないから家に泊まり
ますよね？」

「うん、ゴメンね。寮にも戻れないしホテルとか使っと足が着いち
やうから」

「……………どうしよう」

「どういう事だ？白羽」

頭を抱え込む白羽に上条が尋ねると、白羽は少し御坂を見て少し困
ったように言った。

「着替えが……ないんです」

「」「！」「」

そう、御坂の荷物は今着ている制服と財布、携帯電話だけなのだ。

「どうする？」

「もちろんだが俺はそんなサイズの服持ってないぞ」

「そうだ！白羽君。桜野さんは？仲良いみたいだけど……」

御坂はその提案をして後悔した。なぜなら、白羽が半泣きになってしまったからだ。

「え！つちよ！白羽君！？」

「泣くな翔。お前の宿命だ。お前が白羽翔である以上それはやっぱり避けられないんだ。」

「ありがとう……涼」

白羽と前田が何か感動のドラマ的な事をしているのを、上条と御坂は口をポカンと開けて見つめていた。

そして白羽は御坂の方に振り向き、何か吹っ切れたような顔で言う。

「御坂さん、分かりました。俺、美鈴に連絡します」

途轍もなく理由が気になった上条と御坂だった。

第二十六話：同居人（ルームメイト）（後書き）

次の次位でシリアスが戻ってきます。

第二十七話：苦勞人（前書き）

2話連続投稿しています。

第二十七話：苦勞人

「もしもし、美鈴」

『ん？何々翔？』

白羽は桜野に電話を掛けていた。桜野の声のトーンがいつもより低いのは気のせいだろうか。

「パジャマと着替え一式貸してください」

『何に使うのかしら？まさか、いらやしい事につかうんじゃない？』

答えが分かり切っているとしても言いたげな口調で桜野は続ける。白羽は、何かもう取り調べを受ける犯人の様な表情をしていた。

「違います。貸します」

『また、女の人を部屋に連れてきたの？』

「はい」

白羽は最早半泣きだ。それを見つめる上条、御坂は目を見張り、前田は額に手を当て頂垂れている。

『で、その人は美人？』

「えっ……はい」

『私より?』

それは脅しの領域に入っていた。

「いいえ、美鈴のほうが美人です」

『で、その人は年上?年下?』

「年上です」

『何歳差?』

「1歳差です」

『翔の許容範囲内よね?』

「はい」

白羽の目から大粒の涙が流れだした。
そんな白羽を見て御坂は前田に聞いた。電話をしているので声は小さめだ。

「(ねえ、電話してるのって、あの大人しくて、白羽君にベツたりで、白羽君の言う事なら何でも聞きそうな、あの桜野さんよね?)」

「(はい、そうです。)」

「(じゃあ、何で白羽君は泣いてるの?)」

「(18回。)」

前田はため息でもつきそうな声色だった。

「(え?)」

「(アイツが見知らぬ人を家に連れてきた回数です。そして、その8割が女だったので、5回を超えた位からアイツは桜野に説教されています。桜野の説教はかなり怖いらしくて翔は毎回泣かされています。)」

「(…………)」

心の中で御坂は白羽に謝った。

「はい、分かりました」

「翔、お前は頑張った。で、どうだった?。」

「貸すから家に泊めろって」

「…………御坂さん。寝るときは俺のベッド貸します。」

「じゃあ……………迎えに行つてきます」

白羽が桜野を迎えに言ったあと、御坂が呟いた。

「白羽君って苦労人なのかしら?。」

そして、しばらくすると白羽が帰ってきた。

「お帰り、翔。」

「ただいま」

「お邪魔します」

白羽の声はどこか嬉しそうで、お邪魔しますの声は何故か2つ聞こえた。

前田が見に行くと、そこには若干笑顔の白羽と桜野そして、佐天だった。

「…何で佐天は来たんだ?。」

「え、白羽に泣き付かれたから」

ああ、佐天がいれば余り説教は出来ないからか。と前田は理解する。

「で、今度の女の人ってどんな人かしら?」

桜野がずんずんと廊下を進んでいき、リビングでその人を見て硬直した。

「どうしたの美鈴ちゃん?」

佐天も同じようにリビングに行き、硬直した。

「御坂さん!?!」

「あはは……こんばんわ」

御坂が苦笑いをしながら挨拶すると、桜野と佐天も挨拶を返した。ちなみに上条は白羽がいない間にもう自分の家に帰った。全員がリビングにそろい、話題が無いので何となく気まずい空気が流れる。その空気に耐えかねた佐天が話題を絞り出した。

「ところで御坂さん。白井さんに連絡してあげなくて良いんですか？」

「あの子はそんなこと言うと頑張りすぎて無茶するから」

「そう……なんですか」

「白羽君みたいですね」

また場が静まり返り気まずい沈黙が訪れそうになった時、桜野が口を開いた。

「何で俺？」

「つい先週、絶対安静バッドスキルって言われてるにも関わらずに私と佐天ちゃんを助けるために有バッドスキル能力不良の溜まり場に殴りこんだのは誰かしら？」

「あはははははははははは」

白羽は背中に大量の冷や汗が流れるのを確かに感じていた。ついでに言つと前田もいつ自分に振られるか分からなくて少し怯えている。

「へへ、白羽君って意外と無茶するんだ」

その後も話は続き、主に白羽の悪口、少し遅めに白羽達は眠りに着いた。

第二十七話・苦勞人（後書き）

次回辺り、あの白いのが出て来ます。

第二十八話・キャパシティダウン(前書き)

ついに今回からあの白いのが参戦?します。

第二十八話：キャパシティダウン

「ん〜朝か？」

白羽はいつもよりも早い時間に目が覚めた。御坂は前田の、佐天と桜野は白羽の部屋で寝ているので、白羽と前田はリビングで眠っていた。

外から耳鳴りの様な機械的な音が聞こえる。白羽が目覚めてしまったのはこの音のせいだろう。機械的音は多角的に聞こえてくる。不審に思った白羽は、情報を得るためにテレビを付けようと落ちているリモコンを拾いにいって、立ち止った。

「…ら…白羽……羽…」

微かだが、普段とは明らかに違った声色の佐天の声が自分の部屋の方から聞こえたからだ。白羽は迷わず自分の部屋のドアを開け、中に入った。そこには床に蹲り、しきりにゴメンと呟く佐天がいた。

「佐天！」

「…ゴメン……ゴメンね」

「おい、大丈夫か!？」

問いかけても佐天はゴメンとしか言わなかった。白羽は大急ぎで救急車を呼び、前田達に置き手紙を残して佐天と病院に向かった。

「佐天は、どうなったんですか？」

白羽は、いつもの病院の診察室でカエル顔の医者には佐天の容体を訪ねた。それに、カエル顔の医者は真剣な面持ちで答える。

「君は、今の状況を分かっているかい？」

「状況？」

「今、学園都市の全システムが乗っ取られているんだ。幸いにも医療機関や一般機能には問題ないけれど、警備員や学校は機能停止状態だ。」

そして、学園都市中のスピーカーからキャパシティダウンに似たものが流れている。それが鳴りだした途端、能力が使えなくなり、幻想御手の使用者が次々と倒れ出したんだ。彼女もその一例だろう」

「レベル……御手」

そこで白羽は思い出す。自分の部屋には一般生徒から没収した幻想御手が置いてあったこと。そして、佐天が自分のレベルに不満を持つていたことを。

「君は風紀委員だったね？なら、することは決まってるんじゃないかな？」

「……はい、行ってきます！」

白羽は診察室を飛び出していった。

やる事は決まっている。犯人はキャパシティダウンをすぐに使わずに少し時間を開けた。おそらく、音を解析してキャパシティダウン

を無効化する何かを作ったり、キャパシティダウンをただの能力者には能力が使えないだけになる様に少し変えたりしたのだろう。ならば、そのデータを奪う。それが一番手っ取り早い方法だろう。能力者を能力を使わずに倒すこと位は出来る。白羽には自信があった。

(待つてる……佐天！)

「キャパシティダウン？」

白羽が来る数分前、学園都市最強の能力者、一方通行もまた、病院の診察室へ来ていた。風をこじらせて入院した最終信号のお見舞いに来たのだが、機械的な音が聞こえてきた途端に苦しみ出した。カエル顔の医者に見てもらい、いまその結果と現状を聞いていた所だ。

「ああ、何故かは分からないけど彼女にも幻想御手の使用者と同じような症状が出ている。おそらく幻想御手のネットワークへの干渉がミサカネットワークにも悪影響を与えているんだろう」

「ンでどうすれば良い？」

「キャパシティダウンを奪った犯人はおそらくそれを無効化する装置を作っている。それを持ってきてもらえれば僕が何とかしよう」

「分かった」

一方通行は現代的デザインの杖をついて病院を出て行った。犯人の

目的は分からないがこれだけの事をするのだから、それなりに大きな事をするのだろう。能力は使えないが、それでも一方通行アクセラレータが負けるだけの理由にはならない。

「こんにちは、貴方が一方通行アクセラレータですね？」

病院からしばらく歩いた所で、爽やかそうな青年が話しかけてきた。今、学園都市中に自宅待機令が出ているから、今外に出ているのは命令を効かない不良共か、何か用のあるヤツだけだ。

「何だ？てめエ？」

「FIVE、と名乗らせて頂いています」

第二十八話：キャパシティダウン（後書き）

次回は少し投稿が遅れると思います。

第二十九話・不意打ち（前書き）

何とか4日で書けました。予定よりも早めに書けて良かったです。

第二十九話：不意打ち

「FIVE?」

「ええ、その名の通り超能力者《レベル5》を目指す組織です。そしてそれが達成されたので、古い超能力者《レベル5》の抹殺に来ました」

アクセラレータ
一方通行は話を聞きながら今の状況を把握していく。

相手は1人だけ、伏兵がいる様子はない。今、こちらは能力を使えず、相手はおそらく能力を使える。相手の能力はおそらく強力な能力を使えるが、こちらは拳銃が一丁だけ。

「先に言っておきましょう。貴方はどうやっても勝てない」

「ふざけた事言ってるじゃねエぞ、三下」

そう言い合って両者は行動に移る。FIVEと名乗る青年は何か能力を使って炎の剣を生み出し、アクセラレータ一方通行は現代的デザインの杖をついて走り出した。

「ははっ、逃げるのですか?」

(どうとでも言イヤがれ!)

今の状況は一方通行が圧倒的に不利だ。アクセラレータもし勝気が有るとしたならば、拳銃による不意打ち。アクセラレータだから一方通行はそれに徹する。アクセラレータ青年は余裕からか、一方通行をゆっくりと歩いて追った。

一方通行は地下の工事現場に身を隠していた。何の工事現場かは分からないが、狭い通路が複雑に入り組んでいるこの場所が身を隠すのに都合が良かった。
水道管や鉄材が一方通行の移動を少し邪魔するが、そこまで気にするほどでもない。
問題はどうかやって敵より早く自分が相手を見つかるかだ。ここに入つて逃げ回るうちに一方通行もあの青年を見失ってしまったている。

(どうする?)

その時、轟音と共に通路が赤く染まり、爆風と爆熱が同時に一方通行を襲った。その勢いで一方通行はゴロゴロと通路を転がる。

「ッー!!」

一方通行がそれが青年の能力によるものだと判断したときには、もう第二波が襲いかかってきていた。一方通行は水道管にしがみついて吹き飛ばされるのを防いだ。おそらくこれは一方通行がこの攻撃を受けて何か行動を起こすのを狙つてのものだろう。

(だが、今のでヤツの位置が分かった)

爆風は一方通行の前方からやってきた。つまり、あの青年は一方通行の前方にいますという事だ。一方通行は足音を殺して前に進む。もうあの爆風は飛んでこなかった。
一方通行が少し進むと曲がり角の先に、あの青年がいた。青年はあちらを向いていて、一方通行には気づいていない。

(…いけるな)

アクセラレータ
一方通行は拳銃を手に持ち、安全装置を外した。
そして、曲がり角に出て銃口を青年に向ける。だが、アクセラレータ
ここでバランスを崩した。

「クッ！」

「！！！」

青年がアクセラレータ一方通行の手に持つ拳銃に気付き自分の前に炎の壁を作る。
このままではアクセラレータ一方通行の拳銃の弾は青年に当たらないだろう。

しかし、この状況で、アクセラレータ一方通行は笑っていた。

第二十九話：不意打ち（後書き）

突然！次回予告

気付かれてしまった不意打ち。銃弾は青年には当たらず、
一方通行アクセラレータ
は危機を迎える。
だが、それでも彼は笑っていた。

第三十話・本当の狙い（前書き）

今回と次回、ちょっとムリがあるかもしれない。

第三十話：本当の狙い

バン！と言う音が工事現場に響いた。しかし、何も起こらない。一方通行の放った弾丸は青年にも、青年の作った炎の壁にすら当たらなかつたのだ。青年は炎の壁を消し、冷や汗をぬぐいながら言った。

「ははっ、残念でしたね。貴方は私に不意打ちする最初で最後のチャンスを失った」

「……そオだな」

一方通行は立ち上がる。拳銃がバレ、もう不意打ちは出来ない。だが、それでも彼は笑っていた。

「…そう思うなら何故笑っているのですか？死を受け入れでもしましたか？」

「はア？何言つてやがんだ？」

さて、突然だがここでさっきの弾丸の話をしよう。さっきの弾丸は青年にも、青年の作った炎の壁にも当たらなかつた。では、何処に行つたのか？

一方通行は近くの水道管を思い切り蹴つた。水道管はゴンと言う鈍い音を響かせ、青年のすぐ隣で破裂した。

「なっ！！」

水道管の破裂した部分から大量の水が勢いよく噴き出し、その水が青年の動きを完全に止める。さっき一方通行が放った弾丸は青年の

すぐそばの水道管にめり込んでいたのだ。それが一方通行の蹴りアクセラレータで完全に水道管の中に入り、水圧で水道管が破裂した。それ以前に、一方通行アクセラレータの真の狙いはそっちだった。もし完全に不意打ちが成功していたとしても、青年が反応し、防がれていた可能性がある。だから一方通行アクセラレータはわざとバランスを崩し、不意打ちを失敗させた様に見せて油断を誘ったのだ。

「詰めが甘インだよ。三下」

一方通行アクセラレータが青年に銃口を向け発砲すると、水が赤く染まった。

「……んなモンでホントにこの音が無効化できるのか？」

今、一方通行アクセラレータは工事現場を出たところにいた。そして今回の戦利品をもう一度見る。青年の持ち物は超小型のイヤホンが3つと携帯電話だけだった。携帯電話の中の情報はここに戻ってくるまでにすべて覚えた。次は、おそらくキャパシティダウンを無効化する装置が本当に機能するかどうかの確認だ。さっきの場所では電波が悪く、能力使用モードは出来なかった。

一方通行アクセラレータはイヤホンを耳に付け、スイッチをONにして起動させる。すると、さっきまで聞こえていた耳障りな音が一瞬でやんだ。

一方通行アクセラレータは電極を能力使用モードに切り替える。膨大な演算能力が戻り、学園都市最強の能力が戻ってくる。

「風紀委員です。その人、学生は自宅待機ですよ」
ジャッツメット

第三十話：本当の狙い（後書き）

突然！？ 次回予告

ついに会ってしまった一方通行さいきようちゆうと白羽翔としでんせつ2人は仲間となるのか、
それとも……

第三十一話：都市伝説VS最強の能力者（前書き）

今回、アクセラレータ題名通り白羽VS一方通行です。

第三十一話：都市伝説VS最強の能力者

中学生くらいの少年が一方通行アクセラレータに呼びかけた。その少年は、まだ夏だというのにコートジャジメントを羽織い、風紀委員の勲章を一方通行アクセラレータに見せつけている。

「まあ、不良共がうじゃうじゃしていて危険なので俺が送ります」

そう言って少年は一方通行アクセラレータの手を握ろうとし、一方通行アクセラレータに反射された。

「お前！！」

少年は後ろに下がり、コートの中から手裏剣を取り出し、一方通行アクセラレータに確認する。

「お前、能力を使えているな？」

一方通行アクセラレータは何も言わなかった。少年はそれを背定と受け取ったのだろう。手裏剣アクセラレータを一方通行アクセラレータに向かって投げつけた。

その手裏剣は一方通行アクセラレータに当たった瞬間に反射され、少年の方へ飛んでいく。少年はそれをかわしてコートの中から次の武器、クナイを取り出す。

(コイツを能力の実験台にするか……)

一方通行アクセラレータはそう考え、少年に弁解をしなかった。一方通行アクセラレータは地面を蹴って跳躍し、少年に突っ込む。対して少年は、それをかわしつつクナイで一方通行アクセラレータを突き刺そうとする。

だが、その一撃も一方通行が反射する。だが、少年は手加減をして
いたのか、反射によるダメージは少なかった。

「お前、何だその能力？」

少年は接近戦は危険と判断したのか一方通行から遠ざかり、そこか
ら一方通行に尋ねる。

「一方通行」

「!!!……何で…何でアンタみたいな人がこんなくだらない事に参
加してるんだ!!!」

少年は冷静さを欠いた表情で一方通行に接近し、拳を振るう。それ
に対して、一方通行は何もせずただ立っていただけだった。それ
でも、少年の拳は一方通行に触れた瞬間に反射され、少年の腕には
激痛が走る。

そんな戦いが数分続いた。

「おい、お前。俺が誰かわかってるってことは俺の能力も分かって
んだな？なのに何で諦めねえ？」

「何言ってる。絶対に……諦めれない理由があるんだよ!!!」

少年はもう一度、一方通行に向かってくる。少年の体はもうポロポ
ロで、これが最後の一撃であろう。それを前に、一方通行は笑って
いた。

「良いなお前、中々の善人だ」

第三十一話：都市伝説VS最強の能力者（後書き）

そろそろ慣れてきた！ 次回予告

絶望的な力の差を分かっているながらも渾身の一撃を放つ白羽。その
一撃は一方通行に届くのか……！？

第三十二話：守るもの

「絶対に……諦めれない理由があるんだよ!!」

白羽は一方通行アクセラレータに向かって行く。さっきまでの戦いで白羽の体はもうボロボロだった。だが、それでも白羽は向かっていく。

白羽は一方通行アクセラレータに向かって渾身の一撃をぶつけた。もう最初の様な手加減は一切していない。

「うおおおおおおオオ!!!」

白羽の渾身の一撃は一方通行アクセラレータに触れた瞬間に反射され、その力はそのまま白羽に帰ってくる。その勢いに吹き飛ばされ、ゴロゴロと地面を転がる。だがそれでも、全力で戦っても全く歯が立たなくても、白羽ヒーローは立ち上がるとする。

だが、一方通行あくじつはそれすらも許さない。

一方通行アクセラレータは白羽に接近しの背中に足を乗せる。そして、白羽の立ち上がるうとする力の方向を全く関係のない所へ運び、立ち上がらせなかった。

「オイ、その絶対に諦められない理由ってのは何だ？」

「守るものがあるからだ」

一方通行アクセラレータは少し考え込んだ後白羽から足をどけ、2つの超小型イヤホンと青年の携帯を白羽に投げた。

「それはキャパシティダウンの無効化装置と奴らの1人が持ってた携帯だ。持ってけ善人……あと、俺はあいつ等の仲間じゃねエよ」

「あんた……………」

一方通行は能力を使った高速移動でその場を去っていった。残された白羽はその後しばらく、その場で茫然としていた。

「佐天！」

白羽は病院と言う事も忘れて、佐天たち^{レベルアップ}幻想御手の使用者達が集められた病室に走りこんだ。医師はおらず、他の使用者達もうなされているので誰も白羽に文句を言ったりはしない。
白羽は佐天にの耳に一方通行から貰った超小型イヤホンを付け、スイッチをONに切り替える。

「し…………ら羽」

佐天が目を開き、咳く。その声は今朝の様な声ではなく、いつもの佐天の声だった。白羽は佐天の体を起こしつつ、佐天に話しかける。

「大丈夫か？佐天？」

「うん。それより、白羽の方がボロボロじゃん」

「良かった。他の人の分はカエルさんが今作ってるらしいからお前は心配しないでいいぞ。じゃあ、俺は行ってくるから」

そう言つて白羽は病室を出て行こうとする。だがそれを、佐天が袖を引つ張つて止めた。白羽は驚いて振り返る。

「何処に？」

「……………」

その質問に白羽は答えを迷つた。白羽が行こうとしているのは一方通行ラレータに貰つた携帯に登録してあった、住所だ。そこにはおそらく、いや確実に、御坂を圧倒した少女と同じかそれ以上の能力者がいるだろう。

だから白羽は嘘をつこうとし、佐天の瞳を見てためらつたのだ。真っ直ぐ白羽に向けられたその瞳を。

「どうせ、止めても聞かないんでしょう？なら、これを持って行きなよ」

「待てよ！俺にはもう一つそれがあるから大じよ」

イヤホンを外そうとした佐天を止めようとし、白羽が手を伸ばしたのを、佐天が手で制した。

「そうじゃなくてね、私の気持ち。あと、絶対に私を助けてね。約束だよ」

白羽が伸ばした手に、佐天が自分の付けていたイヤホンを付け、倒れた。

白羽は佐天に背を向け、病室を出て行く。病院を出るまで白羽が後ろを振り返ることはなかった。

(守るものが、また増えたな)

第三十二話：守るもの（後書き）

そろそろ定番！！ 次回予告

都市伝説しらはかけると超能力者アクセラレータの交差から、次々と交差する物語たちしゅじたいり。そして彼らはそれぞれの戦いの場へと歩み出す。

第三十三話：交差（前書き）

次回予告ほど物語は進展しませんでした。

第三十三話：交差

「…………アイツ、何処に行つたんだ？」

上条は走っていた。今朝上条が白羽の部屋を訪ねると、誰も御坂がいなかったのだ。白羽と前田は風紀委員^{ジャッジメント}の支部に行ったのだからと予想し、上条は御坂を探している。

その時、プルルルと携帯が鳴った。それは上条の物ではない。白羽の部屋に落ちていた御坂の携帯だ。上条は通話ボタンを押して、携帯を耳に当てた。

『もしもし！お姉様！！』

「違います。俺は上じょ……………つてその声は白井か？」

『貴方は！？つてそれよりお姉様は今どこにいますの！？』

「それが、俺にも分からねえんだ。昨日は白羽ん家に泊まつたし、朝飯も食つてるから体調は大丈夫だと思っけど……………」

「そうですか……………お姉様を見つけ次第。連絡をお願いしますの」

上条は通話の切れた携帯を耳から離し、ポケットにしまう。そして上条はまた走りだそうとして、足を止めた。

それは、こちらに走ってくる人影が見えたからだ。自宅待機命令が出ているので、人がいるのは珍しい。上条はそれが御坂である確率を考えて足を止めたのだ。

「上条さん！」

「白羽！」

その人影は、白羽だった。たった今病院から走ってきた白羽は肩で息をしながら言った。

「どう、したんですか？」

「御坂が部屋からいなくなってるんだ。だから俺は御坂を探してた。お前は？」

「この騒動の犯人が分かったんで、その本拠地に殴り来むところですよ。ソイツらはFIVEって名乗ってる奴らで、構成員は4人。そのうち1人は戦闘不能。あの強力な能力は、幻想御手のネットワー^{レベルアップ}クにキャパシティダウンを使って干渉してネットワークをコントロールし、その4人の能力演算に使用しているかららしいです」

「良く調べたな」

「いいえ、全部この携帯の中の情報です」

言いながら白羽は携帯を取り出してそれを上条に見せる。

「上条さんは御坂さんを探してください。俺はこの携帯の中に住所んどこに行くんで、御坂さんを見つけたらそこに来てください。あとこれは、キャパシティダウンの無効化装置です。上条さんには必要ありませんが、御坂さんに会ったら渡してください」

携帯と超小型イヤホンを上条に渡し、白羽は走って行った。

「お前、どこに行く気だ？」

FIVEの本拠地のビルの前で、白羽は茶髪の少年に話しかけられた。その少年は「このビルに入るなら殺す」とでも言いそうな表情で白羽を睨んでいた。周りには何も無く、ただそのビルだけが建っている。殺し合いをするにはうってつけの状況だろう。だが白羽は、そのくらいでは怯まない。

「このビルだ」

「何のために」

「お前らを潰すためだよ！FIVE!!」

そうして、超能力者（FIVE）と都市伝説めいほくわんせつの戦いの火ぶたは切つて落とされた。

第三十三話：交差（後書き）

そろそろここに書くことなくなってきた！ 次回予告

ついに切って落とされた、白羽とFIVEの戦いの火蓋。戦いの行方は……

第三十四話：都市伝説 VS FIVE（前書き）

すみません。投稿遅れました。というのも家のパソコンが壊れてしまったんですね……修理に出しましたが1ヶ月はかかるそうです。

第三十四話：都市伝説 VS FIVE

「やってみるよ。ジャツシメント風紀委員！！」

その言葉と共に少年は白羽に向かって走り出す。その距離は約3メートル、距離は一瞬で詰まった。

白羽は少年が向かってくる間にトンファーを構え、少年を迎え撃つ。

(動きが単調だ)

白羽に「殴ってください」と言っているかのごとく、少年は真っ直ぐに白羽に突っ込んでくる。そして最後の一步でしゃがみ、アップパーをくりだそうと足に力を入れる。もうタイミングも軌道も変えられない。白羽はちょうど少年の顔面に自分の拳が当たる様に拳を振るう。

だが、少年のアップパーはワントンポ遅れて白羽の顎へと突き刺さった。

「ッッ！」

白羽はアップパーのダメージを逃がしつつ、少年を距離をとるため、後ろに向かつて思い切り飛ばうと足に力を込める。そして地面を蹴り、後ろに飛ばうとした。

だが、飛ばない。少年が白羽に触れた瞬間、まるで飛ばうとした力を全て抜き取られたかのようにだった。

少年は白羽が飛ばうとして作ったすきに回転し、白羽の顔面に裏拳を放った。その威力で白羽は数メートル後ろに吹き飛ばされる。

「どうした？俺らを潰すんじゃないのか？」

少年が挑発するが白羽は気に留めず、状況を判断していく。さっきの不自然な動き、そして白羽の動きを止めたアレ。それをもとに仮説を立てる。

「テレキネシス念動能力か」

「それは違う、まあ戦いの最中に能力を教えるほど俺はバカじゃないがな……」

嘘か本当かを白羽に考えさせる隙を与えず、少年は白羽に襲いかかる。白羽は飛び蹴りを間一髪でかわし、トンファーで少年の背中を思いつきり殴った。だが、手ごたえがない。さらに、少年はまったく痛がるそぶりを見せずに裏拳を放つ。

何となくそれが予測出来ていた白羽は、少年に触れないようにしながら後ろに飛んでそれをかわした。

「そうか……お前の能力は、触れているもののエネルギーを吸収する能力。だから、あんな風にタイミングを外したり、トンファーで殴ったのに全く痛そうにしてなかったんだな」

「流石だなジャッジメント風紀委員。いつも能力者を相手にしてるだけあって能力の判断は一流だな」

肯定、おそらくそれは嘘ではないだろう。ならばする事はただ一つ。

「エネルギーの吸収限界まで殴り続けてやるよ」

始めて、白羽から少年にしかけた。

高速で接近し、右での裏拳を少年の原にぶつける。やはりそのエネ

ルギーは吸収されるが、そのまま左手での正拳に繋げる。それを何回もくりかえす。

少年は余裕からか全くそれに抵抗せず、ただその攻撃を受けていた。

「はあ…はあ……はあ」

白羽が肩で息をしながら少年の方から飛び退く。かなりのエネルギーは吸わせたはずだが、少年はまだ余裕の様子だ。

「そろそろ、終わりにするか。くらえ、エネルギーバースト力の放出」

言いつ共に少年が、さっきまで溜め続けたエネルギーを放ち、それが白羽に直撃した。白羽は何メートルも吹き飛ばされ、気を失った。

第三十四話：都市伝説 VS FIVE（後書き）

前書きで書き忘れましたが、その間は更新遅れます。すみません。

第三十五話・それぞれの戦場へ（前書き）

パソコンを修理に出したままなので、まだ投稿は送れません。

第三十五話：それぞれの戦場へ

昼間というのに静まり返った学園都市。それを一望できる病室に一方通行はいた。その病室のベッドには打ち止めが寝ている。
一方通行が持ち帰ったキャパシティダウンの無効化装置、C D
Cによりもうキャパシティダウンの影響は受けていない。他の妹達や幻想御手使用者にも、もうすぐ渡されるとカエル顔の医者と言っていたが、一方通行にはどうでもいい話だ。

「……………そろそろ行くか」

一方通行は、打ち止めを最後にチラリと見て、病室を出た。すると一方通行が所属する組織『グループ』の構成員、海原光貴が病室の前にいた。

「何の用だ？召集はかかってねえぞ。学園都市の機能は全部乗っ取られてるとか言ってるやがるが、どうせ上は無事なんだろ」

「ははは……………何というか、まあ、今回は僕個人のお願いです」

一方通行はそれを聞いて眉をひそめた。『グループ』はそれぞれがかなりの戦闘力を持っている。もちろん、それは海原も例外ではない。

では何故、一方通行に頼む必要があるのか。

「……………俺は忙しい。他を当たれ」

「いえ、これは打ち止めのためでもあるんですよ」

「……何だ？」

「学園都市のセキュリティが殆ど機能していない今のうちに、学園都市に攻撃を仕掛けようとする学園都市の反対組織がいま学園都市に向かっています。」

僕が行ってもいいんですが、何せ人数が多くて……全部の侵入を防げるとは限りません。だから、貴方に協力を求めたんですよ。」

アクセラレータ

一方通行は無言でうなずき、海原も歩き出した。

2人は向かう、クソツタレな戦場へ。

「翔……」

桜野は白羽の病室にいた。白羽はベッドで死んだように眠っている。街中で気絶していた所とある青年に運んで来られたのだ。そして、それを聞きつけた桜野が支部から来た。関原と前田も今している仕事を終えたら来る予定だ。

「今度は……どんな無茶したのよ……」

白羽の布団の端を握りしめ、絞り出すような声で桜野は言った。だが、返事は返ってこない。

桜野の瞳から透明な滴が流れ、その滴は桜野の頬を伝い、白羽のベッドに落ちた。

「……絶対に翔が戦わなくちゃ、守らなくちゃいけない理由なんて……」

ないんだよ……………」

そこで一旦言葉を止め、あふれる涙をふき、「だから」と桜野は続ける。

「今は私が戦う、守る。翔の守りたいものを全部」

桜野は歩き出す。少年の守りたいものを守るため、様々な思いの交差する戦場へ。

「御坂！」

上条は、やっと御坂を見つけ彼女に駆け寄った。特に外傷は無く、戦闘はしていないようだ。

「アンタ……………」

「心配させやがって…………とりあえず、これをつけてくれ。白羽から貰ったんだけど、キャパシティダウンの無効化装置らしいから」

そう言つて上条は御坂に超小型イヤホンを渡した。御坂はそれをつけ、本当に能力が使えるか確認してみる。すると、確かに能力が使えた。

「白井が心配していたから、白井の所に行ってやってくれ。もうこの状況だしな、お前の疑いも晴れてるだろ。それとお前の携帯、返

しとくぜ」

「アンタはどうすんのよ？」

上条から自分の携帯を受け取りながら、御坂は尋ねた。それに上条は笑ってこう言った。

「俺？俺は部屋に帰るよ。じゃあな」

上条はそう言って上条は真っ直ぐに進んでいった。

だが、そちらは上条の住むマンションの方向ではない。上条が向かうのはFIVEの本拠地だ。御坂を連れていけばかなりの戦力になっただろうが、上条はそれをしなかった。

上条は進む。平和で穏やかないつもの日常を取り戻すために、全ての原因の戦場へと。

御坂は歩いていった。上条に言われた通り、白井に会うためだ。じつとしていられなくて白羽の部屋を飛び出したが何もできず、上条に心配をかけてしまったらしい。それが、申し訳なくて上条に何も言えなかった。

俯いて御坂が歩いていると、不意にポケットに入れてあった携帯が鳴り出した。

「もしもし」

『もしもし！お姉さま！？』

「黒子……」

『良かったですの……本当に良かったですの』

「ごめんね。心配かけて」

『いえ、私は信じています』

御坂に、白井の言葉はそこまでしか聞き取れなかった。何故かというと、白井の声は爆発音にかき消されたからだ。

「黒子！黒子！！」

御坂は通話を切って走り出した。何が起こったのか分からない、未知の戦場へと。

第三十五話・それぞれの戦場へ（後書き）

次回予告

それぞれの戦場へ向かった主人公達。そして、白羽は……

第三十六話：秘密兵器（前書き）

遅くなりました。ですが、そろそろパソコンが帰って来ると思いますが……そうしたらもとのペースに戻します。

第三十六話：秘密兵器

「う…痛ッッ」

白羽が目覚めると、目に入ったのは白い天井。意識が朦朧としているが、ここがいつもの病院だと言うことはすぐに分かった。全身が痛い、動けないほどではない。

「くそっ」

何となくあの少年に負けたことは覚えている。それが悔しく、奥歯を噛みしめ、布団をぎゅっと握りしめた。そして気付く。その布団が少し濡れていることに。

「…俺のせいで、泣いてたのか……」

白羽は顔を顰めた。だが、すぐに顔を上げベッドから降り、誰にへとなく言う。

「なら、こんなくだらない事件ことすぐに終わらせて、その分笑わせてやるしかないよな！」

「はあ……君は一度『絶対安静』の意味を辞書で調べた方がいいと思っよ？」

「え、カエルさん……あはは」

ちょうどタイミングよくカエル顔の医師が白羽の部屋に入って来た。その手には1つの紙袋が握られている。

「君のお友達もそれがよくわかってるらしいね？」

呆れた様子で、カエル顔の医師は白羽にその紙袋を手渡した。白羽はその中身を知っている。この紙袋は白羽の部屋にあったものだからだ。

「伝言だよ」翔、お前の事だからどうせ勝ち目がなくても行くんだろ？本当なら俺も一緒に行ってやりてえが、ちよつと用事が出来た。桜野と一緒に行け。あと、カエルの人にお前ん家にあつた秘密兵器を渡してあるから』だそうだよ？」

「（美鈴？いないけど……）」

白羽はその紙袋を開け中身を取り出す。それは発条包帯ハードテーピングと呼ばれるものだった。

「あと僕からも一つだけ言っておくよ、死ぬな。死ななければ助けてやる。だから、生きて帰ってこい」

「はい」

カエル顔の医師はそれを言つと、病室を出て行った。

白羽は発条包帯ハードテーピングを装備し、コートの袖を通してはつとする。

携帯がないのだ。そして最近、携帯を落とすほど激しい運動をした場所は1つしかない。あのビルの前だ。しかも白羽の携帯はGPSで居場所が確認できる。もし桜野が、白羽が携帯を持っていないことに気づいたら……

「……馬鹿野郎」

白羽は病室の窓を開け放ち、驚異的スピードでそこから飛んで行った。

「うーん、終わった？」

可愛らしく小首を傾げて少女が尋ねるが、返事をするものはいない。なぜなら、少女の周りに居る者達は皆、気絶しているからだ。

彼女がいるのは風紀委員177支部の目の前の広場。その周りには、数十人の風紀委員が倒れている。

「あー、中も掃除しとくか」

そう言いながら支部の中に入っていきこうとすると、足元に数個の手裏剣が突き刺さった。

「させると思うか？」

少女の真上から手裏剣が高速で降ってくる。少女は磁力を操りその軌道をずらし、真上に電撃を放つ。

だが相手は、その電撃が衝突する直前に身をねじり、電撃を交わして少女の数メートル右に着地した。

「まだ残ってたの、風紀委員？」

「まあ、俺は風紀委員じゃねえけどな」

少女の左からも少年が歩いてくる。確かに、右の少年は風紀委員ジャッジメントの勲章を付けているが、左からやってきた少年は付けていない。

「何？？2対1なの？男らしくない」

「嫌い。超能力者レベル5」

「ああ、お前は超能力者レベル5なんだから能力が使えない能力者2人相手くらい、卑怯でも何でもないだろってコイツは言いたいんだよ」

「ふん。で、行かせないってどうする気？」

「もちろん」

同時に2人は踏み出し、叫ぶ。

「「ブツ倒す!!!」」

第三十六話：秘密兵器（後書き）

次回予告

FIVEの少女に戦いを挑んだ前田と関原。その結末、そして他の風紀委員達は……

第三十七話：177支部（前書き）

来ました！帰って来ました！パソコンが帰って来ましたあああああ
あ！！

これからは前の様な投稿ペースに戻します。

第三十七話：177支部

前田と関原は同時にFIVEの少女に向かって飛びかかる。

それに対して少女が行った行動はシンプルだった。右手を軽く挙げたのだ。それだけで激しい電気が発生し、2手に分かれて前田と関原に襲いかかった。

前田はクナイを投げて電撃をそちらに誘導することによってかわし、関原は普通に地面を転がって回避した。

「手加減はしない!。」

「無駄」

前田が懐からクナイを取り出し、少女の首を狙った。だが、少女は右手を軽く振り電撃を前田に向けて放つ。

「!!!。」

瞬間、前田に向かって何かが飛んで来て前田が横に吹っ飛んだ。その何かは、前田を吹き飛ばしたその衝撃で前田と逆の方向に着地した。

「間一髪ですの」

その何か、とは白井だった。普段の戦闘では能力を主力に戦っているので今回は支部の中で待機していたのだが、前田の危機に飛び出してきた。

「悪い。だが2階からの飛び蹴りは今度から止めてくれ、かなり痛

い。」

「いえいえ……私はお姉様に牙をむいた愚か者を一目見に来ただけですの」

白井は言葉こそ冷静だったが、その目は今にも少女に襲いかかりそうな眼光を放っていた。

少女はその視線を受けても冷静だった。1人増えても、能力が使えない能力者3対超能力者^{レベル5}だ。そんなに焦ることではない。だが、同時に少女は忘れていた、3対1だと。

「隙ありだ!!」

そう、白井の登場に少女の気を引きつけていたのは関原が少女の懐に接近する時間を稼ぐためだったのだ。

「ばっか 自分から知らせてどうすんのよ」

少女が手を振り、関原に電撃を浴びせようとする。が、

「こっするのよ!!」

さきほど白井が飛び降りてきた窓から固律が飛んできて、その勢いのまま少女を殴り飛ばした。少女は勢いよく飛んでいき、数メートル後退して踏みとどまった。気絶こそしていないが、かなりの痛みが襲っているはずだ。

「流石に、1発じゃ気絶してくれないか」

「ッッ!!不意打ちくらいで調子に乗るなよ!!雑魚どもがああア

「!!」

少女は怒りをあらわにして今までで一番大きな電撃を全員に向けて放つ。白井たちは各方に転がってかわし、すぐに起き上がり少女に向かって走り出した。

「なぐんちやってえ」

突然、それまで怒りの表情を浮かべていた少女が笑った。その口が裂けたかの様な笑いに全員が寒気を感じたのと、少女から超広範囲に電撃が放たれたのはほぼ同時だった。その電撃は全員に直撃し、体を麻痺させた。

「調子乗りすぎい それに、あたしがその程度でキレル訳ないでしょ お でも…………… ちよ〜つとイラつと来たかな 殺す気は無かったけど…死んじゃえ」

少女がポケットからコインを取り出し、それを親指で弾いた。

白井達はその技を知っている。コインを音速の3倍のスピードで打ち出す、彼女達の良く知る人物の異名にもなっている必殺技。超電^レ磁砲^{ルガン}。

少女の指に高密度の電気が溜められていき、コインが親指に戻ってくると共に解き放った。超高速で飛んだコインは白井の頭を吹き飛ばす。

「!!!!」

はずだった。

だが白井は無事で、少女の放った超電磁砲^レは白井に当たる直前に別の光の筋に吹き飛ばされた。

「何、人の後輩に手を出してくれてんのよ」

「おお 来た 来た 超電磁砲^{レールガン}」

その光の筋は、憤怒の表情で少女を睨みつける御坂の超電磁砲^{レールガン}だつた。

「アンタは私が……ブッ倒す！」

第三十七話・177支部（後書き）

次回予告

御坂の宣戦布告と同時に、白羽、上条の戦いも始まっていた。

第三十八話：宣戦布告（前書き）

少し投稿遅れました。テスト続きでパソコン開いてなかったのだから…
…すいません。

第三十八話：宣戦布告

桜野とFIVEの少年は学園都市の外への出入り口付近で戦っていた。

「はあ……はあはあ」

「どうした？もう終わりかよ、ジャッジメント風紀委員」

「ッッ！」

その戦いは一方的だ。桜野が攻撃をし、少年がその攻撃を受ける。だが、少年は能力によって全くダメージを受けず、桜野が一方的に疲れていく、と言う意味でだ。

「ならこっちから行くぜ！」

そう言つて少年が初めて動いた。右足を勢いよく踏み出し、同時に桜野の攻撃で吸収したエネルギーの一部を放つ。その威力で桜野に高速接近し、右の拳で桜野を殴りつけた。桜野は寸の所で腕をクロスにしてガードしたが、大量のエネルギーの乗せられた一撃は桜野の体を浮かせ、後方へ吹き飛ばした。

「うっ！」

その勢いでビルの壁に激突し、小さくはあるが血の塊を吐きだした。

「まだまだ！」

少年はまた桜野に高速接近し殴りつけようとするが、今度は間一髪で桜野がしゃがんでかわした。だが追撃が無駄な以上、桜野は距離をとるしかない。

少年はそのまま壁を殴りつけて破壊し、その破片を勢いよく飛ばした。破片は、1つ1つが鋭利な刃物となって桜野に襲いかかる。

「がああー!!」

背中に大量の破片が刺さり、桜野が叫び声を上げて転がりまわる。対して少年は能力によって振れた全ての破片のエネルギーを吸収し、全く傷を負っていない。

「そろそろ終わるか？」

少年は桜野の方に手のひらを向け、全てのエネルギーをそこに集める。

「エネルギーバースト
力の放出」

言葉と共に少年は集めたエネルギーを放出し、桜野を吹き飛ばす。アスファルトが削られ、黒い埃が舞う。風が吹き、埃が全て吹き飛んだ後には、えぐれたアスファルトだけが残っていた。

「ん？」

少年は疑問を感じた。相当なエネルギーを放ったが、跡形もなく吹き飛ばすほどではなかったはずだ。

その時、高速で何か少年の前に来た。それは、まだ夏だと言つのにコートを羽織った少年、白羽だった。

「……何をしやがった？」

「ちよつと遠くまで、美鈴を置いてきただけだ」

そう、白羽が発条包帯ハントテープによる肉体強化で高速移動し、桜野を安全なところまで運んでここに帰って来たのだ。

「覚悟しろよ、お前は俺を怒らせた」

少年を激しく睨みつけ、白羽はそう宣戦布告した。

「……………ここも違うか」

上条は、FIVEの本拠地であるビルの中にいた。一応、このビルはなんらかの研究機関らしく、入口に案内板があった。それを見て、上条は怪しそうな部屋をしらみつぶしに見ているのだ。

(…にしても、全く人がいないってのはどういう事だ?)

白羽に渡された携帯の情報通りに来たのだが、このビルには全く人がいなかった。それはただ人員不足なのか、それとも自信の現れなのか。それに白羽がないことも上条には気になった。

上条は、次の部屋のドアに手を掛けた。そして気付く、その部屋の中から物音がすることに。

息を殺し、一気にドアを開け放ち中に飛び込む。中にいたのは白衣の老人が1だけだった。

「おや……………来客か」

「…それが、この音の制御装置か？」

上条は老人の後ろの装置を指差して言った。

「そうだが……壊せると思っているのか？」

「ああ、アンタの幻想ごとブチ壊してやるよ」

上条とFIVEの老人の戦いの火蓋は静かに、だがしっかりと落とされた。

第三十八話：宣戦布告（後書き）

次の投稿も若干遅れると思います。

第三十九話：多才能力

上条は一気に老人との間を詰めるため、爆発的勢いで床を蹴った。約2メートルの間合いを一瞬で詰める跳躍だ。対して老人は身じろぎ1つしない。

上条は老人の眼前まで迫り、拳を振り上げる。が、上条は一瞬でドアまで吹き飛ばされた。

「があ！」

それは、老人が能力によってつくりだした氷の塊を高速で上条にぶつけ、吹き飛ばしたのだ。だが

（おかしい……）

そう、おかしいのだ。老人の能力が超能力者級レベル5のものだとしても、氷の塊を作り出し、それを上条を吹き飛ばすような勢いで発射することなど不可能なのだ。それは、それをするためには氷の塊を作るための能力とそれを高速で飛ばすための能力の2つが必要だからだ。もしそれが出来るとすれば、不可能とされた能力……デュアルスキル 多重能力。

「不思議か？少年よ」

老人は、上条の思考を読みとったかのようなタイミングで言う。

「私の能力は……マルチスキル 多才能力と言うものだ。都市伝説の多重能力デュアルスキルとは似て非なるものだよ」

「マルチスキル 多才能力？」

「ああ、デュアルスキル多重能力が1人の能力者で複数の能力を使うのに対し、マルチスキル多
才能力は脳波のネットワークにより複数の能力者の演算能力を使い
複数の能力を使う……と言ったところかな？」

上条に難しい理論は分からなかったが、とりあえず目標は確認でき
た。老人はそのネットワークとつながっているはずだ。だから老人
に右手で触れれば、イメージブレイカーネットワークを壊す事ができる。

(それで、勝てる)

上条はまだイメージブレイカー幻想殺しを使っていない。だから、老人は上条がただの
無能力者(レベル0)だと思っている。上条の勝機はそれだ。ギリ
ギリまでイメージブレイカー幻想殺しを温存し、最後は特攻で一氣にカタをつける。

「へ〜ブツ倒す、か〜 あたしに1回負けてるクセに良く言えた
わねえ」

FIVEの少女は御坂の方へ振り返りながら言った。さっきまで戦
っていた白井達にはもう飽きたとでも言うように。

「ってそう言えば 能力が使えるってことは〜まさかあいつに勝
つたの？あはは！だっせ！！流石、あたしと違って最後にギ
リギリ超能力者レベル5になっただけあるわあ」

「ギリギリ？」

「そう、あいつはネットワークを使ってギリギリ超能力者レベル5になった一番の作り物

「ああ、言っとくけどあたしは、幻想御手レベルアップだけで超能力者レベル5になった一番天然あんなたぢに近い超能力者」

言い終わると共に少女が電撃を放った。御坂はそれの軌道を能力で曲げ、電撃で反撃をする。少女も同じようにその電撃の軌道を曲げ、回避した。

「……っ」

突然御坂が踵を返し、少女に背を向けて走り出した。

「どうしたの、まさか今更怖くなったとか？そんな面白くないこと止めてよ、だってどうせ殺すんだしい」

少女もそれを追って走り出す。

少し走ったところで、御坂は立ち止った。少女も同じように止まる。そこは以前、御坂が表層融解フラックスコートの少女と戦った場所だった。

「何のつもりなの？」

「あゝ、アンタがバカで良かったわ」

「は？」

「アンタがバカ正直についてきてくれたおかげで、あの子たちから引き離れたわ」

少女はそれを聞いて納得した。能力が同じ以上、自分が有利な場所に相手を連れてくれば、少女にも同じだけの恩恵が与えられてしまう。だから、場所を変える意味が分からなかったのだ。

だが、白井達を巻き添えにしない為と言うなら納得できる。

「さあ、始めるわよ」

第三十九話：多才能力（後書き）

次回予告

FIVEの少年と白羽の戦い。お互い一歩も譲らない中、白羽が放った渾身の一撃は……

第四十話：本気（前書き）

こころ視点が変わっていましたが、今回からは1話1視点です。

第四十話：本気

「ははは……お前を怒らせた、か。何だそれ、ギャグか？」

「黙れよ、こんなにブチ切れたのは久しぶりだ」

そう言つて、白羽はコートから幾つかの金属の塊を取り出し、その金属の塊達を変形させて武器を作った。

「だから、本気でいく」

その武器とは、2メートルはあるであろう棒の両端にそれぞれ刃がついた両刃鎌だった。

「おいおい、ジャッジメント風紀委員が鎌かよ」

「ああ、俺もそう思ったから使うのを控えてた」

「だがそれでも、お前は俺に勝てない。レベル5超能力者をそれ以外の格の差を教えてやるよ」

「知るか……そろそろいくぞ」

言い終わると同時、白羽はコートを脱ぎ捨てて身を軽くし高速で接近した。少年の眼前で左足を踏み込ませ、鎌のしなりを最大限に利用した一撃を放つ。

だが、少年はビクともしない。

そこで白羽は体を反回転させ右足を踏み込み、刃の裏の部分で思いつきりブン殴る。

「!!」

それに対して、初めて少年が反応した。手を突き出してそこにエネルギーを収縮させ、白羽の攻撃を防いだ。だが、勢いを殺しきれなかったのか少年は後退する。

「なんつー威力、生身じゃ不可能だな。それを使ってアイツからCそれDを盗ったのか」

少年が尋ねるが白羽は無視して質問、いや確認する。

「今、エネルギーを放出して防いだのは……吸収の限界だったからか？」

「……………」

沈黙でその事を確信した白羽は少年に高速で接近し、鎌を横なぎに振った。少年はしゃがんでそれを交わし、足からエネルギーを放出して勢いを増したアッパーを繰り出す。

体を後ろに反らせることでそのアッパーを交わした白羽はそのまま地面に手をつき、地面を押し回しながら後退した。

少年はその一瞬の隙に白羽に接近し、エネルギーを収縮した一撃を放つ。白羽はそれを鎌でガードしたが、空中でガードしてしまったので踏ん張ることができない。結果、白羽は壁に叩きつけられる。

「がっ！」

肺の中の空気を無理矢理に押し出され白羽が怯んだ一瞬に、少年はエネルギーの放出を使った高速移動で

接近し、その勢いのまま拳を白羽に向けて放つ。白羽はほとんど反射的に、横に転がってその攻撃を交わした。だが、少年のパンチの威力で壁が少し砕け、破片が凶器となって白羽に振りかかる。

「ッッ！！」

白羽は、地面を蹴り前方に進むことでそれを回避した。だが、すぐに切り返して横なぎに鎌を振るう。意表を突かれた少年はモロにその攻撃をくらった。白羽はそのまま回転して鎌を振るい、とどめを刺そうとする。

だが……鎌は白羽の手からすっば抜け、少年と違う方向に飛んでいった。

「しまっ！」

もちろん少年がその隙を見逃すはずはなく、さっきのエネルギーを全て集めて拳を振るう。

致命傷を防ぐため、白羽はそれを左腕で防いだ。威力で数メートル吹き飛ばされ、白羽は紙面を転がった。

「うがああああああああああああ……！！！！！！！」

バキバキと骨の砕ける音が鳴り、叫び声と言うよりも雄たけびに近い絶叫が一体に響いた。

第四十話：本気（後書き）

次回予告

激しさを増す御坂とFIVEの少女の戦い。そしてその決着は……
…

第四十一話：反撃の超電磁砲（前書き）

今回、いつもより長めです。

第四十一話：反撃の超電磁砲

「くらえ」

少女が電撃を放ち、御坂がその軌道を捻じ曲げて電撃を回避する。そして間髪いれず御坂も電撃を放ち、今度は少女が軌道を捻じ曲げて回避する。

これと同じ攻防がかれこれ10分は続いていた。2人の力はほぼ拮抗している。つまりは、さきにスタミナがなくなつた方が負ける。正真正銘のガチンコだ。

(くそっ！こっちは全然余裕ないのに)

「死ねえ」

「余裕かよ！」

御坂は少女の電撃の軌道を捻じ曲げて回避しながら考える。このままでは御坂の方が先にスタミナ切れになる。それを回避するには、少女の裏をかいた攻撃をしなければならぬ。

だが、電撃は軌道を捻じ曲げられ、砂鉄の剣は強制的に砂鉄に戻る。ならばどうする。

「はあ……はあ……」

「何？もう息切れ？残念ね、周りには壁しかないからどこにも逃げられないわよ」

少女の言うとおりだ。周りには壁しかなく逃げられないと共に、一

コインが辺りに散らばった。

「はあ……はあ……やった？」

「………ったいじゃないの!!」

「……くそ……しぶといわね」

最初の固法からの一撃に加えて、今の一撃もくらったのだ。足元がフラつく位にはダメージを受けているはずなのだが、少女はさつきまでと変わらない動きで立ちあがった。

「あゝもういいわ。やめた。本気で殺す」

肩をコキコキと鳴らしながら、さっきまでの気の抜けた口調とは違う冷たい声色で少女は告げた。

「吹き飛ばす」

少女はポケットからコインを取り出し、それを指ではじいた。御坂も慌ててコインを取り出し、電気を親指に集める。

ゴオオオ!という轟音が響き、2人の超電磁砲レールガンが同時に炸裂した。その超電磁砲は2人の中間地点で衝突し、やがて摩擦で消滅した。

「まだまだあ!」

それとほぼ同時に少女がコインを弾き、御坂もそれに合わせる。超レールガン電磁砲はまた2人の中間地点で衝突し、摩擦で消滅する。

「はあは……あ」

「……………はあ、はあ」

流石に、2発も連続で超電磁砲レールガンを放ったので2人は息切れしている。御坂はポケット中を探り残弾数を確かめた。残弾はゼロ。少女はど
うか分からないが、最悪でも落ちているコインを拾えば大丈夫だろ
う。

コインは広範囲に転がっていったが、運の悪い事に御坂の方には1
枚も転がって来てはいなかった。

「あんたさ、もうコインが残ってないんじゃない？」

「……………」

「あははは、残念ね。勝負アリだわ」

少女はそう言いながらコインを弾き、親指に電気を集める。

「……………そうね、確かにこの勝負」

御坂はそこで言葉を区切り、親指に電気を集めながら堂々と宣言し
た。

「私の勝ちよ」

御坂はスウウと息を吸い込み、腹から声を出す。

「黒子おおおおおおおおオオ!!!」

瞬間、御坂の親指の位置にコインが現れ、御坂が超電磁砲レールガンを放つ。

少女も少し遅れて超電磁法レールガンを放ち、2つの超電磁砲レールガンがやや少女よりの場所で衝突する。

「はあああああああ！！」

御坂の超電磁砲レールガンが少女の超電磁法レールガンを貫き、少女すれすれを通った。

「ジャッジメント風紀委員ですの。貴方を拘束します」

その後、テレポート空間移動で少女の真後ろに現れた白井が少女を拘束した。直前の超電磁砲レールガンで完全に戦意を失っていた少女は、全く抵抗をしなかった。

「お疲れ様ですの、お姉様。ところで、何故私が来たことが分かったんですの？」

「それはね………何となくよ。ところで、前田君達は？あとその装置もどこから？」

「これは佐天さんが持って来てくれたんですの。病院の方で急ピッチで生産されているそうですよ。」

そして、前田君達は『御坂さんはお前がいけば大丈夫だ。だけど白羽いづは違うからな。』と言って行ってしまいましたの。困ったものですわ」

そう言う白井はとても清々しそうな笑顔をしていた。

「なら、あつちは任せていいわよね？」

「ええ、もちろん」

第四十一話：反撃の超電磁砲（後書き）

次回予告

絶体絶命の状況。だが、それでも都市伝説しじょうでんせつは立ち上がる。

第四十二話：守るべき都市・守りたい仲間・守らなくちゃいけない約束（前書き）

ちよつと投稿遅れました。

第四十二話：守るべき都市・守りたい仲間・守らなくちゃいけない約束

「惜しかったな、風紀委員。ジャッジメント最後に気を抜いたのと、俺が超能力者レベル5だった事が、お前の敗因だ。そして、学園都市このまちの負けだ」

少年は冷たく告げた。

白羽は動けない。激痛が左手から体中に駆け巡り、声を出す事すらできない。

それでも、自分に言い聞かせる。

(立て、立てよ)

少年が白羽に向かって歩いてくる。少年が白羽のもとにたどり着いたときが、白羽の完全な敗北の瞬間だろう。だから、白羽は言い聞かせる。守るものを思い起こして。

(お前には、守るべき都市と)

都市まち、白羽を育ててくれた学園都市たいせつなほしよ。

(守りたい仲間達と)

仲間、白羽を支えてくれている人達ともたち。

(守らなくちゃいけない約束が)

そして佐天との約束、白羽の心の一番奥にある大切な約束。ちかい

(あるだろおおおおおおおおお!!!)

歯を食いしばり激痛をこらえ、守るものために都市伝説しほかぜのしは立ちあがる。

「!?!」

「FIVE、俺は負けない。お前みたいなヤツに俺の守りたいものは、何一つ壊させない!!」

その思いは、想いは、白羽の力になる。

白羽は感じていた。自分の能力が、今までないほどに強くなっていることを。

今まで1度も超えられなかった超能力者レベル5の壁を、白羽は守りたいというただそれだけの思いで、超えた。

「はは、ははは。何者だよお前?」

「俺は、ただの都市伝説だ」うわさばなし

白羽はしゃがみこみ、右手を地面につけた。能力を使って砂鉄を操り、大量の鉄柱を少年に向けて全方位から伸ばす。

「!?!」

少年は避ける事ができず、鉄柱が直撃する。エネルギーの吸収限界を超え、大量の鉄柱に挟まれ、少年は動けなくなっていた。その鉄柱は数と質量の問題で、少年の力の放出を使ってもどかす事はできない。

「……………何で手加減しやがった？殺す方が簡単だっただろ？」

「お前も、おれがまもるもの学園都市の一部だからな」

「ははははは！そうかそうか。だがな都市伝説うわさばなし、あの爺さんは俺達と違って本気で学園都市を潰す気だぜ。お前に止められ……………あああ……………あああああああああああああああああああ！！！！」

話の途中で突然、少年が苦しみ始めた。体を動かせたのなら自殺でもしかかなさそうな形相で、もがき苦しむ。

「おい！どうした！？」

「ネットワークが……………ネットワークがああああああああああああああ……………あ……………あ……………あ……………」

白羽が呼びかけると、それだけ言って少年は気絶した。そしてその瞬間、少年の頭から何かが飛び出した。

「なっ……………胎児！！？」

そう、確かにそれは胎児の形をしていた。だが、明らかに異様だった。胎児の形をしてはいるのだが、頭上に天使の輪の様なものが浮

かび、本体は時折グネグネと揺らいでいる。
それはA I M拡散力場の集合体で、幻想猛獣A I Mバーストと言つものだと言つ事を、白羽はしらない。

ギイイアアアアアアアアアア！！

A I Mバースト幻想猛獣が絶叫し、その振動だけで近くのビルの窓ガラスが次々と割れていった。

「ツツツ！！」

その振動は白羽の左腕にも響き、収まりかけていた激痛を呼び戻した。

そしてその一瞬の隙に、幻想猛獣《A I Mバースト》は空気中の水分を凍らせて巨大な凶器に変え、それを白羽に放った。

「しまっ！！」

しゃがむ態勢だった白羽は、とつさに交わすことが出来ない。超能レベ力も一瞬もさっきの一瞬だけで今は使えない。

瞬間、白羽は死を覚悟したが、それがやってくることはなかった。
A I Mバースト幻想猛獣が氷の凶器を放った瞬間にそこにスパーポールが飛んでいき、パチンという音の後、爆発した。それによって氷の凶器は粉々に砕け、白羽は無事だったのだ。

「大丈夫だったか？翔」

そして、白羽を救ったのは、白羽の仲間まもりたいものだった。

第四十二話・守るべき都市・守りたい仲間・守らなくちゃいけない約束（後書き）

次回予告

白羽の戦いと同じ頃、上条とFIVEの老人の戦いにもついに決着がついていた。

第四十三話：幻想殺しVS多重能力（前書き）

今回はちょっと短いですね。

第四十三話：幻想殺しVS多重能力

「うおおおおおー！」

上条が爆発的跳躍をし、1歩で拳のリーチの間合いまで詰め寄った。そして、右手でアッパーをくりだす。

対して老人は、能力を使ったのか、見ためからは想像できないような機敏な動きで上条のアッパーを交わし、ガラ空きの脇腹にカウントーを放つ。

「がつ！」

その強烈な威力に、上条の肺の酸素が無理吐き出されて怯んだ。その一瞬に老人は上条の足を払い、上条が宙に浮いた一瞬にブン殴った。上条の体は宙を舞い、さっきまでいた場所にノーバウンドで吹き飛んだ。

「止めておきたまえ。私はたとえ超能力者でも倒せない。君のような一般の学生など論外だ。

それに、私は学園都市を潰すまで止まらない」

「…んで、何でお前は学園都市を潰そうとするんだよ！お前だってこの学者じゃねえのかよ！？」

「はははははははは！そうだがそうではないのだよ、少年。

私は、外の科学者だった。だが学園都市は、このまちは、私が40年の歳月をかけて作った技術を、私よりも何十年もあとに研究し始め、私より先に完成させたのだよ！

君に分かるか！？人生のほとんどを捧げた研究をバカにされたよう

なこの気持ちが！！分からないだろうな！君のような子供には！！」

上条は黙って老人の叫びを聞いていたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「……ああ、分からねえよ。俺には分からない。分かりたくもねえよ！そんなフザけた理由で何人もの人達を傷つけようとするお前の考えなんざ！！」

「黙れ！学生ごときが私の考えを侮辱するなあああ！！！！」

激怒した老人が右手を振るった。それで炎が巻き起こり、上条を襲う。上条は前に飛んでかわし、そのまま老人につっこむ。だが、老人まであと一步の所で、老人が今度は左手を振るった。それで小さな竜巻が起こり、上条を吹き飛ばそうと襲いかかる。

「アンタにとっては憎い都市まちかもしれねえが！この都市まちに救われたヤツだっているんだよ！！そんなことも考えないでこの都市まちを壊そうってんなら」

そこで上条は言葉を区切った。地面を蹴り、上条は跳躍する。竜巻を右手で殴りつけ、真っ直ぐに老人のもとへ飛ぶ。

「まずはその幻想をブチ殺す！！！！」

上条の能力を理解できず困惑し、一瞬見せた老人の隙に上条は拳を振るう。

その拳は老人の顔面にクリーンヒットした。老人は後ろに転がり、キャパシティダウンの制御装置に頭をぶつけて気絶した。

第四十三話：幻想殺しVS多重能力（後書き）

次回予告

白羽達と幻想猛獣^{AEMパースト}の戦いが始まった。そして、別の場所にいる仲間たちの行動が交差し………

第四十四話：決着（前書き）

今回、結構長めです。投稿遅くなつてすみません。

第四十四話：決着

「じゅん！涼！美鈴！佐天！」

関原、前田、桜野、佐天が、白羽の後ろに立つように並んだ。

「待たせたな。」

「俺達も戦うぜ」

「……ああ！頼む！！」

白羽が言うのとほぼ同時に、AIMバースト幻想猛獣が叫び声を上げた。その振動で白羽の左腕の激痛が蘇る。

「ッッ！」

「させると思つか！？」

AIMバースト幻想猛獣が氷の凶器を作りだした瞬間に関原がスーパーボールを投げ、氷の凶器を放つ前に爆破した。

「涼！行くぞ！」

「分かっている。」

前田と関原がAIMバースト幻想猛獣に向かって行った。

まず、前田がクナイを投げつける。そして、それをAIMバースト幻想猛獣が何らかの能力で撃ち落とした瞬間。関原が別の方向から大量のスーパー

ボールを投げつけた。

パチン、と関原が指を鳴らすのと同時にスーパーボールが爆発し、^{AEMバースト}幻想猛獣の体が煙に消えた。

「よっし！」

「やった？。」

だが、2人が喜んだのもつかの間だった。

ギイイイイイアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

「なっ！」

「つく！」

煙の中から無数の触手が伸びてきて、2人を吹き飛ばしたのだ。そして、その触手は今の叫びで怯んだ白羽にも襲いかかる。

「白羽！」

佐天が白羽に抱きついて白羽ごと飛び退き、白羽は触手をかわした。だが、その場所にも触手が迫る。

「翔！」

間一髪、白羽の鎌を取りに行っていた桜野が白羽を守る様に前に出でて、鎌で触手を切り裂いた。

「ありがとう。美鈴ちゃん」

「それは良いけど……早く翔から退いてよ……」

「え！あつゴメン白羽！」

言われて気付いた佐天が白羽から退いた。白羽は立ちあがり、桜野から鎌を受け取った。だがその時、今切り裂いた触手が再生し、佐天を襲った。

「再生！！？」

白羽が触手を切り裂くが、また一瞬で再生し、今度は桜野を襲う。白羽は桜野を左手で佐天を右手で抱え、その場から高速で退いた。そして煙が消え、幻想猛獣ＡＥＭバーストが現れた。だがその姿は、さっきまでのような胎児の原型を留めておらず、巨大なバケモノの姿をしていた。

「…………ヤバイな……」

それと同刻、１７７支部では初春がパソコンを高速で操作していた。

「初春さん！ハッキングのもとは見つけた！？」

「あと少しです！……………あつた！」

初春の操作するパソコンに1つのウィンドウが表示された。固法がその画面を見つめ、初春に尋ねる。

「ハッキング出来そう？」

「……少し、キツイです」

「……っ……」

「私も手伝うわー!!」

突然声が出て、初春達の後ろに御坂と白井が現れた。白井の空間移テレポ動で外から直接入って来たのだ。

「初春。それならどうですか?」

「はい! いけます!!」

初春がキーボードを高速で打ち始め、御坂がパソコンの画面に触った。2人共、意識を集中させてハッキングを開始する。

数分が経っただろうか、初春が突然声を上げた。

「ダメです! ファイアーウォールを展開されてしまいます!」

見ると、初春の操作するパソコンの画面に『FIRE WALL』の文字が表示されていた。

「それってどうなんですの!??」

「完全に展開されたら、中に入るのはかなり難しくなるわ」

「どうすれば止められますの!？」

「あっちの方で展開を中止するしかないけど、間に合わない!！」

画面には『92%』と、残酷な数字が表示されていた。

「なんだ、これ？」

上条が老人を倒し、何とかしてキャパシティダウンを停止させようと装置を操作していた時だった。

突然モニターの真ん中にウィンドウが開き『HACKING』と表示されたのだ。そして、数秒間を開けて『サーバーがハッキングされています。FIRE WALLを展開します』と、音声の案内が入った。さらに、案内が終わると同時に、今度は画面に『0%』と表示されたウィンドウが開き、その数字がかなり早いスピードで増えて行っている。

「これ、どうすんだよ!！」

上条が叫んだ時、ちょうどタイミング良く『中断しますか』と『YES OR NO』の表示がモニターに表示された。

「……………」

上条は無言で、『YES』をクリックした。

「！！ ファイアーウォールの展開、中断されました！ いけます！
」

突然、ファイアーウォールの展開が中断された。初春がキーを高速で叩く。そして、数分経ったところで、今度は御坂が言った。

「音は止めたわ！ 初春さん、ワクチンソフトは見つけた！！？」

「ありました！ このまま学園都市中に流します！！」

キャパシティダウンの機械的な音が途絶え、オルゴールのような音が学園都市中のスピーカーから流れ出した。

「くそっ！ 再生とか反則だろ！！」

白羽が振り下ろされる触手をかわし、後ろに後退する。切っても再生するだけで、体力の浪費になるから、こちらからの攻撃はしない。

「白羽！ 左！！」

「っつと！！」

佐天の声でギリギリ気がついた白羽は、左からの横風ぎをジャンプでかわし、右からの追撃を切って防いだ。

そんな攻防が、もうかれこれ十分は繰り返されていた。

戦うことのできない佐天と桜野は後方から指示を出し、戦える白羽、前田、関原は前方で幻想猛獣AIMバーストと戦っている。

白羽たちが逃げられないのは、幻想猛獣AIMバーストが学園都市の中心部に向かって進もうとするからだ。幻想猛獣AIMバーストが中心部に辿り着けば、どんな被害が出るか分からない。

「ッ！！翔！佐天と桜野の方に1本行つた！！」

「こっちは手が離せない！」

「分かつた！」

白羽が高速移動で佐天たちの方へ行こうとする触手に追いつき、鎌で切り裂く。触手はすぐに再生を始めるが、白羽は触手の進行方向へ回り込み、また切り裂く。このままではイタチごっこだが、白羽には他にどうしようもない。

「白羽！後ろからもう一本」

そうしている内にもう一本の触手が白羽に向かって襲いかかる。白羽はそれを切り裂くが、その隙にも1本が襲う。反対の刃を使ってギリギリで止めるが、さっき切った触手がガラ空きの白羽背中を襲う………わなかつた。

「？」

白羽が切り裂いた触手は、再生していなかったのだ。それに、いつ

の間にキャパシティダウンの音は止み、代わりにオルゴールのような優しい音が流れていた。

「じゅん！涼！こいつもう再生しないぞ！！」

「そうみたいだな！桜野！手伝ってくれ！」

「分かった！」

関原が、ウエストポーチの中から大量のスーパーボールを上に向かって投げ、桜野がそれを能力で幻想猛獣^{A I M パー ス ト}を囲むように設置した。そして、関原が指を鳴らして起爆する。

ババババババン、と爆発が起こり幻想猛獣の体に大量の風穴があった。そして、白羽たちはその中の1つに、三角柱の物体を見つけた。

「翔！たぶんあれをぶっ壊せばアイツはやつつけられる！！行け！」

「おう！」

地面を強く蹴り、白羽が幻想猛獣^{A I M パー ス ト}に向かっ飛んで行く。

だが、飛んでくる白羽を撃ち落とすために、幻想猛獣《A I M パー スト》が触手を振るった。白羽は思わず腕をクロスし、スピードも落とした。

「止まるな、進め！翔！」

前田が触手伝いに登ってきて、白羽を落とそうとしていた触手をクナイで切り裂いた。そして、白羽の靴の裏に自分の靴の裏をつける。白羽は前田の靴の裏を蹴ってさらに飛ぶ。

「これで終わりかア？」

「ええ、そのようですね」

アクセラレータ
一方通行と海原は、学園都市の出入り口の1つにいた。戦いは、
クセラレータ
方通行と海原の一方的な虐殺だった。
周りには血の海が広がっている。

（ですが……鼠を一匹通してしまったようですね）

「アレイスター、あいつは何者だ？」

窓もドアもないビルで、つちみかど もとほる
土御門元春は学園都市統括理事長アレイ
スター・クロウリーと向き合っていた。

「あいつとは？」

「白羽翔だ。今回の事件で、FIVEの構成員を撃退したのは上や
アクセラレータ
ん、一方通行、レールガン
超電磁砲、そして白羽翔だ。
おかしいだろ？こんな面子の中に1人だけただの学生がいるなんて」

「ただの学生ではないよ、ロストレル
失われた能力は」

白羽達が幻想猛獣^{AEMバースト}を倒した時、その場所には白羽達とは別にもう一人、とある少女がいた。

白羽たち超能力者とは違う法則の力を使うもの、魔術師が。

「ずっと会いたかったんだよ、か・け・る・君」

次章予告（前書き）

予告はしてみたものの、まだ本編には入らずちょっと日常編です。

次章予告

学園都市の中に侵入した魔術師の少女、彼女は禁書目録の知識を利用するため禁書目録インデックスを狙う。それを撃退するために戦おうとした上条が見たものは……………

そして、白羽の本当の過去、測定不能ロストレベルの真実が明かされる。都市伝説しゅじゆえんと魔術師の少女の関係は。アレイスターが言った失われし能力ロストレベルとは。

都市伝説しゅじゆえんの過去と魔術が交差するとき、物語は始まる。

次章予告（後書き）

次回予告

睨みあつ白羽と上条、ここは戦場。2人は敵同士、お互いに譲る気はない。はたして、この戦いの行方は。

第四十五話：戦場

「……………ああ、うん、分かった」

白羽が目覚めてまず第一に目に入ったのは真っ白な天井、白羽はこれだけで断言できる。ここはいつもの病院のいつもの病室だと。外を見ると普段通りに学生があふれている。自宅待機命令は解かれたのだらう。それは同時にこの騒動の終わりも告げていた。

「あ、気がついたんだ。おはよう、白羽」

「おはよう、翔」

白羽の目が覚めるのがいつか分かっていたかのような、何ともジャストなタイミングで佐天と桜野は病室に入って来た。

「おはよう、って事は今は朝か」

白羽はそう言いながら体を起こそうとして気付いた。自分の左腕に包帯がグルグル巻きにまかれ、固定されていることに。

他の怪我は大したことはなさそうだが、これだけは完治に時間がかかりそうだ。

「それ、完治まで1週間だって」

「って早いな」

「そこだけポツキリときれいに折れてたから、治りが早いらしいよ。あと、もう退院していい良いつて」

その後、白羽は本当にすぐ退院できた。びっくりするくらい早く。とりあえず携帯の電源を入れ、時刻を確認すると、9時47分。今日は特にすることも無いのでぶらぶらしようかな、と思ったところで気がついた。

(って今日は……………)

ここは戦場、白羽の周りには何十人も敵がいる。そして、その中には上条もいた。だが、2人は敵どうしだ。お互いに譲る気はない。それは生きるため。

ガラガラガラガラと戦場への入り口が開き、戦士達が戦場へと走っていく。

そう、ここは戦場、タイムセールのスーパーだ。

「うおおおおおおお!!」

上条が前の敵を押しつけて最前列に出た。だが、その肩を掴んで引きずり降ろし、白羽が最前列に出た。さらに、白羽は持ち前の運動神経で頭一つ最前列から飛び出し、第一の目標^{ターゲット}、100g65円の豚肉を目指す。

「取ったあああああ!!」

取れるだけ豚肉を取り、次の目標^{ターゲット}に向かって走り出す。ここでも白羽の勢いは衰えることなく、第二の目標^{ターゲット}、卵1パック88円を獲得

した。

そのままの勢いで白羽が第三の目標^{ターゲット}、カップめんどれでも1つ99円を狙うが、ここまでの全力疾走で体力がもうほとんど残っていない、少しペースを落とすとした。

その時だ。白羽を横から何者かが追い抜いたのは。

「はははははははは！上条さんはこの時を待っていたのだよ！」

そう、上条だ。最初、白羽によって大きく出遅れてしまった上条は、序盤をローペースで走り、戦闘集団の体力が減ってくるこの時を待っていたのだ。

上条は大量のカップめんを獲得し、最後の目標^{ターゲット}、一本110円の牛乳に向かって走りだす。

だが、そこで白羽が息を吹き返す。さっきのカップめんを諦める事で体力を回復した白羽が最前線に戻って来たのだ。そして、最後の目標^{ターゲット}に飛び込んだ。

「うおおおおおおおおおお！！！！」

会計を済ませ、スーパーから出てきた白羽と上条は同じことを思っていた。

「買いすぎた……」

第四十五話・戦場（後書き）

次回予告

白羽が自分の部屋で目を覚ますと、手錠を掛けられていた。その理由とは…

第四十六話：監視

「……………これはどういう事なんだ？」

突然だが、白羽が自分の部屋で目を覚ますと、手錠を掛けられていた。

しかも白羽の能力対策として強化プラスチック製だ。そして、その手錠は白羽の右手から、白羽の隣でニコニコしている佐天につながれている。

「どういう事って？」

「いや、俺がお前と手錠でつながれてる理由」

「え〜っと……………昨日、白羽が退院したときに私と美鈴ちゃんが呼ばれてね、白羽はどうせ無茶をするから監禁でもしてくれって言われたの。流石に監禁は可哀そうだから、みんなで白羽を毎日監視しようってことになったってわけ。で、今日は私」

「そうかそうか……………ってそれは俺が手錠付けられてる理由になつてない！」

一瞬納得しかけた白羽だが、それでは手錠を付けられている理由になつていない事に気付き、ツツコンだ。佐天は最初テヘツと舌を出していたが、やがて切なそうに顔をしかめ、呟くように答えた。

「私が言ったって、白羽は止まらないじゃん……………」

「……………ごめん」

「うん、いいよ。さ、前田が朝ごはん作ってるから早く食べよ」
「おう」

白羽と佐天は、白羽の部屋からリビングに出る。すると、ふわっと甘い香りがした。見ると、テーブルの上には紅茶にフレンチトースト、フルーツの盛り合わせ、と貴族、もといお嬢様な食事が用意されていた。もちろんこれを作ったのは前田だ。白羽と前田は、毎日交代で朝食を作っているのだ。

（そっか、そう言えば前田は初春が好きなんだっけ）

それを思い出した佐天は、その料理を褒めて前田を勇気づける事にした。
だが、

（……マズッ！！）

前田の料理は絶妙に不味かった。どうしたらここまで味を殺しきれなのかと思う位マズかった。

だが、前田はそれに気付いていない可能性があるのです、佐天は何とかして褒めた。

「うん！斬新でおいしいよ！」

ちょっと無茶かな、と思った佐天だが

「本当か、佐天！やった。ついに俺はやったぞ！」

前田は叫ぶほど喜んでいた。

そして、その光景を見ていた白羽は理解した。

（そうか、そう言う事か。なるほど、何で佐天は俺の周りにいつもいるのかと思っただけど）

まあそれは、果てしない誤解なのだが。

（涼が好きなのか。涼の料理がおいしいはずないし）

地味に酷いことを言っているが、本当なのでフォローのしようが無い。

「って、俺はどうやって食べばいいんだ？」

そう言えば、白羽は左腕を骨折、右腕を手錠でつながれているため、どうしても自力で食事をとることができないのだ。

白羽のその言葉を聞いた佐天はハツとした表情になった。白羽は手錠を外してくれるのかと思っただが

「はい、あ〜ん」

「はい？」

「だから、口開けて」

「あ、ああ」

白羽はメチャクチャ恥ずかしかったが、しかたなくそうして朝食を食べ終えた。

「で、何する？今日、白羽は風紀委員ジャッジメン休みでしょ？」

「ああ、と言うか左腕が完治するまでずっとただけだな。今日は月末だろ？ちよっ^ッと行くところがあるから一緒に来てくれ」

「うん。分かった」

第四十六話：監視（後書き）

次回予告

白羽と佐天が訪れたのは、白羽が入っていた施設だった。

第四十七話：孤児院

「あ！翔兄ちゃん！」

白羽が佐天とやって来たのは、学園都市の中の孤児院だった。白羽は孤児院に入った瞬間に子供たちに囲まれ、身動きが取れなくなっている。白羽と手錠でつながれている佐天もちろん同じだ。ちなみに、手錠は悪目立ちするので、2人は手を白羽のコートのポケットと一緒に入れている。

「よう、お前達元気してたか？」

「……………うん！……………」

「そうかそうか。よし、先生のところに連れてってくれ」

「……………はい！……………」

大量の園児達に連れて行かれ、白羽と佐天は『園長室』と書かれた部屋に案内された。そして、園児達は「またあとでね」と言っ部屋を出て行った。

その部屋の中では、1人の女性がシステムデスクに座ってあちらを向いていた。

「いらっしやい、かけ……………」

ガシャンと言う音がして、床にティーカップの破片が散らばった。ついでに言つと女性が吹いた紅茶も床に散らばった。

「……何かしら？アンタは、もう40代に突入するのに彼氏すらない私にそんなラブラブな光景見せつけて楽しんでるの？」

「ん？何がですか？」

「だ・か・ら、何で人前で同じコートに手をツツコンでイチヤイチヤしてんの？」

「ち、違います」

園長は額に怒りマークを浮かべ、凄まじい剣幕で白羽を睨んでいる。

「ほ、ほら…」

白羽がコートのポケットから手を出し、手錠を見せた。すると園長は青ざめてこう言った。

「か、翔……アンタ…何したの？」

「何もしてないから…!」

「まあ、そつでしょうね？」

「分かってるなら変なこと言わないでください」

園長は頬笑み、白羽は疲れたように顔をしかめた。この様子を見ると、白羽と園長はいつもこのようなやり取りをしているのが佐天にも分かった。

「でさ、その娘は翔の彼女？」

「違いますよ。お目付役です」

「ふうん」

園長は佐天を図るような目で見て、頬を緩めた。

「そっか。で、今日は何しに来たの？」

「寄付ですよ。寄付。毎月してるでしょ？」

「そうだったっけ？」

「そうです」

はい、と白羽は封筒を園長に渡した。そして、園長は少しだけ中身を確認し、佐天にだけ聞こえるように囁いた。

「（地味に翔は競争率高いから頑張りなよ）」

「（はい）」

「じゃあ翔。チビ達と遊んで行く？」

「いえ、今日はコレなんでちょっと止めときます」

白羽はそう言って申し訳なさそうに手錠を指差した。

「そっか、じゃあデート楽しんできなよ」

「いや、誰もデートしてませんよ」

白羽がそう言っただけで部屋を出ようとする、園長は佐天にだけさっきまでとは違う、暗い語調で囁いた。

「（昔に色々抱えてる子だから、優しくしてあげてね）」

「え？」

佐天が聞こうとする前に、園長はドアを閉めた。佐天は一瞬、戻って詳しく聞こうかと思っただけで止めた。その『色々』は佐天が、白羽から直接話してもらわなくてはいけないものだとおもったからだ。

（白羽……）

佐天は知りたかった。この少年の事を、白羽翔の事を。

第四十七話：孤児院（後書き）

次回予告

白羽の事を知りたいと思った佐天。そして彼女は、ある決意をする。

第四十八話：決意（前書き）

ありがとうございます。皆さまのおかげで、お気に入り登録件数が100件に到達しました。これからもよろしく願います。

第四十八話：決意

「……………うわぁ、可愛い」

佐天は白羽と第七学区の複合ショッピングモール、セブンスミストに来ていた。今はその中の服売り場において、佐天が店頭飾っている服に見とれている。

なぜこうなったのかと言うと、それは孤児院を出た少し後まで遡る。

「白羽、これで用は済んだの？」

孤児院を出て少し歩いたところで、そう佐天は白羽に尋ねた。

「まあ一応な。でも、もう一個行つときたい所がある」

「え？どこ？」

「服屋なんだけど、何だっけ……………名前忘れた」

そう言い白羽は携帯を取り出して誰かに電話を掛けた。プルルルと言っ呼び出し音の後、電話の相手が出た。佐天の方には相手の声が聞こえてこないの誰と話をしているかは分からない。

「突然でゴメン。俺の服をいつも買ってるのってどこだった？……………」

…おう、分かったセブンスミストだな。ありがとう」

「白羽、誰に電話してたの？」

「美鈴だよ。いつも俺の服選んでくれてるのは美鈴なんだ。自分だと全然わからないからな。」

最近何かと血がついたり擦り切れたりして服がダメになってるから、今日は服買おうと思ってるな。美鈴は風紀委員ジャッジメントで急がしいみだし、佐天、俺の服を選んでくれ」

「うん、いいよ」

かくして佐天は白羽とセブンスミストの服売り場に来たのだ。

「ねえねえ白羽、可愛くない？」

「そっ……なのか？」

白羽にはイマイチ分からなかったが、佐天がとてもニコリと笑うので、顔が火照り、いつもの何倍も心臓の音が大きくなった気がした。

「って高！10000円って！」

佐天が値札を見て叫びを上げた。

「俺が買おうか？」

服に書いて白羽は値段を見たことが無いので（全てを本当に桜野に任せていたからだ）、白羽はそんなに高いとは思わなかった。

「え！？いや、そんなの悪いし」

「いって、服を選んでもらおうお礼」

「え……ありがとう」

佐天と白羽はその服を購入し、その後白羽の服を何着か購入した。その中で佐天は決意した。今日、今日中に白羽に告白しよう。自分の気持ちを伝えて、そして、白羽の気持ちを聞こう。

佐天と白羽は、今セブンスミストの屋上のベンチに座っている。日は沈みかけで、周りは薄暗い。周りに人はいなく、告白には悪くないシチュエーションであろう。

「今日はありがとうな」

「ううん、私こそ。こんな高いもの買ってもらって」

「それこそ良いんだよ。俺、この体質の研究費でバカみたいに金は貰ってるから」

「……………」

「……………」

話題も途切れ、佐天は意を決した。言うならば、今しかない。

「しっ、白羽」

「どうした、佐天？」

「私………白羽の事が好き！」

第四十八話：決意（後書き）

次回予告

白羽に思いを伝えた佐天、それに白羽は意外な答えを出す。

第四十九話・返事（前書き）

あと少しで、白羽の本当の過去が明らかになります。

第四十九話：返事

佐天の告白に対して、白羽の返した答えは簡単なものだった。

「おう、俺も好きだぞ」

「え……今、何て言った？」

「いや、俺も佐天が好きだって言ったんだぞ」

佐天は信じられなかった。まさか、白羽も佐天の事が好きだなんて。

「本当！？美鈴ちゃんよりも!？」

「え、うん……同じ位かな？」

「はい？」

今のは確認的な意味だったのだが、まさか『同じ位』と言う答えが返ってくるとは思っていなかった。だが、それによって佐天は気付いた。さっきの『好き』は恋愛感情としての『好き』ではなく、友達としての『好き』だったのだと。

「そういう意味じゃなくて……そう！愛してる！私は白羽を愛してる」

自分で言って自分で照れながら、佐天は言葉を紡ぎ出す。

「だから、白羽の気持ちを知りたい。白羽は、私の事……愛して

る？」

『かけるくん、わたしのこと愛してる？』

その瞬間、白羽の脳裏に眠っていた、眠らせていた、記憶が蘇った。微笑む少女、飛び散る血、宙を舞う右手。そして、その目の前で茫然とする白羽。

「ゴメン…ゴメン僕のせいだ。僕の、僕の……」

白羽はうわごとのように『ゴメン』『僕のせいだ』を繰り返した。

佐天が困惑していると、少しだけ落ち着いたのが、白羽は顔を上げ、泣きそうな顔で言った。

「ゴメン、佐天。俺は……誰も愛せない」

「……そっか、ゴメンね」

佐天は、それだけ言って手錠を外し、何処かへと去っていった。

佐天が去ると白羽はそっと、静かに、泣いた。

「ただいま」

その後しばらくして、白羽は自分達の部屋に帰って来た。

「お帰り翔。ってどうした？目が真っ赤だぞ。」

「あ、ああ、何でもない。今日はちょっと晩飯いらさないから」

「そうか。」

白羽は、そのままふらふらと自分の部屋に入り、そのままベッドに飛び込んで、眠った。

「……………」

その様子を見ていた前田は不振に思った。当たり前だ、几帳面な白羽が風呂にも入らず、着替えすらせずに眠ったのだ。今までにこんなことは1度も無かった。

前田は、携帯電話を取り出して電話を掛ける。相手は『佐天涙子』。数回の着信音の後、佐天が電話に出た。

『もしもし…ッグズ…何、前田？』

「佐天、お前もか。で、何があったんだ？」

『白羽に……………告白して、フラれた』

告白、そのフレーズを聞いた瞬間に前田の表情が険しいものになった。

「佐天、お前まさか……………『愛』って言葉を使わなかったか!？」

『使った……………よ』

「……………そうか、ありがとう。」

前田はそう言っで電話を耳から話そうとした。だが、佐天が突然

『ちよつと待つて！前田！！』

と叫んだので、前田は佐天に聞き返した。

「何だ？。」

『前田は何か知ってるの？』

「ああ、知っている。」

『じゃあ』

「でも。」

前田は、佐天言葉を遮つてこう続けた。

「それは、お前が翔に聞くことだ。」

『……………う、ん』

佐天は、どこか納得できないようだったが、前田はそれで通話を切った。

そして、前田は眠っている白羽を見つめて呟いた。

「大丈夫だぞ、翔。過去ごときで、誰もお前から離れて行ったりしない。」

第四十九話：返事（後書き）

次回予告

白羽に振られた佐天は次の日、177支部の初春を訪れた。そこで、初春は佐天に励ましの言葉を掛け、そして…

第五十話：励まし

「……………白羽」

白羽が佐天と過ごした次の日、佐天は風紀委員ジャッジメント177支部に来ていた。理由は、ここにいれば白羽に会わなくて済むからと、初春に相談ができるからだ。

「1人ごとで何呟いてるんですか、佐天さん？それに相談だなんて、ついに告白でもするんですか？」

佐天が休憩室の椅子に座っていると、紅茶を2杯持って初春が入って来た。

「……………フラれた」

「はい？」

初春は自分の耳を疑って思わず聞き返した。

「白羽に告白して、フラれた」

「……………」

告白の所すらも冗談で言ったのにまさか、すでに告白していて、さらにフラれているという超重大事項を突然言われ、初春の頭は数秒ショートした。

休憩室に初春達しかいなかったのは幸いだらう。

「え〜っと、どうするんですか？」

「諦め……ようかな」

「佐天さん……」

そう言う佐天の顔はとても辛そうで、初春は何も言えなかった。

「白羽を好きでも辛いし……」

「…それは、佐天さんが一番よく分かってるはずですよ」

「え？」

「白羽君の事をどう思つかは、佐天さんが一番よく分かってます」

「初春……うん、ありがとう！」

佐天は休憩室を飛び出した。そして、そのまま白羽の部屋まで走る。全力で佐天は走った。走りながら、白羽を諦める事を考えていると涙が溢れてきた。

「はぁ…はぁはぁ…」

佐天は白羽達の部屋のドアの前で一回呼吸を整え、ドアノブを回した。幸いカギはかかって無く、扉はすんなりと開いた。

「白羽！」

「……佐天」

佐天が部屋に入ると、部屋には白羽1人で昼食をとっていた。だが、泣きやみこそしたものの目尻に涙を溜めた佐天を見て、完全に思考がショートしたようだった。

「白羽、突然でゴメン。でも私は、やっぱり白羽が好き！白羽が私を好きになってくれなくても、好きなの！！」

佐天はそこで堪えきれずに泣きだした。ポロポロと、涙をこぼしながら佐天は続ける。

「白羽を好きでいるのも辛いけど、好きじゃなくなるのは……もっと……辛いの！！……ッ……白羽あ」

佐天は泣き崩れて白羽に飛び込んできた。白羽は、驚きながらも佐天を受け止め、抱きしめた。そして、こうとだけささやいた。

「ありがとう」

「ねえ、白羽。聞いても良い？」

「……何を？」

しばらくして、佐天が泣きやんだ少し後。佐天は、白羽に尋ねた。

「白羽の過去に、何があったのか」

「ああ。でも、これだけは約束してほしい」

「何？」

「俺から、離れて行かないでくれ」

佐天は「うん」と、頷いた。

「俺は昔、超能力者レベル5だったんだ」

第五十話：励まし（後書き）

次回予告

ついに白羽が、自分の本当の過去を語る。その驚きの過去とは……

第五十一話：本当の過去（前書き）

今回、白羽の本当の過去がついに明かされます。

第五十一話：本当の過去

「超能力者^{レベル5}って…どういうこと？」

「佐天は、俺が捨て子の置き去りだって知ってるだろ？」

「うん…」

「あれな、嘘だ」

「え!？」

佐天は思わず目を見張った。自分が聞かされた白羽の過去が嘘だと言われたのだ当然だろう。

「嘘、っていつか…書類上はってとこだな。昔…って言っても俺が3、4歳のころの話だ…」

そのころ、俺にはちゃんと両親がいて、あること以外、普通の生活を送っていた。そのあることって言うのが、俺が生まれつきの能力者『原石』しかも、学園都市では超能力者^{レベル5}に認定されるような能力だった事だ。

両親は「たとえ翔が超能力者でも関係ない」と、俺を大事に育ててくれた。でも、そんな温かい日々は…ある日、突然に消え失せた。

何が起こったと思う？

簡単だよ。両親が殺された。俺の目の前で、だ。しかもその理由が、

俺のせいなんだ。日本政府がさ、学園都市を快く思っていないのは知ってるだろ？だから、俺を研究して超能力者の仕組みを調べようとしたらしい。

俺は何もできずにただ茫然と突っ立ってたよ。それが原因かは分からないけど、俺は能力を失った。それでも俺に価値があると思つた研究者達は、俺を同じ位の歳の子供たちと施設で育て始めたんだ。そして、数ヶ月経つて研究者達は気付いたんだ。俺の感情が高ぶつた時、俺の能力が戻る事に。しかも、その感情が強ければ強いほど能力が良く戻ることまでな。

さらに悪い事に、その頃俺はある女の子に恋をしてたんだ。それに気付いた研究者は、俺とその子を部屋に呼び出して……その子の右腕を切り落とした。

今でも覚えてる。あの絶叫、飛び散る血、宙を舞う右腕。でも、その日のうちに、学園都市がその施設に調査に来て、俺達を救ってくれた。でも、その子だけは、見つからなかった。

これが、俺の昔話だ」

佐天は、話の途中で時々驚きながらも黙って白羽の話聞いていた。そして、白羽が話し終わると同時に言った。

「確かに、白羽の過去には驚いたよ。でも、私はそんな事じゃ白羽の事を嫌いになつたりしないし、白羽から離れて行つたりもしないよ」

「佐天……ありがとう」

白羽は緊張の糸が切れたのかボロボロと泣き崩れ、佐天に抱きついた。佐天は黙って、白羽が泣きやむまでずっと白羽を抱きしめていた。

白羽が泣きやんだ後も佐天は暫らく白羽の部屋にいたが、暗くなってきたので自分の部屋に帰える事になった。

「送るよ」

「うん」

白羽と佐天は白羽の部屋を出発し、無言のまま佐天と桜野の部屋に着いた。

「じゃあ、また明日学校で」

「うん、また明日学校で」

だが、2人は知るよしもなかった。その後、白羽は大きな陰謀に巻き込まれることを。

第五十一話：本当の過去（後書き）

次回予告

佐天と分かり合った白羽、佐天の部屋からの帰り道に白羽はありえない少女と出会う。

第五十二話：禁書目録 誘拐

「あゝ何か買つてくか」

佐天の部屋からの帰り、白羽は小腹が空いたので近くのコンビニに立ち寄る事にした。適当なコンビニを見つけて中に入る。すると、見知った顔がいた。

「よう、美鈴」

「え！あつ！かけつ……白羽君！」

桜野はテンパつて、外なのに白羽を名前で呼びかけたうえに、手に持っていた商品をポトポトと落とした。桜野は慌てて拾って隠そうとするが、白羽が手伝おうと拾ってしまつて無駄に終わった。

「『絶品！パティシエが認めたビッグシュークリーム』…か」

「ち、違つんだよ。いつも食べてるんじゃないくて、今日はたまたまで」

「はは、美味しそうだな」

白羽の反応に、桜野は数秒キョトンとしていたが、ハツとして白羽の意見に同意した。

「うん。おいしいの、これ」

「なら、俺も買つてくよ」

「うん」

白羽は同じものを商品棚から取り、桜野と一緒に購入した。コンビニをで、白羽と桜野は別れる。

「じゃあな、また明日」

「うん、また明日」

白羽は桜野と別れ、帰路に戻った。辺りが暗くなって来たので、少し早足めに歩く。

「かける君」

「誰？」

裏道へのわき道で誰かに声を掛けられたが、白羽は通り過ぎてしまった。くるつと回れ右をして、そこに戻る。そして、そこでそれを見た瞬間、白羽の脳裏に過去の光景がよみがえった。絶叫、飛び散る血、宙を舞う右腕。そして、それを茫然と見つめる自分。

「あ……あああ……」

「ずっと会いたかったんだよ、か・け・る・君」

「ゆ……み……ちゃん」

それは、白羽の初恋の少女。学園都市が搜索しても見つからなかつ

た少女。今まで、死んでいたと思われた少女。その少女は、昔とほとんど変わらないままだった。変わったのは、伸びた身長、髪型、そして、無くなった右腕。

その日の夜。学生がもうとくに寝静まったような深夜。上条の部屋のベランダに2人の少年と少女がいた。少年は学園都市のカリキユラムによって生み出される力、超能力を使う者、超能力者。少女は、超能力者とは違う法則の力、魔術を使う者。魔術師。

少女は左手に持った三角形の札を窓に貼り、その全ての頂点に左手でクナイを刺した。そして、呪文を唱える。すると、窓ガラスに大きな穴が開いた。少女はその穴から上条の家に入っていく。その後少年も続いた。

2人は入ってすぐの所のベッドに眠っている少女、インデックスを見つけると、少女がもっていた拘束具で拘束しようとした。だが、インデックスは途中で目を覚まし、助けを求め抵抗する。

「とうま！助けて！」

「インデックス！」

インデックスの叫びを聞き、すぐさま目を覚ました上条はリビングに飛び込んだ。すぐに明りを付け、敵を見た上条は絶句した。

2人の少年と少女の内、少女の方は知らなかったが、少年の方は上条の知り合いだった。さらに驚いたのは、その少年が、白羽が、泣きながら上条に謝ったことだ。

「上条さん……すいま、せん」

「白羽……」

上条が驚いている間に、少女はインデックスを拘束し終えた。そして、白羽を連れてベランダから落ちて行った。

上条がベランダからのぞいたが、その時にはもう白羽も少女も見えなくなっていた。

第五十二話：禁書目録 誘拐（後書き）

次回予告

インデックスの誘拐。白羽の失踪。それぞれを追って上条達と佐天達が交差する。

第五十三話：交差する狙い

「何！本当か！？上やん」

「あ、ああ。あれは白羽（はくは）だった」

インデックスがさらわれてすぐ、上条は隣人の土御門を起こして自室に連れてきた。そして、事情を話したのだ。

すぐに土御門はベランダに開いた穴などを調べ、それが魔術師による犯行だと言う事を突き止めた。そんなことをしなくても、インデックスをさらうのは禁書目録の知識を求める魔術師であることは予測できたが、念のためだ。

「何で、一般生徒が魔術師と……」

「それと、アイツ…泣いてた」

「………となると『魔術師が上やんの知り合いを魔術で操っていた』と言う線はなくなるな」

でも、と土御門は続けた。

「泣いてってことは、ソイツの望んだことじゃないんだろう。なら、まだ説得の余地くらいはあるな」

「…ああ」

「とりあえず、術式からどこの魔術師かを探ってみる。今日はもう遅いから上やんは休んでいてくれ」

その次の日、ジャケットメント風紀委員177支部には佐天と桜野、前田、関原、が集まっていた。

「ああ、昨日から帰ってない。」

「翔だからな、普段なら連絡をするだろうけど……考えられるのはやっぱり」

「……また何かに巻き込まれた」「……」

はあ、と全員がタメ息を漏らした。

「それと、道端にこんな物落ちてたよ」

桜野が、コンビニの袋を差し出した。その中には、昨日白羽が桜野の目の前で買ったシュークリームが入っている。

「シュークリーム？」

「昨日、白羽君が買ったヤツと同じで、そこから白羽君の部屋までの帰り道の途中に落ちてた」

「ってことは、白羽は帰り道で何かに巻き込まれたってこと？」

「そうなるな。」

「現在地は分かるか？」

「あつ、携帯のGPSか」

「そう言う事だ」

桜野が携帯を取り出し、白羽の現在地をチェックする。すると、驚きの情報が表示された。

「え？…何で、何で……外にいるの？」

白羽の現在地は、学園都市の外になっていた。

「外って、学園都市の外！？」

「う、うん」

「……今回は、マズいかもな。」

「とりあえず、ボーっとしてても仕方ないし、出入り口に行ってみるか？」

「で、どうするんだ？土御門。組織は分かったけど、どこにインデックスが連れていかれてるかは分からないんだろ？」

上条は土御門に連れられて、学園都市の出入り口に向かっていった。

「なあに、簡単だ。しらみつぶしに探す。それしかないですよ」

「…そう、か。ああ、せめて一緒にいた白羽の場所でも分かれば」

「分かります」

「「え!?!」」

突然、背後から会話に加わって来た声の方に、上条と土御門は顔を向ける。すると、そこには佐天、桜野、前田、関原がじつと上条達を見つめていた。

「私達には白羽の場所が分かります」

「ほ、ほんとか!教えてくれ!白羽の居場所を!」

上条が佐天に頼むが、佐天の前に前田が出てこう言った。

「タダでは無理だ。」

「成程。交渉ってことか」

上条は交渉に向いていないとすぐさま判断した土御門は、上条の前に出て代わりに話を始めた。

「あんたらは、翔が何に巻き込まれているのかを知ってるんだろ?」

「ああ、だが俺達はそいつがどこにいるかを知らない」

2人は面と向かい合い、同時に微笑んだ。

「共同戦線でどうだ？」。

第五十三話・交差する狙い（後書き）

次回予告

白羽の元へと向かう仲間達。その時白羽は…

第五十四話：最悪の再開

「信じられないがその、魔術師が翔を連れて行ったんだな。」

「ああ、恐らくな」

佐天達は、土御門に魔術についてや白羽がインデックスを襲ったことを聞いていた。

「じゃあ、その白羽のいる所まで連れて行ってもらおうかじゃ」

「ああ、だがどうする？外に出るための手段はあるのか？。」

「ああ、安心しろ。今、その出入り口に警備員はない」

「？。」

土御門に連れられて上条達がゲートに着くと、本当に警備員がいなかった。上条や前田が聞いたが

「まあいいだろ？出れんだから」

と言う関原の発言により、上条も前田も気が抜けてこれ以上聞く気になれなかった。

「私をどうする気なの？かける。と言うか、何で学園都市の一般生徒が魔術師と一緒に私をさらったの？」

インデックスは、白羽に由美と呼ばれていた少女の所属している魔術結社所有の教会の一室に軟禁されていた。その部屋には、白羽と由美もいる。

「……魔術師」

白羽は由美から、魔術や、魔術サイドと科学サイドの関係など、魔術に関する基本的知識を聞かされていた。だから、ある程度の知識はある。インデックスが、魔道書図書館や、魔人と呼ばれる者だと言う事も知っている。

だが、それは突然言われて納得できるような事ではなかった。さらに、昔に自分のせいで死んだとおもっていた由美が生きていて、魔術師になったと言う事も同時に知らされ、気が動転していた。

ちなみに、白羽も部屋に軟禁されているのだが、由美が白羽に寄り添うように眠っているので動けないでいる。

「か〜け〜る〜何で魔術師と一緒にいるのか聞いているんだよ？」

「理由……」

何もすることのない白羽は、昨日の、由美との再会を思い出していた。

「ずっと会いたかったんだよ、か・け・る・君」

「ゆ……み……ちゃん」

自分のせいで死んだと白羽が自分を責め続けた少女、かの香乃由美は、突然に、唐突に白羽の目の前に現れた。

「う……そ」

白羽は驚きとショックで、固まっていた。そんな白羽に香乃は近づき、左手で、そつと白羽の頬をなでた。

「嘘じゃないよ。私は生きて、かける君を連れて行きに来たの」

「ど、どこ？」

「私を助けてくれた所だよ。でも、その前にちょっと、することがあるの。手伝ってくれる？」

白羽は、首を横に振ることができなかった。

そして、今に至るのだ。

「かける……！」

「わっ！何！？」

インデックスに耳元で叫ばれ、白羽は初めてインデックスが自分を呼んでいた事に気付いた。

「だから、何でかけるは魔術師と一緒にいるのかって聞いているんだよ」

「……………俺は由美ちゃんと、一緒にいてあげなくちゃいけないから」

「…分かった」

言葉の中に何かを感じたインデックスは、それ以上何も気かなかった。

第五十四話・最悪の再開（後書き）

次回予告

インデックスが別の部屋に連れて行かれた時。香乃が白羽にあることを話す。その驚愕の内容とは。

第五十五話：誘い

「禁書目録、来てもらおうか」

どれくらい時間が経ったか。1人の魔術師がインデックスを連れて行った。何をするかは、白羽にも分かった。魔術を使ってインデックスの頭の中にある知識を取り出すのだ。

「かける君。お話、しようよ」

インデックスが連れて行かれた途端に香乃は目を開き、そのままの白羽に寄り添うような体勢で白羽に話しかけた。

「じゃあ…由美ちゃんは俺の事…恨んでる？」

「かける君は、おバカなの？恨んでたらこんなことしてないよ」

香乃は、そう言ってさらに白羽に身を寄せる。

「私はかける君を助けるために、学園都市から連れ出したんだよ」

「助ける…それって、どういう事？」

「学園都市は壊されるんだよ」

白羽は一瞬、自分の耳を疑った。香乃があまりにも無邪気に、自然に、笑いながら言ったからだ。

「何で!？」

「私は知らないけど…中宮さんが言うから」

「中宮さんって？」

「こここのリーダーの人。私を助けてくれたの。中宮さんが、学園都市から禁書目録を連れて行くときにかける君だけは連れて来ても良いっていつてくれたんだよ」

香乃は、本当にその中宮を信用しているようで、疑う様子は微塵もなかった。

「会わせてくれる？その中宮さんに」

だから白羽は、その中宮と話し合いをしようと思った。本当に香乃の言うような良い人なら、学園都市を壊そうとするのを止めてもらえるかもしれない。

「うん、いいよ」

暫らくすると、インデックスが部屋に戻され、その時に香乃が魔術師に白羽を中宮に合わせるように言った。その後、数分するとその魔術師が部屋に戻ってきて、白羽と香乃を中宮の部屋に連れて行った。部屋はかなりの広さがあり、一番偉い人のいる部屋と言う雰囲気漂っていた。

「よう、お前が白羽翔か」

見当違いだ」

「？」

その状態のまま、中宮は話し始めた。その内容に白羽が眉をひそめる。

「考えなかったか？何故、あの日に学園都市はちょうどお前を救いに来たのか。簡単だ。あの日は俺達がお前を知り、救おうとした日だからだ。学園都市はとっくにお前を知り、その上で放置していた。そしてあの日、俺達がお前を救いに行こうとする事を知り、先手を打ったんだ」

もしかしたら、学園都市はあの日より先に自分の事を知っていたのではないか。それは、白羽も考えたことがあった。でも、偶然だと思っていた。だが、中宮の話が本当だとするとその考えは正解なのかもしれない。そんな考えが白羽の頭をよぎった。

「どうだ、白羽翔。魔術^{マジック}サイドへ来ないか？」

第五十五話：誘い（後書き）

次回予告

超能力者は魔術を使えない。そのルールを理解しつつも白羽を勧誘した中宮、その真意は……

第五十六話：返事

「それはどういう意味だ？」

「もちろん言葉通り、魔術師になって俺達の結社に入らないか。と言う意味だ」

「待って、中宮さん。超能力者には魔術は使えないんじゃないんですか？」

超能力者はカリキュラムにより普通の人間と脳の構造が違っていているので、普通の人間が使う魔術は使えない。それは魔術の常識で、白羽もさつき教えられたことだった。

「大丈夫だ。白羽翔は特別な存在だからな」

「良い誘いみたいだな……でも、俺は断わる」

「……残念だ。だがお前は、学園都市を崩壊させるのに必要不可欠な存在だからな。少し、手荒な事をさせてもらおう」

パチン、と中宮が指を鳴らすと部屋唯一の出入り口から数十名の魔術師が現れ、すぐさま白羽を囲んだ。

「捕まえる」

「……」

多勢に無勢で、白羽はほとんど抵抗も出来ずに気絶させられ、捕ま

った。

「う、うう」

白羽が目を覚ますと、そこは狭い部屋だった。白羽は正座の状態で縛られ、その白羽を中心に同心円状に何かの文字が床に描かれている。そして、白羽の前には香乃がいた。

「起きたんだ。ゴメンね乱暴なことして。後、今からも卑怯な事するの。……でもね、かける君。私は、かける君の敵になりたくなくて、かける君と一緒にいたいだけなんだよ」

香乃は、それを言い終わるとクナイを陣の端に刺し、呪文を唱えた。その時香乃は、少し泣いていた。

「ここか」

上条達が白羽の携帯のGPSデータを頼りに着いたのは、学園都市から少し離れた場所にある教会だった。

まず、プロの土御門が扉を開き、突入する。だが、教会の中には誰もいなかった。見たところ、教会には部屋が1つしかないの、ここ以外には考えられないのだが。

「どついう事？」

「……隠し扉とか？」

関原は上段のつもりで言ったが、それに土御門は

「あり得るな」

と言った。全員が驚いて土御門を見たが、土御門は大真面目の様だ。

「よし、前田。GPSではその白羽はどの方向にいる？」

「あ、ああ。こっちだ」

土御門に言われ、前田が教会の一番奥を指差した。土御門はそこに行き、壁を探り始める。そして、暫らくすると探るのを止め、上条達の方を見た。

「あつたぜい」

「……マジ？」

土御門が壁を押すと、ズズズと言う音と共に壁が退き、地下へと続く階段が現れた。

上条達はトラップを警戒し、先頭に上条、次に大能力者の関原、佐天、桜野、前田、と来て、後ろに土御門の順番で進んだ。

階段を下り終えると、大きな広間に出た。いや、『大きな』と言うよりは『巨大な』と言った方が良いのかもしれない。それ程に広大な広間だった。物が何も置いていなく、どこか寂しい雰囲気醸し出している。

「いらっしやい」

その部屋のちょうど真ん中に、香乃は立っていた。

「お前……」

「上やん。コイツが白羽翔と共に禁書目録を連れ去ったって言う魔術師か？」

「ああ」

それなら、と土御門が何かを言おうとする。が、それを遮る様に桜野が叫んだ。

「アンタが翔おおお!!」

そして、同時に能力を使いパチンコ玉を飛ばす。それに対して香乃は避けようとせず、その場に突っ立っていた。

「え!?!」

だが、桜野の放ったパチンコ玉は香乃に当たらなかった。

「何……で……」

そう、上条達の前に立ちふさがったのは

「翔!」

白羽だった。

第五十六話・返事（後書き）

次回予告

上条達の前に立ちはだかった白羽。その理由は。そして、上条達は
どう戦うのか……………

第五十七話：VS都市伝説

「白羽！」

「……………」

佐天が呼びかけるが、白羽は全く反応を見せない。と、言うよりも佐天の声が届いていないようだった。目はうつろで、左腕の包帯も取れ、普通に動かしている。

「上やん、あれが白羽翔か？」

「あ、ああ。……でもなんか様子がおかしい」

「恐らく、洗脳の魔術を掛けられてるんだろ。上やんの右手でもとに戻してくれ。俺は魔術師を叩く」

「分かった」

「お前達も聞いたな。今、白羽翔は正気じゃない。敵だ。攻撃をするとは言わないが取り押さえるくらいはしてもらわないと困る」

「ああ、分かっている。」

前田が懐からクナイを取り出し答え、ただ、と続けた。

「翔は傷つけさせない。」

「分かった。よし、行くぞ！！」

土御門が飛び出し、白羽達に突っ込んだ。ほぼ同時に白羽も飛び出す。

白羽は、コートから鉄塊を取り出してトンファーに変形させた。土御門は、白羽と衝突する寸前にバックステップをして、白羽のトンファーでのパンチをかわし、白羽の横を通って香乃に向かって走った。

「翔！」

白羽が土御門を追おうとするが、それを防ぐために前田がクナイで襲いかかる。白羽は右のトンファーで防ぎ、そのままクナイをトンファーの中に取り込んだ。

前田が追撃を避けるために後ろに飛び、同時に関原が数十個のスーパーボールを白羽と前田の間に投げた。白羽が下がって避けようとするが、桜野の能力によってスーパーボールは白羽の頭上を越えて行った。

「土御門さん！避けてくださいよ！」

そのスーパーボール達はそのまま香乃へと向かう。土御門は関原に呼び掛けられて交わしたが、香乃は不意を突かれ、動けない。白羽もこの距離では間に合わないだろう。

「翔を返せえええ！」

桜野が叫び、関原がパチンと指を鳴らした。爆音が轟き、土煙が舞う。

だが、次の瞬間土煙が吹き飛び、白い球体が現れた。その白い球体はだんだんと開いていき、1対の翼になった。

だが、それよりも衝撃なのは、その羽が白羽の背中から生えていることだ。

白羽の能力は測定不能ロストレベルの金属変形メタルテイフォーム。つまり、この羽は白羽の能力ではない。すると、必然的にあり得ない答えがでる。羽は、白羽が魔術を使って生み出したものだ、と言う。

「土御門！何で超能力者の白羽が魔術を使えてるんだ！？」

「…………ツ…俺にも分からない！」

上条が聞くが、土御門でさえも分からなかった。

（超能力者は魔術を使えない…………その理由は…）

佐天は、考えた。無能力者レベル0である佐天は戦いに参加はできないが、考える事なら出来る。

（そう、カリキュラムのせいで脳の構造が違うから……………そうか！）

「白羽はカリキュラムを受けていないんだ！」

佐天が言うと、上条達が一斉に振り向いた。

「どついう事だ？」

「白羽は測定不能ロストレベルだから、カリキュラムは無駄だって事で受けてないんです！」

そうか、と土御門は頷いた。他も同様に納得したようだ。

「……かける君。やっつけて」

香乃がそう言うと、白羽は羽を振るった。凄まじい衝撃波が発生し、土御門を襲う。

「!」

土御門は間一髪のタイミングでかわす。だが、すぐに白羽が第2波を飛ばし、それが直撃する。その勢いで壁に叩きつけられ、土御門は気絶した。

桜野と前田、関原がその隙に白羽の背後にまわり、白羽ではなく香乃に殴りかかった。だが、白羽が間に割り込み、香乃を連れて後退した。

「うおおおお!!」

白羽の方へと走っていた上条は、後ろ向きに後退してくる白羽の羽に右手の拳を繰り出す。

上条の拳は、白羽の羽を消滅させた。だがそれは、拳の振れた範囲だけだった。よく見ると、白羽の羽は大量の小さな羽が固まってできていた。

(1つ1つ、別なのかよ!)

上条はすぐに左手で右手を引き抜き、横に転がった。無理矢理ひっぱったせいで、肘のあたりに激痛が走る。白羽は、ストーンと地面に着地し、香乃を下ろした。

「かける君。片付けて」

香乃が言うが、何故か白羽は動かない。

「？」

(……何で……)

佐天は再び考える。今度は白羽が動かない理由を。

違和感を感じていた。何かがおかしい。では、その何かは何なのか。考える。考える。考える。

(そうか)

佐天は違和感の正体に気付いた。

同時に、この戦いを終わらせる方法にも。ならば、後は行動するだけだ。自分の出来る事を、するだけだ。

「白羽ああああああアア!!」

佐天は、白羽に向かって全力で走りだした。

第五十七話：VS都市伝説（後書き）

次回予告

叫びながら白羽に向かっていく佐天。彼女の考え付いた方法とは…

第五十八話：方法

佐天の叫びを聞き、白羽が佐天の方に振り返った。その瞬間、佐天が飛んだ。完全に体を浮かせ、白羽に飛び付いた。だが、白羽は、その場から1歩横にずれれば良い。そうするだけで佐天は体を打って勝手に怪我をするだろう。佐天は敵なのだから、白羽はそれで良いのだ。

だが、白羽は動かなかった。

「かける君!？」

白羽は、佐天を受け止めて押し倒された。

そう、佐天が気付いた違和感とは「何故、土御門以外にしか攻撃をしないのか」だ。羽の衝撃波を使って土御門を一瞬で倒したのだ。他にも同じように倒せばよかった。それに、桜野と前田、関原が香乃に殴りかかったとき、羽を使って吹き飛ばす事もできた。だが、白羽はそれをしなかった。

ならば、それは何故か。簡単だ。白羽は「土御門にしか攻撃をしない」のではなく「仲間に攻撃ができない」のだ。それが分かった佐天は、白羽を信じて飛び込んだのだ。

「邪魔なんて、させない!!」

硬直している白羽の代わりに、香乃が佐天を白羽から退かそうと佐天に掴みかかるが、桜野がタックルで香乃を突き飛ばし防ぐ。そして、上条が走る。一瞬で白羽との距離を縮める跳躍で、上条は白羽に突っ込んだ。

「うおおおおお!!」

上条の右手が白羽の頭を掴むと、同時に白羽の羽も消えた。

「止めて!」

「アンタが……アンタが……」

香乃を突き飛ばした桜野は、香乃の上に馬乗りになり香乃を押さえつける。香乃は抵抗するが、左手だけでは上手く抵抗できず、取り押さえられる。

桜野は左手で香乃の左手を押さえつけ、右手を振り上げた。桜野が右手を振り下ろし、香乃を殴ろうとする。香乃は目を瞑り、痛みに堪えようとした。

「キヤッ!」

だが、その手は振り下ろされなかった。

「翔……」

白羽が、桜野の腕を掴んで、止めたのだ。

「美鈴、由美ちゃんは悪くないんだ。止めてくれ、頼む」

「……うん、ゴメン」

桜野は、香乃の上から退き、白羽に謝った。その時香乃が今の状況を理解して怯え出す。

「……嫌、いや、止めて、かける君は……私といて」

体を起こし、香乃は後ずさりをする。その顔はとても怯えていた。白羽は、その香乃へゆっくりと近づいていく。

「由美ちゃん。俺は、由美ちゃんの味方だよ」

「かける…君……うあ、ああああ!!」

香乃はそのまま、泣きだした。そして少し経って香乃は泣きやみ、言った。

「……かける君、私…かける君の仲間になりたい」

「もう、仲間だよ」

「……ありがとう」

第五十八話：方法（後書き）

次回予告

魔術も解け、上条達と行動を共にする白羽。だが、香乃から知らされたのは衝撃的な制限時間リミットだった。

第五十九話：制限時間へリミット

白羽達は、土御門を部屋の隅に寝かせ、奥へと進む。

香乃が先頭で案内役をしてその次に白羽。香乃が白羽以外に苦手意識を持っているので、香乃が希望したのだ。そして、その後ろに上条、佐天、桜野、前田、関原の順に並んだ。

「上条……さんでしたか？」

「あ、うん。そうだけど」

香乃が、唐突に上条に話しかけた。

「禁書目録の事、ごめんなさい」

「上条さん。俺もすいません」

「許す。とは言わねえけど、そう思ってるんなら一緒にインデックスを助けるのを手伝ってくれ」

「はい」

その後、少し通路を歩いていった所で、香乃が今度は白羽に話しかける。

「ねえ、かける君。今何時？」

「ん？え〜っと、11時24分だけど」

「じゃあ、そろそろ急いだ方がいいと思うよ？」

白羽の何故、と言う声を遮る様に香乃は答えた。超重要事項を。

「学園都市の崩壊は、12時丁度に始まるよ」

「……………はい？」

「だから、学園都市の地盤沈下は午後12時丁度に始まるよ」

「ええ！学園都市を崩壊させる魔術ってそんな簡単にできるの！？」
インデックスを連れてきてから、まだ1日も経っていない。さらに、インデックスを連れて行って何かをしたのは朝だ。それからはまだ4時間も経っていない。

「ううん。普通はできないと思うけど……………かける君を操ってかける君にさせたの。かける君は特別だから出来たって」

(……………魔術が使える超能力者ってそんな特別なのか)

「で、それはどうやったら止められるんだ？」

白羽と香乃の話聞いていた上条が、最重要事項を香乃に尋ねた。
香乃は、さっと白羽の後ろに隠れ、ぼそぼそと答えた。

「陣の中に入って適当に魔法陣を乱せば発動しない。後、陣術者の中にかける君しか入れない」

香乃の説明に、全員が白羽を見た。とりあえず、白羽をその魔法陣

の所に連れて行く。それが今の最優先事項だろう。上条の幻想殺しイマジンブレイカーでも良いのだが、この場にいるメンバーは幻想殺しの事を知らなかった。

「止まって」

丁度その時、先頭の香乃が1つのドアの前にたどり着いた。ドアノブに手を掛け、一気に開きながら中に突入する。他も後に続いて突入した。

「……………!!」「……………」

だが、中には8人の魔術師が待ち構えていた。それぞれが、ナイフや剣など、物騒な武器を携えてる。

「……………足止め」

白羽が忌々しげに呟いた。魔術師たちは、じりじりと白羽達に詰め寄ってくる。

「（翔。）」

前田敵に聞こえないように小声の、腹話術で話しかける。白羽はそれを理解しているので下手に答えて敵に感づかせてしまうようなことはせず、声を出しそうになった香乃の口を塞いだ。ちなみに上条の口は関原が塞いだ。

「（俺とじゅんとで道を開ける。その道を通って切っけ。）」

こくり、と白羽は頷いた。

「（いくぞ、じゅん。）」

関原がまずスーパーボールを魔術師たちの頭上に放り投げ、起爆させた。だが、それは魔術達の気を引き、怯ませ、目くらましをすることが目的。魔術師たちが隙を見せた一瞬に、前田が本当の攻撃を仕掛けた。

一瞬で1人の魔術師の目の前に跳躍し、その魔術師の頭を鷲掴みにして、そのままその魔術師を投げ飛ばした。他の魔術師たちに。

「なっ！」

投げ飛ばされた魔術師は1人の魔術師を巻き込んで壁に衝突し、気絶した。

「行け！翔！」

「無茶すんなよ！」

「ああ！」

白羽達は、前田と関原が開けた道を通り切った。全員で戦えば確実に勝てるだろうが、今は時間が惜しい。

白羽達は突き進む、一刻も早く、学園都市を救うため。

第五十九話・制限時間へリミット（後書き）

次回予告

仲間たちに後ろを任せ、前に進む白羽その前に再び魔術師が現れる。

第六十話：NO2

「……………またいる」

香乃が曲がり角の所で向こう側を睨んでいた。その視線の向こうには、2人の魔術師が小さめの部屋で待ち構えていた。徹底的に足止めをする気の様だ。

「2人。……………ゆみちゃん、アイツらを合わせて残り何人いる？」

「4人。あの人達と、中宮さん、もう1人はあの部屋に出入りしていた鎌田かまたさんって人だよ」

「なら、あの2人を……………全員で倒そう。時間は……………あと27分」

白羽が鉄塊を2つ、コートから取り出して、トンファーと金属バットに変形させた。そして、勿論トンファーは自分で持ち、金属バットは佐天に手渡した。

「もしも……………もしもの時に、自分を守るためにな」

「うん」

その後、桜野のパチンコ玉の補充をし、準備は整った。

「うおおおおお！」

白羽がわざと大声を出しながら飛び出し、魔術師が怯んだ隙に攻撃をしようとしたが、敵はある程度それを予測していたのか全く怯ま

なかった。

白羽はトンファーで片方の魔術師を殴りつけるが、魔術師の持っていた槍に防がれ、その背中にもう1片方の魔術師が4角形の魔方陣を貼り付けようとする。だが、魔方陣は白羽に貼り付けられる寸前に桜野の放ったパチンコ玉によって、魔術師の手から落とされた。その隙を見逃さず上条が魔術師に接近し、顔面を殴りつける。そして、怯んだ隙を無駄にせずたこ殴りにする。

「美鈴！」

白羽が呼ぶと、桜野が大量のパチンコ玉を白羽と退治しているほうの魔術師の目に向かって放った。魔術師はバックステップをしながらそれを弾き、また白羽の方に向かって行くスピードを利用して下から槍を突き刺そうとする。だが、魔術師は仰向けに倒れた。白羽が足を払ったわけではない。自爆だ。そう、魔術師自身が弾いた、桜野のパチンコ玉だ。白羽は、その無防備な鳩尾にトンファーでの一撃を決め、魔術師を気絶させた。その時には上条も相手を気絶させていた。

「かける君、大丈夫!？」

「うん」

香乃が白羽に駆け寄り、さっと後ろに隠れた。佐天と誰も間に挟まらずに近距離にいたのは、実はかなり不快だったらしい。

「白羽早く行こう、今ので結構時間を食っちゃったから、早くしな
いよ」

佐天に急かされ、白羽達は早足気味に奥の部屋を目指す。数分が経

つと、まあまあ大きめの部屋に出た。そこは白羽も知っている。中宮の部屋に行くときに、1度通っていたからだ。そして、この部屋が何の部屋なのかも知っている。中宮の最も信用部下にしてこの魔術結社のNO2、白羽達を軟禁していた部屋の出入りを管理していた魔術師、鎌田の部屋だ。

「予定よりも少し早いな……」

音も無く、鎌田は白羽たちの前に現れた。

「白羽翔。お前は行っても良いぞ」

そう、鎌田は無表情のままに言った。残り時間を考えると、それは白羽達にとって悪くない提案だが、分からなかった。白羽達には、その理由が分からなかった。その提案は、鎌田達に利益が無いのだ。わざわざ陣のある部屋、中宮の部屋に敵、しかも唯一陣の中に入れる白羽を招き入れる。それが危険でない行為でないはずが無い。

「どうした、行かないのか？」

「行くさ。だけど、お前を倒してみんなでだ！」

白羽が強く地面を蹴って飛び出し、鎌田に向かって跳躍する。鎌田は、6角形の魔法陣が書かれた布を床に投げつけた。白羽はその布を踏まないように飛び越え、鎌田の下あごにトンファーの一撃を決める。だが、鎌田は後ろに飛びながら一回転し、見事な着地をした。ダメージはほぼないようだ。

「かける君！伏せ」

香乃が最後まで叫ぶ前に、それは起こった。さっき、鎌田が床に投げつけた魔法陣から突然、風が吹き荒れたのだ。しかも、人を余裕で吹き飛ばせるほどの暴風だ。

完全に不意を突かれた白羽は背後からの暴風に吹き飛ばされ、中宮の部屋の方へと飛ばされていった。上条達は、間一髪で上条が間に割って入り右手を突き出し、暴風を防いだ。

「はあ……は、あ」

「それが噂に聞く幻想殺しか」

鎌田が、自分から前に出た。常人では考えられないような速度で上条達に迫る。

「上条さん。1人でも、大丈夫ですか？」

「ああ」

桜野が確認し、上条が答えた。答えを確認すると桜野、佐天、香乃が走り出す。だがそれは、鎌田を迎え撃つためではない。そう、白羽を追うためだ。

それに気付いた鎌田がそれを止めようとするが、上条がそれをさせない。

「お前らの幻想は白羽がブチ殺す。だから、お前の相手は俺だ」

第六十話：NO2（後書き）

次回予告

中宮のもとへ辿り着いた白羽、そしてその白羽に中宮は最後の勧誘をする。それに、中宮が持ち出した、交渉材料とは……

第六十一話：右腕

「…ッッ」

「良く来たな、白羽翔」

暴風が途中で突然止まり、廊下を転がって来た白羽が前を見ると、中宮が白羽の方を眺めていた。その隣にはインデックスが拘束されて転がされており、中宮の少し後ろには魔法陣も見えた。白羽はさつと立ち上がり臨戦態勢になる。だが、それを見ても中宮はまったく意味深な笑みを崩さず、白羽に話しかけた。

「もう一度誘おう、白羽翔。魔術サイドへこないか？」

「前に断ったはずだ」

「まあまあ、そう言わずにこれを見るよ」

中宮は、自分の後ろに隠していたケースを前に出しながらそう言った。

「なっ！」

それを見て白羽は驚愕した。中宮と白羽の間にはそれなりに距離があったのだが、それはハッキリと見える。腕だ。しかも、子供の右腕だ。白羽にはそれが何か一瞬で理解できた。そして、同時に怒りがこみ上げてきた。

「何で…それを由美ちゃんに戻してやらないんだよ。仲間じゃない

「のかよー!!」

「ははは、そう怒るな。戻さないんじゃない、戻せないんだ」

「？」

「見るよサイズを。これを今のアイツの腕に合わせるには、かなり大規模な魔術をする必要がある。俺たちでは才能が足りないんだよ。だが、お前にはある。その才能が」

「俺の超能力じゃそんな事できないぞ」

白羽がそう言っていると中宮は軽く笑い、こう言った。

「あゝあ、来ちゃったぜ」

中宮が白羽の後ろを指差した。白羽が振り返ると、そこには佐天、桜野、香乃がいた。白羽の場所からは表情が窺えないが、シヨックを受けているだろうと白羽は思った。

「さあ、白羽翔。お前はソイツの見方でいたいんだろ？なら、ここに」

「違います」

中宮が言うのを遮って、香乃が顔を上げて言った。その表情には、全く迷いが無かった。

「かける君がどっち側にいても、私はかける君の味方です。だから、そんなもの右腕なんて私にはいらぬ」

香乃はきっぱりと言い切った。自分の右腕を見つめ、何の迷いもなく。

「そうか、なら……」

中宮は、右腕の入ったケースに魔法陣の書かれた紙を張り付けて放り投げ、次の瞬間バリンという音と共にケースが砕け散った。そして、同時に香乃の右腕も吹き飛んだ。

「……！！！！」

血と肉が飛び散るその光景に、全員が息をのんだ。

「……………中宮」

「何だ？」

こんな事をおこなながら、中宮は平然として答えた。その顔には一片の後悔も感じられない。

「覚悟しやがれ」

白羽はそこで一旦言葉を区切り、コートの中からもう2つ鉄塊を取り出して変形させた。その速さと、変形させた物から、白羽の怒りが見て取れた。

白羽は両刃鎌の刃を中宮に向け、宣戦布告した。

「お前は俺を、怒らせた」

第六十一話：右腕（後書き）

次回予告

ついに始まった中宮と白羽の戦い。白羽は超能力を駆使して中宮に猛攻を仕掛けるが……

第六十二話：都市伝説VS魔術師

「そうか、なら来いよ。白羽翔」

中宮が手招きをして白羽を誘う。

白羽は、左手でコートの中の銅塊を自分の前に投げた。そして、それを右手に持った鎌で切り裂く。鎌に触れた瞬間、銅塊は中宮に向かって高速で伸び始めた。

「おっと」

中宮は、スレスレでその銅棒を交わした。様に見えたが

「ツツ!!」

銅棒は伸びる方向を突然変え、中宮の横顔に直撃した。中宮がそれから逃れるために前が出るが、銅棒も中宮を追いかける。

だが今度は中宮が反撃に出た。紙の魔法陣を銅棒に貼り付ける。すると、魔法陣からバチバチと電流が通り、銅棒を這って白羽を襲った。白羽はギリギリのタイミングで銅を切り離し、電撃をかわした。

「どうした？魔術は、使わないのか？」

「……………」

「くくくく、そうだよな。使わないんじゃないよな。使えねえんだよなあ。お前は、自分の魔法名すら分かんねえんだからなあ」

そつだ、白羽が魔術を使つていたのは香乃に洗脳されていた時だ。白羽は、その時の記憶がほとんどない。だから、白羽は自分の魔法名を知らないのだ。

「由美ちゃん」

「……ごめん。私も知らない。もう一度かける君をあの状態にして聞きださないと……」

「……白羽翔。これが最後の勧誘だ。魔術サイドに来ないか？ 言つておくと、お前を操るのに使つた魔術の陣はこつちにある」

中宮の最後の誘いに、白羽は即答した。

「断る。俺には魔術なんて必要ない。仲間がいる」

「お〜お〜。熱いね〜熱血だね〜……ホント、殺したくなる」

中宮は、そこで初めて『怒』の感情をあらわにし、魔法陣を自らの両足に貼り付けた。瞬間、白羽の目の前に中宮が現れた。

「……」

白羽がガードするの間に合わず、中宮のストレートが白羽の鳩尾に食い込んだ。さらに、その勢いで後ろに吹き飛ばされ、無防備になった白羽の顔面に中宮の肘打ちが決まった。だが、まだ中宮の攻撃は止まらない。頭を床に打ちつけられ白羽の意識が遠のいた瞬間に、中宮が白羽を蹴り飛ばした。

全攻撃が決まった後に、やっと両刃鎌が地面に落ち、カランと言う音がした。

「ッゴホッゴホッ」

何とか佐天達に受け止めてもらい、咳き込む白羽だが、その咳にはかなりの量の血が入っていた。

「白羽！」

「翔！」

「かける君！」

「だい……じょうぶ」

そう言って白羽は立ち上がる。鳩尾も顔面もジンジンと痛むが、それでも白羽翔は立ち上がる。

「私も」

「ダメだ」

誰が言ったのかも分からない言葉を遮って、白羽は言った。今の攻撃をくらって感じた、コイツと戦わせてはいけない。誰もだ。

「今のは、魔術での高速移動だな？」

「ああ、そつだよ」

「そつか……なら」

白羽は、コートから3つ鉄塊を取り出し、コートを脱いだ。白羽のコートが床に落ちると、ズンと言う低い音が部屋に響く。

「ド○ゴンボールかよ。古いっての」

中宮が、また高速移動で白羽の目の前に接近した。だが今度は、中宮が拳を振るよりも早く、白羽が左手で中宮の拳を掴んだ。

「なっ」

そして、右手に持っていた鉄塊を一斉に伸ばした。もちろん、中宮はそれを交わすことができない。

鉄塊は中宮の鳩尾に入り、そのまま壁まで中宮を突き飛ばした。

「ド○ゴンボールか、結構正解だな。まあ、俺はトレーニングのためじゃなくて、武器として金属を持ってたら自然となった感じだけだ」

「そうか、そうか」

白羽の説明を全く聞いていない様子で、中宮は呟いた。

「そうか、もうアレだな。殺す」

立ち上がり、顔を上げた中宮は、笑っていた。

第六十二話・都市伝説VS魔術師（後書き）

次回予告

激しく続く白羽と中宮の戦い。そのころ、上条は……

第六十三話：増援

「……………はあ…はあ」

上条は、防戦一方だった。鎌田が魔術を放ち、上条が右手で打ち消す。それを繰り返している内に、上条だけが体力を削られている。

「幻想殺し、聞いていたほどではない様だな」

鎌田は、そう言って布の魔法陣をクナイに刺して飛ばした。上条はそれを転がって交わし、立ちあがる勢いを利用して前に踏み出す。爆発的勢いで鎌田に接近し、拳を振るう。

「うおおおおお！」

上条の拳は、鎌田の顔面に向けて放つ。だが、鎌田はそれを首を振るだけで交わし、カウンターで上条の鳩尾を殴ったり、上条が怯んだ一瞬に、鎌田は魔法陣を上条の右肩に張り付けた。

「しまっ！」

上条が気付いた時には、魔術は発動していた。魔法陣から高熱が放たれ、上条の肩を焼く。だが、上条はそれを破壊することができない。右手では、右肩には触れられないのだから。

右肩を抑え苦しむ上条に鎌田は容赦なく、魔法陣を貼りつけようとする。だが、その魔法陣は、鎌田の手を離れた瞬間、飛んで来たクナイに弾かれた。そして続けざまに、数本のクナイが放たれる。

「ッッ！」

その中の1本が、上条の右肩に張り付けられた魔法陣をかすった。魔法陣は少しだけ切れ、魔術的な意味を失う。

「……涼と純二か、ありがとう。助かった」

「お礼は良いです。とつとつやっつけて翔のトコに行きましょう」

関原がそう言つてスーパーボールを投げつけた。鎌田の眼前で起爆させ、視界を遮る。そこに、前田がクナイを投げつけた。煙を切り裂きながら突き進み、途中で鎌田に落とされる。

だが、それは鎌田の位置を探るためのトラップ。クナイが撃ち落とされた位置に、大量の手裏剣を前田が投げつけた。グサグサと言う鈍い音が響き、それで勝ちを確信した関原が次の部屋に進もうと前に出た。

「待てじゅん！確認を」

前田が言い終わる前に、ゴウ！と言う爆音が轟き煙が吹き飛んだ。同時に烈風が吹き荒れ、関原が吹き飛ばされる。前田と上条は、上条の右手で何とか防いだ。

「ぐっ……あ」

壁に強く背中を打ちつけ、関原が呻いた。激痛が走り体が動かない。

「超能力者、魔術師をなめるなよ！！」

ぼたぼたと血を滴らせ、鎌田は叫んだ。自分の四肢に魔法陣を貼りつけ、肉体強化をする。

ヒュン、と風を切る音と共に鎌田が前田の目の前に現れ、拳を振った。前田は間一髪でかわしたが、鎌田の拳は後ろの壁を破壊し、その破片が前田を襲う。

「があ！」

背中に破片が刺さり、前田がゴロゴロと床を転がった。だが、その隙だらけの背中を鎌田が逃すわけが無い。上条は、鎌田が振りかえって前田を狙うと予測し、その間に割り込んだ。だが、その予測は覆された。

「ああああああああああああああああああ！！！」

鎌田が突然膝をついて叫び出したのだ。見るとその拳は、肘のあたりまでひしゃげていた。

（力が強すぎて、体が持たないのか）

そう、鎌田は壁を砕くほどの力で拳を振ったのだ。当然、そんな力に腕がもつはずがない。しかも、鎌田は最初から右手を犠牲にするつもりで攻撃したのだが、前田が鎌田の拳を交わしたせいで鎌田のパンチは柔らかい人ではなく、固い壁に当たってしまった、肘までがひしゃげてしまったのだ。

「うおおおおおおおおおお！！！！！」

鎌田は激痛を堪えて立ち上がり、上条に向かって爆発勢いで踏み出した。上条は、突然のことに体が動かない。

だが、鎌田がつんのめってバランスを崩した。前田が手を伸ばして足を掛けたのだ。上条はそのチャンスを見逃さなかった。バランス

を取るために前に突き出だした顔面に向けて、ノーガードで全体重をかけた拳を振るう。

鎌田は、それを避ける事が出来ずにモロにくらった。全身を投げ出すように殴り飛ばされ、鎌田は背中から落ちた。その時に後頭部を打ち、鎌田は気絶した。

「上条さん。先に言ってください。じゅんは俺が後から連れて行きます」

「分かった」

上条は、走って次の部屋に向かった。

第六十三話・増援（後書き）

次回予告

さらに激化する白羽と中宮の戦い。そして、ついに戦いは終局に向かう

第六十四話・Defendant 478 (前書き)

第六十四話：Defendam478

中宮は、ケタケタと笑いながら魔法陣を取り出した。それも、1枚や2枚ではない。数十枚と言つ単位だ。

「これが俺の魔法陣のストック」

そして、と中宮は続けた。

「こつこつする」

中宮は、持っていた魔法陣を全て頭上に投げ捨てた。魔法陣達はヒラヒラと舞落ちて行き、広範囲に広がった。

「さあ！行くぞ！！」

中宮が白羽に向かって走り出した。その途中で魔法陣を一枚拾い、白羽に投げつける。白羽は、持っていた鉄塊を鎌に変え、その魔法陣を切り裂いた。中宮は白羽の数歩手前で飛び、その落ちる勢いも利用して白羽の頭にチョップを放つ。白羽は鎌を両手で構えてガードし、鎌の中の方を変形させて中宮の右手を掴んだ。だが、中宮は左手で魔法陣を鎌に貼り付けた。

「なっ！」

「敵の言葉なんか信じるなよ！」

鎌は見る見る溶けて行き、自分にそれが及ぶ前に白羽も手を離れた。だが、その隙に中宮は新たな魔法陣を取り出し、回り込んで白羽の

背中に貼りつけた。

風の塊が魔法陣めがけて飛び、白羽は前に吹き飛ばされる。白羽は魔法陣が設置されている場所をの真ん中、ちょうど中宮が立っていた位置に落ちた。

「ッッ！」

白羽はさっと立ち上がり、臨戦態勢になるが、中宮は白羽の方を向いていない。そう、中宮の狙いは白羽ではない。まず、佐天達を倒すことだったのだ。そのために、邪魔な白羽を動けなくした。

「さあ、誰から潰してほしい？」

中宮が人数分、3枚の魔法陣を取り出しながら言った。それに対して香乃と桜野が構える。

「おいおい。お譲ちゃんとはもかく由美、お前は分かってるよな？ お前じゃ、俺に歯が立たないんだぞ」

中宮はそう言いながらニヤリと笑った。次の瞬間、魔術による高速移動で香乃の目の前に移動し、魔法陣を足元に投げつけた。と、その瞬間魔法陣から無数の針が伸びる。香乃はそれを右に飛んで交わすが、その方向に中宮が高速移動で回り込み、脇腹を殴りつけた。

「がっ！」

香乃はノーバウンドで佐天の所まで飛び、佐天に受け止められた。その香乃を庇うように桜野が前に出る。だが、中宮がその目の前に高速移動で立ち、突き飛ばした。桜野は、佐天と香乃を巻き込んで転倒した。

中宮は、その数歩前に高速で移動し、3枚の魔法陣を床に投げつけた。その中の1つから銀の短剣が現れ、それを中宮がとり、前に踏み出す。と、同時に残りの2つの魔法陣から火柱と水柱が桜野達に伸びて行く。

「!」

白羽は思った。助けたいと。

白羽は祈った。救いたいと。

白羽は願った。守りたいと。

だが、白羽の力は使えない。白羽の手元に金属が無いからだ。

それでも、白羽は思った。祈った。願った。そして叫んだ。自分の願いを。魔法名を。魂に刻み付けた願い

「Defendam478!」

それと同時に魔術、あまかけるしらはね天翔る白羽を発動する。それによって、1対の純白の羽が展開された。その羽をはばたかせ、白羽は、テレポルト空間移動のような速度で、桜野達と中宮の間に割り込んだ。中宮もその速度には反応できず、魔法陣を発動できなかった。

白羽は、火柱と水柱を両翼で受け止め、中宮の短剣を右手で止めた。短剣は、刃が白羽の右手に触れた瞬間に変形させられ、白羽の手元で剣に作り直された。

そして、白羽はそのまま中宮の右手に突き刺す。

「ッッ!」

中宮が高速移動を使う事も忘れて後ろに飛び退いた。掌からはダラダラと血が流れている。

「魔法名を自力で見つけるなんてな。驚いた。それでも、俺の方が魔術師としては勝ってるんだよ！ド素人がああああ！！」

中宮は、数枚の魔法陣を手に持ち、高速移動で白羽に接近する。だが、それよりも早く白羽が羽を使って中宮の目の前に飛び、その頭を鷲掴みにして、羽をはたかせてそのまま中宮を壁まで引きずっていった。そしてそのまま壁に打ちつける。

壁にはひびが入り、中宮はズルズルと崩れ落ちた。

「……この、化け物め」

中宮は、ぐったりとしてそう言った。その目はキッと白羽を睨みつけている。白羽は振り返り、桜野達の方に向かう。

「化け物じゃねえよ」

途中で、白羽は歩みを止めて言った。

「ただの、都市伝説だ」

白羽は羽を消し、桜野達の方へ行った。全員を起こし、学園都市崩壊の術式へ向かう。もちろん、中宮が戦闘不能なでもう魔法陣は発動しない。制限時間少しかったが、無事に魔法陣を乱すことができた。インデックスも白羽が魔法陣を乱している間に、香乃が縄を解いた。

「で、これはどういう事なのかな？かける」

「いや、それよりも、早く上条さんのトコに行かないと」

「白羽！」

その時、タイミング良く上条が部屋に駆け込んで来た。

「上条さん！」

「もう、終わったのか？」

「はい」

「そうか、涼と順二は大丈夫だ。もうすぐでこっちに来る」

「そうですか……じゃあ、帰りましょう」

白羽が言い、全員が帰ろうとした、その瞬間だった。

「かけ……」

「え？」

音もなく、白羽の背中に熱いものが飛び散った。白羽がそれを指で触って少し取り、見るとそれは、血だった。

白羽が驚いて振り返ると、そこには血だまりの中に仰向けで倒れて行く、香乃がいた。

第六十四話：Defendam478（後書き）

次回予告

突然倒れた香乃。それは中宮の術式によるものだった。どうしようもなく立ち尽くす白羽。だが、そこに1つの希望が………

第六十五話：才能

「ゆ……由美ちゃん!!」

倒れる香乃を白羽は支え、ゆっくりと寝かせた。その体からは、血がどンドン流れている。

「クククククク」

笑い声に白羽が振り向くと、中宮が魔法陣を1枚床に張り付けていた。

「由美が裏切ることなんて、予想の範囲なんだよ。だから、自爆の術式を用意しておいた。白羽翔。お前は、自分の価値を」

「中宮ああああああああああああアアアア!!」

中宮の話を無視して、白羽がコートから鉄塊を1つ取り出し、怒りに任せて中宮に伸ばした。高速で伸びて行く鉄塊は途中で分裂していき、無数の刃物となって中宮に襲いかかった。

「はあ……はあ……はあ」

だが、中宮を傷つけても香乃の傷は癒えない。

「インデックス。魔術で、魔術で由美ちゃんを助けられる!？」

「……状況さえ整っていれば出来ないことはないけど、今はムリだよ。今ここで出来る魔術じゃ、ゆみを助けられない。出来てもせいぜ

い応急処置。でも、これはそれで何とかなるレベルじゃない」

「でも、それでも……俺に、由美ちゃんを助けさせてくれよ」

白羽は、いまだに血を流し続ける香乃を見て、涙を流してコートを握りしめた。その時白羽は、クシャツと何かを握りつぶす。それを白羽がポケットから出すと、それは魔法陣だった。香乃が、白羽を操っていたときに入れた物の様で、1枚だけ入っている。

「これは？これなら、由美ちゃんを助けられないか！？」

「……注いだ魔力に応じて怪我を回復させる術式だね。確かに、それなら由美を助けられるかもしれないけど……かける、それだと魔力を限界ギリギリまで注がなくなっちゃいけないから……失敗したら、死ぬよ」

「それでも、俺はやる」

白羽は魔法陣を香乃の腹部に張り付け、手を添える。瞬間、暖かい光が、溢れだした。

「インデックス、これって……？」

「かけるの注いだ魔力が多すぎて、溢れだしてる。かけるは、聖人だったんだ」

聖人。世界に20たらずしかいない、生まれながらにして神の力の一端を宿した人間。魔術サイドで、科学サイドでの核兵器に匹敵する力。

中宮が、執拗に白羽を結社に勧誘したのはこのことを知っていたからだ。

「凄い……」

それを見て、魔術の知識を殆どもない佐天も思わず呟いた。香乃の傷は、ものの数十秒で全て癒えた。

「白羽」

学園都市へと向かう途中、何とか自分で動けるくらいには回復した土御門に、白羽は話しかけられた。香乃は、白羽が背負っている。

「はい」

「どうするんだ？原石で聖人のお前は、どちら側から見ても貴重な存在だ。お前の動き次第では戦争だって起きる」

「もちろん、学園都市に帰りますよ。俺は、学園都市《、、、、》の都市伝説ですから」

「そうか……そうだな」

土御門はそれ以上何も言っただけでこなかった。そして、今度は佐天が白羽に話しかけた。

「白羽」

「何だ？」

振りかえると佐天は、笑って白羽に言った。

「おかえり」

白羽は微笑んで、答えた。

「ただいま」

第六十五話・才能（後書き）

これで第二章、都市伝説と魔術は終了です。

オリキャラ紹介 その2 + お知らせ(前書き)

だんだん設定が増えてきたので、そろそろもう1度紹介をしようと思います。

オリキャラ紹介 その2 + お知らせ

白羽翔 しろはかける

身長164?、体重45kgで中肉中背。基本的に役立たずだが、非常時には頼りになる。風紀委員177支部に所属。書類上、置き去りとして学園都市に捨てられた事になっている。学園都市の都市伝説である測定不能(正確には失われた能力)で、感情により能力のレベルが変わる。FIVEの少年と対峙した時の1度きりだが、超能力者に匹敵する程の力を発揮した。

世界でも珍しい天然の超能力者、原石であり、同時に世界に20人程しかいない聖人でもある。
測定不能の性質上、時間割りは効果が無いとされているので時間割りを受けておらず、魔法が使えらる。魔法名はDefendam478。意味は、守るための剣。

香乃由美 かのゆみ

身長156?、体重42kg。所属していた結社を抜けたため、今はフリーの魔術師。魔法陣をクナイに刺して飛ばす。魔法名はMini137。意味は、絶対に忘れない思い。

桜野美鈴 さくらのみすず

白羽のクラスメイト。基本的に猫を被っている。白羽と同じく風紀委員177支部に所属している。身長152?、体重39kg。能力は風力使い、強能力者。

まえだりょう
前田涼

身長160?、体重42kg。言葉の最後に「。」「をつける独特の喋り方をする。白羽、桜野と同じく風紀委員ジャッジメントの所属。能力は音声変換ボイスチェンジャー、異能力者レベル2。自分の声を自分の半径3メートル以内ならばどこからでも発音することができる。他に特技で、声を真似ることや、変装、腹話術などができる。

せきはらしゅんじ
関原純二

身長168?、体重48kg。白羽達の中では唯一の一般生徒。交友関係が広く、風紀委員ジャッジメントでも知り得ない情報を手に入れてくることもある。能力はラバーボム、大能力者レベル4。

オリキャラ紹介 その2 + お知らせ(後書き)

皆様こんにちわ。とある都市の都市伝説の作者、蓮です。今回はお知らせがあつて参りました。

私蓮は、受験生です。私事で申し訳ありませんが、受験勉強のため

にこの、とある都市の都市伝説を休載させていただきます。突然で申し訳ありません。復帰はおそらく3月後半から4月の始め位です。

第六十六話・帰還（前書き）

ふっかーっ！……とは行きませんでした。まだしばらく投稿は遅れます。

第六十六話：帰還

「さて、どうする？」

学園都市の出入り口付近で、土御門が突然口を開いた。

「ん？何がだ？」

「いや～上ちゃん。それが、学園都市の中に入れないんだぜい」

「「「「「はっ」「」「」「」

驚愕の一言に、全員が固まった。そして、上条が土御門に問い詰める。

「おい！それどういうことだよ！」

「いや～それがな、俺たちが出てきたのは出入り口の警備の甘くなるごく稀な隙なんだぜい。だから、次はだいたい20日後だにや～」

「……………どうすんだよお」

「はははは、それが考え付かないから聞いてるんだにや～」

「…白羽が学園都市を出て行くときはどうしたの？」

全員が頂垂れる中、佐天が白羽に問いかけた。

「たしか、魔術を使って俺達を見えないようにして出て行ったと思

う」

「それだ！」

「待て、じゅん。その魔術のやりかたが分からないんだ」

「それに、その方法だと上やんが入れないぜい」

うぐん、と全員が考え始めた。だが、数分立つても誰も何も考え付かない。全員の思考がマイナスに向かっていく。そんな中、佐天は巻諦めずに考えていた。

（何か……方法は？）

何もなしでは確実にムリだ。

なら、まずは超能力。関原の能力で出来るとしたら、壁を壊すこと。それは強度的にも、社会的にも不可能だ。次に前田の能力。これはどうやってもできない。桜野の能力は、レベルが高ければ壁を飛び越えられるが、実際は不可能。白羽の能力ならできるが、レベルを^{レベル5}超能力者程にまで上げる必要がある。だがそれは、単純に感情を高ぶらせるだけでは無理なようだし。

次に魔術。土御門は魔術の使用にリスクがあるから論外。香乃、インデックスは眠っているので、魔術を使ってもらうとすればもう少し先だ。最後に白羽。使える魔術は羽だけ。やろうと思えば壁の破壊もできるだろうが、やはり社会的にできない。

（くっそ。やっぱり、次の警備がなくなる時を狙うか、インデックスちゃんや香乃さんが起きるのを待たないと無理なのかな？）

佐天が周りの面子を見渡すと、諦めたと言う事なのか。皆座り込ん

でいる。佐天も、気分を変えるために空を眺めてみた。日が西の空に沈もうとし、辺りは茜色に包まれている。鳥も、巢に帰えるためか慌ただしく飛び交っていた。

その1羽を佐天は目で追ってみた。佐天達の上を飛び、学園都市の方へ向かっていく。そして、学園都市の壁を越えて、中へと入って行った。

「それだ！」

何故、こつちに思考が向かわなかったのだろう。白羽の使う魔法の名前は、天翔る白羽。つまり、あの羽は本来、飛ぶためにあるのだ。

「ん？どうした？佐天」

「ねえ白羽、飛べる？」

第六十六話・帰還（後書き）

次回予告

白羽と前田の部屋に集まったいつものメンバー＋香乃は、これからの事について話し始めた。

第六十七話：会議

「ん、んん？」

香乃が目を覚ますとそこは、空中だった。さらに、羽を展開して香乃をお姫様だっこする白羽（羽に触れるのは危険なので、自然とそうなったただけだ）。

「！！！」

「あ、起きた？由美ちゃん」

「かける君……ここどこ？何で私、生きてるの？」

中宮の自爆術式が発動したとき、致命傷を負ったのを自覚したはずなのに自分が生きている理由が、香乃には分からない様だ。

「由美ちゃんが、優しかったからだよ」

「？」

「まあ、後は帰ってからにしよっ」

「どっどこっ？」

「学園都市にだよ」
学園都市がくえんしよにだよ

「うう……」

「だ、だからさ」

白羽達がいるのは白羽と前田の部屋。上条と土御門は寮に帰り、残ったのはいつものメンバー＋香乃だ。今はこれからの事を話しているのだが、ここで1つ問題が浮上した。

「俺の後ろに隠れてると、話ができないんだけど……」

そう、香乃は物凄く人見知りが激しいのだ。子供の頃からあの結社で育ったというのもあり、仕方ないと言えばそうなんだが、白羽の後ろにぴったりとくっついて離れない。

「さっきは敵だったんだ。仕方ないだろ」

「そつだよ白羽、このままでも問題はないでしょ？」

白羽が香乃に視線を向けると、香乃は無言で頷いた。

「まず1番に住むところだ。これは、同性の佐天と桜野が良いと思うんだが。」

「えーっと、私たちの部屋は初春ちゃんが突然来たり、寮監が抜き打ち検査をしたりするから、ちょっと無理かな？」

「じゃあ、じゅんの部屋はどうだ？」

「部屋は有り余ってるし、大丈夫なことは大丈夫だけだよ」

関原はそこで言葉を区切って香乃を一瞥し、

「その子は翔と一緒に良いんじゃないのか？」

白羽達が視線を向けると、香乃はブンブンと首を縦に振った。

「涼、良いか？」

「俺の部屋を使わないなら問題ないぞ。」

「じゃあ、俺は今日からリビングで寝るか……」

白羽が何気なく呟くと、香乃が白羽の背中をつついて振り向かせ、言った。

「……一緒に寝る？」

「はいストップ！それはダメ！！」

瞬間、桜野がそれを止めに入り、それはなしになった。

「次は必需品だな。これは明日買い物に行けばいいだろう。」

「じゃあ、これで解散？」

「いや、問題がまだあるだろ？」

「ん？何だよじゅん」

関原が珍しく真面目な表情で言うので、白羽が聞き返す。

「金はどうするんだ？どうせお前が出すとか言うんだろうが、足りるか？何なら俺も出すけど…」

「大丈夫だ。それなら何とかなる。俺の研究費は結構高いんだぜ」

「そうか……なら良いんだけど」

白羽は笑顔で返したが、関原はどことなく心配そうだった。

第六十七話：会議（後書き）

次回予告

香乃の日用品を買ったためにセブンスミスに、白羽はセブンスミス
トへ向かった。

第六十八話・買い物（前書き）

今回のシリアスパートはもう少し先ですかね？

第六十八話：買い物

「? ? ? ? ? ? ? ?」

「由美ちゃん、楽しみ?」

「うん」

「そうか……でもね、だからってソファアをひっくり返して起こすのは無いと思うよ」

「…ごめんね」

朝、白羽はリビングの床に突っ伏していた。香乃にソファアをひっくり返されて起こされた結果だ。

白羽は気を取り直して体を起こし、朝食の準備に取り掛かろうとキッチンに向かおうとした。だが、

「え?」

何故か机の上には既に3人分の朝食が用意されていた。

勿論、今起きたばかりの白羽がしたのではない。前田も、まだ自分の部屋で寝ている途中だ。となると、残るのは1人。

「由美ちゃん、これ作った?」

「…ダメだった?」

「うっん、全然そんなことないけど…」

単純に驚いた。まだ食べたわけではないがその料理立ちが何とも美味しそうなのだ。白羽も自分の料理にはそれなりに自信があったのだが、その自信も一瞬で消え失せた。

「由美ちゃんは和食派なんだね」

「食事は、魔術的にも重要な事だから」

「そうなんだ」

と、他愛もない話をしていると前田の部屋の戸が開き、前田が起きてきた。瞬間、香乃は白羽の後ろに隠れる。そんな香乃と白羽を見て前田はあくび混じりに挨拶をした。

「ふあゝおはよ。」

「おはよう、涼」

「……おはよう」

3人で朝食を済ませ、白羽達は佐天、桜野、関原と合流。そして、今はセブンスミストに来ていた。

「とりあえず、服とか化粧品とか買わなきゃね」

「佐天、中学生に化粧品なんているのか？」

「いるよ！勿論！！」

「そ、そうか」

佐天のあまりの気迫に、白羽は頷くしかなかった。

「じゃあ、服とかは女子たちで頼む。俺達は食料品を……」

ガシッ

その場を立ち去ろうとした所で、白羽は腕を強く掴まれた。しかも誰か1人ではない、3人共いだ。

「どこ行くの？」

「……行かないで」

「私達の買い物に付き合ってね」

その様子を見た前田と関原は、速攻で白羽を見捨てる事にして走り去っていった。白羽の携帯に一言『がんばれ』と言うメールを送って。

「食料品は前田と関原に任せてOKね」

「じゃあ、私たちは服とか買いに行こうか」

白羽は、3人に連れて行かれる形で洋服店の階へ向かった。

「……………ナニコノジヨウキョウ」

香乃は白羽を盾にするようにぴったりとくっ付き、桜野は対抗するように白羽の右手に腕を絡ませ、佐天は白羽の左手を引っ張って次々と洋服店へと連れて行く。そんな状況だった。

しかも、香乃の服を買いに来たはずなのに何故か佐天や桜野の服も買っていた。

「ねえ白羽。前から思ってたんだけど、白羽ってスカートとか好きだよな」

「い、いや、そんな事はないと思うけど…」

「そう言えば、選んでもらった服にはそう言うのが多い気がする」

「き、気のせいだろ」

白羽が苦笑いを浮かべながら返事するが、そこに香乃がとどめを刺した。

「……………かける君って、そういう趣味なの？」

「そうだったんだ」

「初めて知った」

「違う、違うんだ」

白羽は頭を抱えて蹲ってしまった。

「翔、こっちは買い物終わったぞ」

「あ、関原と前田。こっちももう良いよ」

関原、前田と合流した白羽達は、並んで帰路に着く。

その時間は楽しくて、幸せで、こんな時間がずっとに続けば良いのに、と白羽は思っていた。

第六十八話・買い物（後書き）

次回予告

大霸王祭の数日前、香乃、佐天、桜野のそれぞれは白羽をナイトパレードに誘おうとするが……………？

第六十九話〈前編〉：結束

「ん……ふああ」

朝、白羽はソファアの上で目を覚ました。すると、キッチンから味噌汁の匂いが漂ってくる。白羽は体を起こし、のそのそとテーブルに向かった。

白羽がテーブルに着くと、キッチンにいた香乃が白米や味噌汁、魚の塩焼きなどを持ってくる。それが並び終わったころ、部屋のドアが開き、前田が出てきた。

最近は家事を全て香乃がやってしまうため、白羽や前田は家事を何もしていないかった。

「おはよ。翔、香乃。」

「おはよう、涼」

「……………おはよう」

相変わらず香乃は白羽以外に人見知りをしているが、同じ空間に住んでいるせいか、前田は比較的マシな方だ。酷いのは桜野とで、見た瞬間に白羽の後ろに隠れてしまう。

3人はテーブルに座って食事を始めた。白羽の隣に香乃が座り、その斜め前に前田が座っている。

「あ、由美ちゃん。今日は^{だいはせいさい}大覇星祭の準備だから遅くなるよ」

^{だいはせいさい}大覇星祭、7日間に渡って開催される、学園都市の全学校が参加する超大規模な体育祭だ。

白羽は学校としての準備のほかに、ジャッジメント風紀委員としての準備もあるため、かなり遅くなる。

「うん、分かった。でね……かける君」

「ん？何？」

「えーっと、その……」

香乃が、もじもじと体をくねらせる。その様子を見て白羽はひらめいた。

「由美ちゃん……まさか……」

「うん、その……」

「風邪？」

ズーンと、前田が椅子から崩れ落ち、香乃はがっくりとうなだれた。

「翔、だいはせいき大覇星祭から何で風邪に話しがシフトするんだよ。」

前田がツッコミを入れるが、白羽はそれでも気付かない。

「！ 時間だ。ゴメン由美ちゃん、話は帰って来てからで」

「あ、かける君！」

「……ドンマイ。」

白羽に続いて、前田も急いで出て行った。

「……帰って来てからじゃ、遅いんだよ」

香乃は、白羽達の部屋で一人呟いた。

「おはよー白羽」

「おう、佐天おはよう」

白羽が学校に着くと、もう朝の学活の直前だった。白羽が席に着くと、佐天が挨拶をしてくる。それを返し、白羽は教科書類の整理を始めた。

「おい、お前ら！絶対にたなほた柵畑中学の野郎どもに勝つぞ！！」

白羽のクラスに入ってきた担任教師、まかどいちろう真門一郎は門一番叫んだ。

「どうしたんすか、先生？」

「おう関原、よくぞ聞いた。実はな……」

それは、役数分前に遡る。真角がいつものように学活の準備をしていると、携帯が鳴った。電話を掛けてきたのは教育大学の同期の教師で「お前みたいなレベルの低い教師の学校は、家の学校の足元にも及ばないだろうな」と、唐突に真角へ喧嘩を売ってきたのだ。

「と言うわけでな、絶対に勝つぞ！」

「先生、そんな先生の事情じゃやる気出ませ〜ん」

佐天が言つと真角は少し考え込み、宣言した。

「じゃあ、家の学校が^{たなはた}棚畑中学に勝ったら、打ち上げ代を全部おれ
が出してやる！！」

「「「「「うおおおおお！！！！」「」「」「」」

^{さくがわ}棚川中学1-Dの心が1つになった瞬間だった。

第六十九話〈前編〉・結束(後書き)

次回予告

佐天や桜野も白羽を誘おうと試みるが……

第六十九話〈後編〉：メール（前書き）

いや、高校って結構忙しいですね。そのうち投稿が遅れると思います。

第六十九話〈後編〉：メール

「頑張ろうね、白羽」

「そうだな。」

帰り道、白羽は佐天と並んで帰っていた（佐天が、桜野や前田に見つからないように白羽を誘導した結果だ）。

「で、白羽……あのさ」

「ん？」

俯いて黙ってしまった佐天を白羽が見つめていると、佐天は顔を上げ、白羽に向かって言った。

「たなはた 柵畑中学ってどんな中学なのかな!!!？」

「あ……え〜と、確か生徒の4割がレベル2異能力者以上って言う、結構なエリート中学だったと思うぞ」

「そ、そうか〜。頑張らなきゃね」

あ、と白羽は携帯を開き、佐天に「もうそろそろジャッジメント風紀委員の会議が始まるから」と言い残して走って行った。

「うう〜、何で言い出せないのよ」

「白羽君、遅かったね。どうしたの？」

白羽が177支部に着くと、桜野が入り口で待ち構えていた。今は人がいるので、猫かぶり状態だ。

「ん？いや、佐天と一緒に帰ってたんだよ」

「で、ででで、何か言われた！！！！？？？？」

桜野が物凄い勢いで白羽に詰め寄り、問う。白羽はやや困った顔で「何も無いけど」と答えた。

「そう、ならいい」

「あ、白羽君来たのね。じゃあ大覇星祭中の巡回スケジュールを決めましょうか」

固律が呼びかけ、会議が始まった。

「じゃあ、もし怪我とかあったら支部に連絡してね。その人の分のスケジュールをどうにかしなきゃいけないから。特に白羽君」

「はい」

「じゃあ、白羽君一緒に帰えろっよ」

会議が終わり、白羽が前田を待とうとしていると、桜野が白羽を誘

い。白羽が答える前に強引に連れて行った。

「ねえ、翔」

ある程度歩き、人気が無くなってきたところで桜野が切りだした。

「なんだ、美鈴？」

「だいはせいさい大霸王祭のさ……… ナイト」

「おお！白羽、桜野！！何だ、ジャッジメント風紀委員帰りか？」

「あ、先生。こんばんわ」

桜野が本題に入ろうとした瞬間、間角が近くのコンビニから現れ、白羽達に話しかけてきた。

結局、その後桜野は話を切り出すチャンスを見つけられず、白羽と別れる場所まで来てしまった。

「じゃあ、また明日な」

「う、うん」

「あ、そうだ」

1人で帰り道を歩いていた白羽は、ふと思いつき、メールを送った。
『だいはせいさい大霸王祭の夜のナイトパレード、一緒に行くか？』

第六十九話〈後編〉：メール（後書き）

次回予告

前田はナイトパレードに、初春を誘おうとするが……

第七十話：特攻

「よし、周りに人影なし。今だぞ涼」

「お、おう。」

だいはせいさい
大覇星祭当日。前田と白羽は、競技の間の時間をぬって初春を待ちかまえていた。理由は、前田が初春をナイトパレードに誘うためだ。

「よ…よう、初春」

「あ、前田君。どうしたんですか、男子はもうすぐ競技が始まりますよ？」

「えっとその…今日のナ」

と、前田が切り出した瞬間。

「前田！白羽！テメエらさっさと来やがれ！！作戦会議だ」

真門がぬうつと現れ、白羽と前田を連れ去っていった。その場所は、次の競技の開催場所である棚畑たなはた中学の運動場近くだ。

「よしお前ら、次はお待ちかねの棚畑たなはたちゅうがくとの直接対決だ。ボッコボッコにするぞ」

「でも先生よお、正直言つて相手は格上だぜどうするんだ？作戦とかあるのか？」

関原が問うと、真門はふんぞり返って偉そうに、堂々と宣言した。

「ない！」

「……………」

重く冷たい沈黙が流れた。だが、その沈黙など関係ないとも言おうように真門は続ける。

「家のクラスであつちと1対1タイムン張れるのはせいぜい10人、そんなもって能力で勝てる見込みがあるのは関原くらいだろう。でもな、競技は喧嘩じゃねえ、玉入れた。その気になれば勝てる！」

その自信はどこから湧いてくるのか、真門は本当に勝てると思っっている様子だ。だが、そんな真門につられて、生徒たちも少しやる気を取り戻していた。そして、誰からともなく作戦を話し合っていた。

「とりあえず、俺たちが勝つには奇襲しかないだろ」

「いや、最初の競技の時に高校生がやってたんだけど、いきなり地面に能力をたたきつけてだな」

「あえて守りに徹するのはどうだ？」

と、意見を出し合っているうちに何と無くまとまり、競技の時間となった。

競技は玉入れ。クラスの内半分が籠を持って逃げる係、もう半分が相手の籠に玉をいれる係になり、入れた玉の多い方が勝ちだ。

「さくがわ柵川中1 - Dファイトオオー!!」

「「「「「おおおおおおおおおお!!!」「」「」」」」」

円陣を組み、1-Dが運動場へと入場していく。応援のための席には1-Dの女子や同級生、先輩の姿もあった。

「白羽!前田、関原!頑張れ!!」

「かける君!頑張つて!」

「みんな頑張つてね!」

その中に佐天と香乃、桜野の姿を見つけ、白羽は手を振った。3人共、心なしかいつもより笑顔だ。

「おい涼。この競技で良いところを見せて、初春を誘えよ」

「ああ、勿論そのつもりだ。」

前田の瞳には闘志が宿っていた。

パアン、という音と共に柵川^{さくがわ}中学1-Dの全員が走りだした。能力的に劣る柵川^{さくがわ}中学が勝つためにはそれしかないと判断したのだ。籠を持つた生徒まで攻撃に入れた、文字通り特攻だ。

最前線に白羽や前田の様な運動神経の良い者、後方には能力でサポートできる者を配置し、その間を数で埋めた。

「「「「「ウオオオオオオオオオオ!!!」「」「」」」」」

結果として柵川中学^{さくがわ}1-Dは勝利した。48-29での圧勝だ。ただ、特攻をしたせいで怪我人が多く、主戦力の運動神経が良い者にも少し穴が開いた。

前田も、軽症だが怪我人の1人だった。

「ッッ！」

「大丈夫ですか？もう、無茶して」

前田は手足を何箇所か擦り剥いていたので、医務テントで初春に消毒をしてもらっている。

「ははは、悪い。」

「そう思うならあんまり無茶しないでください。でも……………カッコ良かったですよ」

思わぬ初春の褒め言葉と笑顔に、前田は照れくさくて顔をそらした。

「なあ初春。ナイトパレードにさ、一緒に行かないか？」

前田からの申し出に初春は驚き「ふえっ!？」と声を上げた。前田は顔を真っ赤にして俯いている。

「迷惑なら…いいんだ」

「い、いえ！そんな事はありません！ぜひ、一緒に行きましょう！」

「そ、そうか」

そんな馬鹿ツプルじみた光景に周りの視線が集まっていたことを
人が知るのに、時間はかからなかった。

第七十話：特攻（後書き）

次回予告

佐天は白羽から届いたメールを眺め、うきうきとした気分で待ち合
わせ場所に向かうが………

第七十一話・待ち合わせ（前書き）

高校生……忙しいです。やばいです。これから投稿は週に1〜3
回位になります。

第七十一話：待ち合わせ

大覇星祭だいはせいさいの1日目、白羽達の柵川中学さくがわは柵畑中学たなはたに、ギリギリだか点数が上回っていた。

佐天は今日の片づけの班だったので、学校に残り今日の片づけを済ませ、今は寮に着替えのため寮に戻る途中だ。今日着て行く服は、前に白羽に選んでもらった服。実は、この日のために取っておいたのだ。

「　　？　　？　　？」

足取りも軽く、上機嫌で歩く佐天。その手の携帯の画面には、一通のメールが表示されていた。

『FROM：白羽』

『大覇星祭だいはせいさいの夜のナイトパレード、一緒に行くか？』

勿論、佐天はこのメールにYESの返事をし、この日を楽しみにしていたのだ。部屋に戻るとささっと着替え、佐天は後で決めた待ち合わせ場所に向かった。

「お、来たな佐天」

「遅れてゴメン、今日片づけの班でさ」

「いや、全然待ってないし良いって」

佐天が待ち合わせ場所に着くと、すでに白羽が待っていた。軽く雑談をしながら、白羽は佐天を連れて行く。

(何て言うかこれって……デートみたい)

佐天の内心を余所に、白羽はキョロキョロと辺りを見渡している。佐天がどうしたのかと聞いても、「ああ、うん」と、名前返事を返すばかりだ。

「お、いたいた」

「ん？」

「お〜い！美鈴！！」

白羽が呼びかけるその方向には、佐天と同じく白羽に選んでもらった服を着た桜野がいた。桜野は白羽に気付き、笑顔を浮かべるが、その後ろの佐天を見た瞬間、その笑顔は苦笑いへと変わった。

「えっと……白羽、どういう事？」

「ん？ああ、美鈴ジャッジメント風紀委員の仕事とかがあって、時間がズレてただよ

「じゃなくて、え？2人でじゃなかったの？」

「何言ってるんだよ。みんなで行った方が楽しいだろ？」

白羽の笑顔に、佐天は何も言えなかった。それは桜野も同じようで、諦めた様に方を竦めている。

「あ！かけるく……ん？」

香乃も白羽の元へやってくるが、佐天達と同じような反応を示した。

「じゃあ、行くか？」

そろったところで白羽が尋ねると、3人は笑顔で答えた。

「うん！」

「ど、どどこに行く？。」

「そ、そうですね。屋台でも見ますか？」

同時刻、前田と初春もナイトパレードに参加していた。しかも白羽達とは違い、2人で。

「あれ、美味しそうですね」

「そうだな、買ってくる。」

「い、いえ。良いです！自分で買いに行きます！」

「じ、じゃあ一緒に買いに行くか？」

「……はい」

2人は、自然と手をつなぎ、屋台へ向かって行った。
その数メートル後ろ、そんなバカツプルじみた光景を見て悶える人影が1つ。関原だ。実は、最初の時の人払いをしたのや、医務テナトで初春が手当てをするように仕向けたのは関原だったのだ。そして、今は勝手に尾行して、盗撮している。

「たつく、良い笑顔じゃねえか」

前田も、初春も、弾ける様な笑顔で笑っていた。
この時は誰もが笑顔で、その後起こる事など、誰も知るよしは無かった。

第七十一話・待ち合わせ（後書き）

次回予告

突然に起こった事件。そして、物語は一気に加速する！

第七十二話：空に至る道筋

その事件は、大覇星祭だいはいせいさいの最終日に起こった。競技会場へ向かうため、1人で歩いていた初春飾ついはるかざりが、何者かに刺されたのだ。

「初春うつうつうつうウウ!!!」

第一発見者は白井だった。風紀委員フヤツジメンとしての見回りで発見したのだ。刺されてからそう時間が経っていないく、白井の的確な応急処置もあり、命に別条はなかった。

「初春!!!」

白井から連絡を受けた白羽と前田が初春の病室に掛け込むと、白井だけが初春の隣で座っていた。

「白井、どういうことなんだよ?」

「『余計なパニックを起こすことなく事件を解決するため』だそうですね。本当のところは学園都市のイメージダウンを避けるためですわね……ふざけるのにも程がありますの」

白井は怒りを顕にして言った。

そう、初春の病室に白井だけしかいなかったのは、誰にもこの事を話さないよう白井が口止めされていたからだ。

「で、その支持を無視してまで俺達を呼んだのは?」

「勿論、貴方達に犯人をブン殴っていたただくためですわ」

白井は、大霸王祭だいはせいさいの前に事件に関わり、怪我を負っていたのだ。だから、今も車いすに乗っている。

「いや、涼は分かる。でも、何で俺も何だ？確かに俺だってそいつをブン殴ってやりたいけど……」

「これですわ」

そう言っつて白井が取り出したのは、褐色の肌をした少年が映る写真とそれにクリップで止められている手紙だった。その宛名は『白羽翔へ』となっている。

「内容は知りませんわよ。読んでいませんから。ほら」

白井がクリップからその手紙をはずし、裏面を見せると、そこには『我々は常に監視している。部外者がこの手紙を見るようであれば、次の犠牲者がでる』と記されていた。

「この手の精神異常者は何するか分かりませんので。まあ、見たことで……私にはどうしようもありませんし」

白井は、忌々しそくに自らの足を睨みつけ白井に写真と手紙を託した。

「白羽君、前田君……お願いしますの」

「ああ俺達が絶対に、ブン殴ってとっ捕まえて来る」

「任せろ。」

病院から少し離れた公園で、白羽は手紙を確認していた。人足がまばらで、常に少ししか人がいない場所として、この場所を選んだのだ。

「で、何が書いてあったんだ？」

「『空に至る道筋』からの招待状。つまり、コイツらは俺を呼び出すためだけに初春を……」

そこまで言っただけで白羽は気付いた。周りに、人がいないのだ。人足がまばらだと言っても、今は大覇星祭のまったただ中、いくら何でも白羽と前田以外誰もいないと言っただけの不自然ではないのかと。

「こんにちは、白羽翔君ですね？オマケも連れてきてしまったようですが良いでしょう。僕は柵畑たなはた中学1-Dの七川紫音ななかわしおんです。まあ偽名で」

「テメエ……………ツザけんなああああ！！！」

七川の態度に怒りが爆発した前田が、殴りかかる。だが、七川はすっと身を引いて交わり、さらに前田の足を引っ掛けた。

前田は顔面から倒れ、その前田を踏みつけた。

「ッッ！」

「気の荒い方ですね。別に……貴方はいなくてもいいんですよ？」

七川はポケットから銀の短剣を取り出し、前田に向けた。

「待て、お前は交渉に来たんだろ？」

「いいえ、迎えに来たんですよ」

「迎えに？」と、白羽が怪訝そうな顔を見ると七川は続けて話し出した。

「この公園の周辺には、30人ほどの仲間が控えています。みな、僕ほどではありませんがそれなりに実力者です。いくら貴方でも1対30では厳しいですよね？」

「違うな」

「？」

白羽が言うと、七川は眉を潜めた。瞬間、前田が七川の足を弾き、その足元を脱出した。さらに、そのまま流れる様な動作で七川の後ろに回り込み、その首にクナイを押し当てる。

「2対29だ。」

「ふふ、そうですか。では、無理矢理連れて帰る事にします」

第七十二話・空に至る道筋（後書き）

次回予告

始まった白羽達と七川の戦い。その結末は……

第七十三話・約束（前書き）

2話連続投稿です。気を付けてください。

第七十三話：約束

「……………Socius482」

七川が魔法名を呟いた。それに反応して前田が七川の首を絞める。すると、七川はポトリと短剣を落とした。

「うぐっ!。」

瞬間、前田の右足に刺されたような痛みが走る。そして、前田が怯んだ隙に七川は肘打ちで前田を退かせ、蹴りで追撃を加えた。前田は倒れる時に後頭部を打ったのか、気絶している。

「さあ、1対30ですね」

「違う、2対……………だいたい14」

七川が再び宣言した瞬間、七川の後ろのビルの窓から香乃が現れ、前田を抱えて白羽の後ろに下がった。

「冗談はよしてくださいよ、30人近くを相手にしながらそんな数をかすり傷もなしに……………」

「一人ずつ、声を上げる隙も与えずに倒せば問題ない。隠密行動は……………専売特許なの」

「ありがとう由美ちゃん。で、どうするんだ?七川」

「ッッ……………まあ、仕方ありませんね。貴方の話は本当の様ですし」

七川はポケットから通信機のようなものを取り出し、確認して言った。

「ここは一度、引かせてもらいます」

「させると思つか？」

「ええ、もちろん」

七川はポケットから球体を取り出し、地面に叩き付けた。瞬間、閃光が瞬き次の瞬間には七川は白羽達の前にいなかった。

「くそつ、俺は足手纏いじゃねえか。」

「涼、そんなことは」

「良いんだ翔……ゴメンな。俺は俺であいつ等を追ってみる。」

「おい、涼！」

七川が去った数分後、目を覚ました前田は今の状況を聞いて責任を感じたのか、白羽が止める間もなく出て行ってしまった。

「どつするの？かける君」

「……涼が出くわす前に終わらせるよ。由美ちゃんはみんなの」

白羽が香乃を帰そうとすると、香乃は白羽の腕を掴んだ。その目は白羽をじっと見つめている。

「分かった。一緒に行こうか」

「うん！」

「でも、とりあえず欠席だけ連絡しとくね」

白羽は携帯を取り出して電話を掛ける。相手は『じゅん』、つまり関原だ。関原なら、いざという時に佐天や桜野を守ってもらえる、そう判断しての行動だ。

『もしもし、翔！テメエも涼もサボりやがって、お前らうちのクラスの主戦力だぞ！自覚あんのか！』

「じゅん」

通話が始まってから白羽を罵倒し続けていた関原だったが、白羽の真面目な声色にそれを止めた。

『何だ？』

「俺も涼も、競技には暫らく出られそうにない」

『……そうか、分かった。それまで何とか俺達で頑張つてやる。だから、無事でってやめろ！佐天桜野！俺が今カツコイイこと』

関原がカッコ良く閉めようとした所で、邪魔が入ったようだ。それを理解した白羽が携帯を耳から離して切ろうとした、その時。

『絶対！無事で帰って来てよ！！』

2人の声が聞こえた。白羽は携帯に「ああ、絶対な」と囁き、通話を切った。

第七十三話：約束（後書き）

次回予告

白羽と別れ、一人で棚畑中学へ乗り込んだ前田。そこで前田が出会ったのは……

第七十四話：棚畑中学

「かける君、どうやって探すの？」

「……闇雲？」

「……分かった。探索用の術式作るから部屋に帰る？」

香乃が呆れたように顔を下に向け、白羽に提案した。白羽はそれに乗り、自分たちの部屋へ戻って行った。

（棚畑中学だったな。）

前田は白羽とは違い、目的地を棚畑中学と定めて向かっていた。しかも、白羽達よりも先に家に帰り、戦闘の準備を万端にしていた。

（とりあえず1-Dに行くか……いや、棚畑中学の体操服に着替えの方がいいな。このままじゃ怪しい。）

前田は手近なトイレの個室に入り、用意していた棚畑中学の体操服に着替えた。そして、棚畑中学の中に侵入する。

目指すはとりあえず1-D。流石に、七川がいるとは思っていないが、七川に関する情報が何か得られればと思っただ。だが、棚畑中学の中には不自然な点があった。

「……誰もいないのか？」

そう、誰もいないのだ。大覇星祭中だいはせいさいと言っても、人っ子一人見当たらないのはあきらかに不自然だ。

「……………」

耳を澄ませて神経を集中させる。すると、微かな音が聞こえてきた。方向は右、美術準備室。

前田は覚悟を決め、そのドアを開けた。勿論、突然襲われる事を想定して臨戦態勢だ。

ガラガラガラ

「んっ！んっ！んっ！んっ！」

誰もいない、だが声が聞こえた。口をふさがれた上で、幾つかあるロッカーの1つに入れられているのだろう。カギがかかっていたが、前田はピッキング用の針金を駆使し、順番にのロッカーを開けていった。その声の主は最後のロッカーの中に詰め込まれていた。

声の主は、前田と同じ年くらいの少女だった。柵畑たなはた中学の体操服を着ている。

「とりあえず聞いておくれが、何者だ？」

「ん！ん！ん！ん！」

前田は「ああ、悪い。」と言って口に貼られていた。テープを取った。すると少女はスーハー、スーハーと全力で呼吸をした後、前田の質問に答えた。

「私は永目理桜ながめりお。で、逆に聞くけど君は」

「ああ、俺は」

「こっち側の人かな？」

瞬間、前田がバックステップで後ろに下がり、クナイを構えた。永目は、言うのと同時に銀色の指輪を前田に見せたのだ。それを魔術関連の物と判断した前田は臨戦体制に入った。

「大丈夫、助けてくれた人を襲う気はないよ。まあ今の反应的に、こっち側を知ってるだけかな？」

「ああ、まあそんな所か。と言うか、お前は何でこんな所に閉じ込められてたんだ？」

「人質……かな？」

第七十四話・棚畑中学（後書き）

次回予告

前田が永目と出会ったころ、白羽たちも七川と再開していた。

第七十五話：Memini137

「ははははは、これはちょっと………予想外ですね」

「ホント、嫌な偶然だな」

白羽達と七川が対峙した公園のすぐ近く、自動バスの倉庫で白羽、香乃と七川は再び対峙していた。白羽と香乃が部屋に変える途中、偶然七川を見つけて付けてきたのだ。結果、白羽達が七川を通せんぼしている状態になっている。

「しかたありませんね、僕1人で何とかするしかないようですし。
S o c i u s 4 8 2」

「……………M e m i n i 1 3 7」

魔法名を呟いて、その瞬間には香乃は動き始めていた。持て来たウエストポーチの中からクナイと札を出し、クナイに札を刺して投げつける。

七川はそれを交わすが、後ろに落ちたクナイに刺さり、札が小さな爆発を起こした。

「ッッ！」

爆風に押し出されるように七川は前に飛ぶ。だが、そこに香乃の札つきクナイの追撃が襲った。

七川は短剣をクナイの少し後方、ちょうど影位の位置に投げつける。すると、キーンと金属同士が当たるような音がし、クナイが地面に落ちた。その時、地面に向かっていた短剣もまるで何かにぶつか

って阻まれたかのように宙を舞った。

「影と本体をリンクさせてる……」

「バレましたか。でも、それがどうかしましたか!？」

今度は七川が攻めに出た。地面を蹴って跳躍し、途中で短剣を捨てて香乃に迫り、短剣を上から下に振り下ろす。香乃はそれをクナイで受け止めようとするが、七川の狙いはそちらではなかった。

「今気づいた所でしょう!？」

七川は短剣を途中で手から離し、香乃の影、それも心臓の辺りに投げつけた。だが、間一髪でそれを理解した白羽が足で短剣を防ぐ。

「ッッ！」

がら空きだった。白羽は足に刺さった短剣の痛みで怯み、香乃はそれを見て固まっている。だが、ポケットの中には予備の短剣が幾つかあったのにもかかわらず、七川はその隙を狙わなかった。狙えなかったのではなく、狙わなかったのだ。数秒が経ち、白羽が痛みを押し殺して後ろに下がるまで、七川は何もしなかった。

「何でだ? 何で今俺を狙わなかった?」

後ろに下がった白羽が、短剣を横へ捨てながら聞いた。

「何と言つか：ある人と重ねてしまったからですかね？」

「？」

「誰かを守るために自分を盾にする、という感じでしょうか」

「何でだよ？」

白羽が七川を睨みつけ、問う。七川は「何がですか？」と聞き返した。

「何で、誰かを守りたいって気持ち分かる奴が人を傷つけられるんだよ！？初春を刺して、涼を殴って、今も由美ちゃんを刺そうとした。狙ってるのは俺じゃないのかよ！！？」

「ん？初春を刺した？」

「そうだろ、俺をおびき寄せるために初春を」

「僕は、君と一緒にいた彼しか刺したりはしてませんよ？」

七川は本当に分からないと言った表情で答えた。白羽はさらに質問を重ねるが、それで明らかになったのは『初春を刺したのは七川ではない』と言う事だった。

「第一、誘い出すために刺すと言うのはおかしいでしょう？そんな事をするよりも貴方の家を調べる方が簡単です。僕はあの病院の周りを探せと言われていただけですよ」

「それなら」

「言っておきますが、そもそも僕は『空に至る道筋』に所属したりしていませんよ?」

「じゃあ何でそいつらに協力してるんだよ?」

「協力なんてしていませんよ。脅されているんです、彼らに」

七川は懐から携帯を取り出し、その待ち受け画面を白羽達に見せた。そこには、1人の少女が映っていた。実は、その少女は前田がほぼ同時刻に出会っているのだが、白羽達は知る由もない。

「本当は僕が人質のはずだった。なのに……………」

「何で………… 助けにいかないんだよ?」

「みんなが貴方のように力を持っているわけじゃないんですよ。そんな事をすれば、人質である彼女がどうなるのか、分かっているんですか!??」

「そうじゃないだろ。俺だって強くなんかない、誰かに助けてもらいもしたし、ほんの一部しか解決できなかったこともある。1人で何とかしなげくちやならない決まりなんて、ないんだ。だから頼れよ、俺なら協力してやる。それに、その子は俺を無理矢理連れてきて助けてもらって喜ぶようなヤツなのか?」

「……………ありがとうございます。おかげで、目が覚めました」

七川は目を伏せ、表情をかくして言った。その頬からは、透明な雫が流れていた。

第七十五話・Memini137（後書き）

次回予告

空に至る道筋の構成員から前田達は逃げていた。だが、数の差で追
い詰められていき……

第七十六話：逃走

「今、学園都市に来ている『空に至る道筋』の構成員は約60人。僕が連れていた人達をかなりその方が削ってくださったので、まあ実際は50人前後ですね」

「それより、問題はどこにいるかだろ？」

「それは分かっていますよ。柵畑^{たなはた}中学です。奴らの大将といいますが、ボスもおそらくそこにいます」

その後少し話し合った白羽達は、考えている時間が惜しいと言う結論に達し、柵畑^{たなはた}中学に真正面から向かう事にした。白羽の力を使うなら、変に作戦を立てるよりその方が良いのだ。ただ、香乃だけは先に行つて様子を見てくる事になった。

「（くっそ。）」

出来るだけ気配を消して校内を探索していた前田だったが、永目を助けて声を出したのが悪かったのか、追手に追われていた。今は教室の1つに隠れている。

「（お前何者だよ？。）」

「（だから、人質だつて。で、どうするの？真正面から向かったら

勝てないと思うかな？」

「（勿論戦わない。逃げて逃げて、仲間のところに付けければ俺の勝ちだ。）」

前田は、窓から外を見る。ここは3階、飛び降りるには高すぎる。

「（仲間って、そんなに強い人なのかな？）」

「（ああ、聖人で、超能力者だ。）」

「！……」

危うく永目が声を出しそうに鳴るのを、前田は口をふさいで止めた。

「（ゴメン、白羽翔くんだねその子。私が捕まったせいで、紫音が……）」

「（紫音？……七川…紫音）」

「（やっぱり、もう会ってたのかな？しかも……悪い形で）」

前田は、永目に説明を受けた。永目たちがフリーの魔術師だと言う事や、白羽の襲撃は七川の意味ではないと言う事、七川は絶対に初春を襲ってはいないと言う事についてだ。

「いたぞ！」

「チッ！ここじゃ逃げ場がない。集まってくる前に強行突破するぞ！」

追ってが来て、瞬間に判断をした前田は、魔術を使わせる前にその追手を気絶させた。そして、永目の手を引いて走り出す。

「いたぞ階段をふさげ！」

「くそつ、逃げ場がない」

前田は後ろから来る追っ手から逃れるため、階段を下ろつとしたが、そこからさらに追っ手が登ってきた。やむなく前田達は階段を上へと上がる。

だが、上がった階でも敵が待ち構えており、前田はさらに上と上がらざるを得なかった。そして、前田達は屋上まで上った。

「追い詰められたか……。」

「どうするのかな？私は4、5人くらいしか相手出来ないけど？」

「戦う事を考えるな。逃げる。」

「どうやってかな？」

永目の問いに、前田は答えられない。完全に手詰まりなのだ。

「あゝ、たしかお前は白羽翔の仲間だっただけか？」

「お前は？」

「んゝ、俺は『空に至る道筋』の副取締役の大沢おおさわ。まあ、サブリーダーみたいなものだな」

第七十六話・逃走（後書き）

次回予告

現れた白羽、そして戦いが始まる。

第七十七話：バラあて（前書き）

投稿遅くなりました。

第七十七話：バラあて

「ん〜。そうだったな。飛べるんだったか」

「ああ、そうだよ」

永目を下ろし、トンファーを構えた白羽が大沢に向き合う。

「あ〜、どうするんだ？俺達は50人位いるぞ？お前ら3人だけで」

「違いますよ。5人です」

大沢の声を遮る様に別の声が割り込んだ。その声の主は屋上をよじ登る様に屋上上がったてきた。

「へ〜、七川か。もう1人は香乃由美、白羽翔の仲間だったな」

「これでどうだ？」

白羽の問いに大沢は考え、行動した。

「あ〜、5人は面倒だから、減らす」

超高速で香乃に接近し、拳を振るおうとする大沢を、白羽が先回りして蹴り飛ばす。聖痕を解放し、聖人としての力を行使する白羽には、大沢の超高速移動も敵ではない。

「やせねえよ」

白羽の1言を合図としたのか、大沢が蹴り飛ばされたことに危機感を覚えたのか、『空へと至る道筋』の構成員たちは白羽達に向かって一斉に攻撃してきた。

数十分もかからなかった。数分だった。強力な魔術師である七川や、集団戦闘を得意とする前田、さらに、聖人で超能力も行使する白羽もいたのだ。必然だった、と言える。

「僕は聖人の力をナメていたようですね。たった30ぽっちで挑もうだなんて、身の程知らずでした」

「元々、戦う必要だつてなかったんだけどな。まあ、これで初春を刺した犯人は捕まえたんだし、一件落着」

「……いいえ、そう言う意味ならば違いますよ。この男はそい言う役割をしていませんでした。そう言う指示をしているとしたら、園田と言う男です。そいつは、僕のクラス 棚畑中学1-Dの担任をしています」

それを聞いた瞬間、前田が自分たちのクラスの競技の票を見始める。

「翔！後4分でそこの競技が始まるぞ！」

「分かった。掴まれ、涼」

白羽が羽を展開し、前田と香乃の手を握る。

「ありがとうございます」

「お礼何か、いらねえよ」

そう言って、白羽は飛び立った。

「翔、涼。終わったのか？」

柵川^{さくがわ}中学1・Dの集まる場所に白羽達が付くと（途中で羽はしまい、走ってきた）、関原が駆け寄ってきた。

「いや、今から終わらせる」

「そうか」

白羽と前田は柵畑^{たなはた}中学1・Dの集まる場所に向かう。

だが、そこはもぬけの殻だった。それは別に、柵畑^{たなはた}中学1・Dの全員が『空に至る道筋』の構成員で、白羽達を恐れてにげ出したとか、そう言う訳ではない。

単純に、競技の直前だからだ。そしてその競技が、担任も含むクラス全員参加のバラ当てだからだ。

今回のバラ当てのルールは簡単だ。学校中に置かれたボールを拾い、敵チームの選手に当てる。そして、そのボールが地面に落ちたらアウト、つまり退場だ。制限時間内により相手チームの選手を退場さ

せたチームの勝ち。学校の敷地内の物は自由に使っている。白羽と前田は滑り込みで競技に参加し、園田を探していた。

「翔！。俺は中庭とか外を探す！お前は校舎を探してくれ！！。」

「分かった」

2手に分かれ、白羽と前田は走り出す。

「いた！柵さくがわ川中学の奴だ」

別れた直後、曲がり角で柵たなはた川中学の生徒が2人組で前田を襲ってきた。2人共、ボールを持っている。片方がボールを投げ、もう片方が前田がボールを取るのを待つ。前田にボールを取らせ、両手がふさがった所にさらにボールを投げて当てる作戦の様だ。

前田は、相手の作戦通り最初のボールを取った。だが、その後もう1人が放ったボールに簡単に当たったりはしなかった。取った1つ目のボールを2つ目のボールに向かって投げつけ、空中でぶつけたのだ。

イレギュラーに跳ねたボールを前田は2つとも確保し、投げつけた。

「邪魔を、するなああああああ！！！！。」

白羽も前田も、動けば動くほどに柵たなはた川中学の生徒に出会い、あまり園田を探せていなかった。そして、それを見て満面の笑みを浮かべるものが1人。柵川中学1-Dの担任、真門だ。白羽と前田が次々

と柵畑^{たなはた}中学の生徒を撃破していくので、両中学の生徒の残り人数の差が、20を超えているのだ。両中学とも、参加している人数は教師も含めて36人。つまりは、柵川^{さくがわ}中学の生徒は殆ど退場になっていないのに、柵畑中学の生徒はどんどん減って行くのだ。

(ふふふふはははははははは。もうこの競技は勝ったも同然。あとは園田の野郎を……)

と、そこまで考えたところで、真門の視線の端を何かが横切った。壁に隠れてそれを確認すると、それは、園田だった。

「園田！覚悟おおおお！！！」

「わっ！真門！！！」

園田は、抵抗する間もなく、真角の不意打ちによりアウトになった。だが、その顔は歪んだ笑みを浮かべていた。

「ッッ！いた。」

園田を探して走り回っていた前田が、遠くに園田の姿を見つけた。だが、もうすでにアウトになっているので校舎の外へ向かっている。

「くそ！間に合わない！」

外に出れば、園田は柵畑^{たなはた}中学の集まるころへいつてしまい、前田は行けない。そして、その間に園田は逃走するだろう。そうすればもう手遅れだ。前田にはどうしようもない。

だから前田は周りを一切見ず飛び出した。敵が来ればそれでアウト、園田とは別の出口から出させられるが、そうしなければ園田には追いつけない。

だが、世界はそんなに優しくはない。

5人の生徒が、前田の周りを囲む様に現れた。

第七十七話：バラあて（後書き）

次回予告

立ちはだかった5人の生徒。その時白羽は、校舎の中にいた

第七十八話：能力

5人の生徒中2人がボールを持っていて、残りは能力を使おうとしていた。前田にそんな余裕はなかったが、柵川さくがわ中学の生徒はもう残り数人となっていた。そう、この生徒たちが多対1に持ちこんで倒していったのだ。

白羽は、その光景を校舎の中から見ている。校舎の中の搜索は終わり、外を見たらこうなっていたのだ。だが、白羽にはどうにもできない。

あそこに届く程の量の金属があれば、と思ったところで白羽は気付いた。ここは、鉄筋コンクリートの校舎なのだ。

(気持ちを高める。心を動かせ。思いを吐きだせ)

初春が刺された、その犯人を前に前田も白羽も何もできない。そして、そいつは白羽達の届かない所に行ってしまう。

(許さない)

そんな悲劇は……許さない！

「うおおおおおおオオ！！」

壁に手をつき、能力を最大に発動する。

「混乱を防ぐため、で通るだなんて本気で思ってるのか。統括理事会は。」

「まあまあ、落ち着いてくださいよ2人共」

「初春こそ、良く落ち着いていられますのね。犯人の動機知ってますの？『楽しそうにしているのが憎らしかった』ですわよ。私もブン殴ってやりたい気分ですわ」

園田の本当の犯行動機は伏せられ、公式には白井が言ったようになっていた。園田が黙っていたのか、学園都市が隠したのは定かではない。

「そ、それより」

空気の悪さに耐えかねた初春が話を強引にそらせた。

「白羽君が凄かったんですよ？佐天さんに聞きましたよ」

「あゝ、観客が驚きすぎて全員ポカーンとしてたしな。」

「で、その白君はどこにいきましたの？」

「ああ、カワイイオンナノコ達に連れて行かれたよ」

「じゃあ、またね白羽、由美ちゃん」

「じゃあ、ジャッジメント風紀委員サボらないでね、翔」

「ああ、じゃあな」

「……バイバイ」

だいはせいさい
大霸王祭最終日のナイトパレードを終え、白羽達は帰路についていた。

「由美ちゃん、先に帰ってて。ちょっと買い忘れを思い出した」

「……一緒に行くよ?」

「ううん、良いよ。すぐに終わるし」

「……分かった」

白羽は、1人で今通った道を引き返し始めた。そして、適当に進み、人気がない公園に着くと、倒れた。気絶こそしていないが、いやな汗をびっしょりとかき、苦しみ悶えている。

(俺は……)

その状態のまま、白羽は思う。

(俺は後どれだけ……白羽翔でいられるんだろう?)

第七十八話：能力（後書き）

作「かなり投稿おそくなりました。すみません」

翔「馬鹿作者がすみません」

作「突然ですが、次回予告の方式？を変更させてもらいます」

翔「作者とキャラの対話的な感じになったのか」

作「まだ慣れないので今は短めですが、どんどん長くしていこうと思います」

翔「で、最後のアレは完璧にフラグだよな？」

作「かなり確信をついてくるね」

翔「あんなに露骨にやっというて良く言うな？」

作「だが、これは次の次の話へのフラグ！」

翔「遠い！」

作「次からは『都市伝説と必要悪の教会』をお送りします！」

翔「強引にしめた！！」

作・翔「では、次回をお楽しみに！」

第七十九話：ニユース

「……ける君、かける君！」

香乃の呼び掛けに、白羽は目を覚ました。今日は大霸王祭たいはせいさい終了の翌日。休日なので、白羽はいつもより遅めに起きる予定だったが、時計を見ると午前6時、いつもよりも少し早いぐらいの時間だ。

「どうしたの？由美ちゃん」

「チャイム鳴ってる」

「あ……」

寝起きでボーっとしていて気付かなかったが、チャイムが鳴っている。香乃はいないことになってるので、訪ねてきた人が白羽達いつものメンバー以外だったら、対応することができないのだ。

白羽は体を起こし、玄関まで歩いてドアを開けた。すると、そこにいたのは白井だった。

「どうしたんだ？白井」

「その様子ですと、やはりテレビは見てないんですね？」

「？」

「まあ、見てもらった方が速いと思いますの。あがりますわよ？」

そう言つと白井は、白羽の返事を聞かずに白羽達の部屋へとはいっ

て行く。香乃は、いつの間にかどこかに隠れていた。

白井はテレビのリモコンを手に取り、テレビの電源をONにした。そして、適当にチャンネルを変えると、白羽に見るように促す。そのチャンネルでは、臨時ニュースが流れていた。そのタイトルは

「『学園都市、新たな超能力者《レベル5》』……………凄いけど、俺を起こしてまで見せる必要とかあったのか？」

「まあ、もう少し見ててくださいの」

『学園都市からの正式な発表はまだですが、能力を発現したのは中学生。柵川中学の生徒と言われています。その生徒は^{だいはせいさい}大覇星祭最終日に校舎全体を能力の支配下に置き……………』

「……………」

「分かりましたの？」

白羽はさびたロボットの様な緩慢な動きで白井の方を振りかえり、尋ねた。

「ダレノコトデシヨウカ？」

「貴方以外にありえまして？」

「うそおおおおおおおおお！！！！」

白羽はがっくりと頂垂れて、混乱し始めた。

「とりあえず、177支部に行きますわよ。このニュースでその生

徒が貴方だと気付いた人から噂は広がって行って、おバカな方々が貴方を狙う前に」

白井は、白羽の返事も聞かずに空間移動テレポートで白羽ごと177支部へと向かって行った。

「よう、白羽」

白羽が177支部に着くと、そこには何故か真門がいた。

「何でいるんですか、先生？」

「ああ、前田に聞いてきた」

「そうじゃなくて、何故、いるんですか？」

白羽が若干イライラしながら問うと真門は、鞆の中から数枚の紙をとりだし、白羽に差し出した。

「？」

白羽が受け取ったそれを見るとそれは、白羽、佐天、桜野、前田、関原の外出許可書と、イギリス旅行のパンフレットだった。

第七十九話：ニユース（後書き）

佐「やったー！イギリス旅行！！」

作「都市伝説がついに学園都市を飛び出します」

佐「と言う事は魔術関連の話なの？」

作「もちろん『都市伝説と必要悪の教会』ですから！」

佐「次回はどんな話になるの？」

作「次回はイギリス到着！そして関原の出会い！」

佐「おお、ついに関原にも春が！」

作「そうそう。白羽はともかく、前田にも春をこさせちゃったからさ。もうこれは関原もやるしかないでしょ。って事で」

佐「初春と前田はくつついてないけどね」

作「まあとにかく」

作・佐「次回をお楽しみに！！」

第八十話：アリス・シャーリー

「はははは、来ちゃったな〜……イギリス」

真門から書類を受け取って約1日後、白羽達はイギリスに到着していた。

『あれは完全に機械の故障だ。と言う訳で、大人が事態を収集するまで友達とちよつと旅行にいつてる』

そのたつた1言で白羽は説明を片付けられ、何だかんだの手続きをさせられた。旅行中の授業は免除になるらしい。ちなみに、香乃は魔術で門をクリアし、飛行機は荷物にまぎれてきた。

「で、どこから回る？」

「俺さ、腹減ったんだけど〜」

「へ〜」

「ふ〜ん」

「……うん」

関原の提案に女子3人はあまり乗り気じゃないようだ。

「翔！女子が俺に冷たい！！」

「いや、俺に言われても……」

「ま、まあ飯はもう少し後にして、街を見て回るか?。」

「そうだな。とりあえずは観光だし」

白羽達はイギリス、ロンドンの街を散策し始めた。主に佐天達によって白羽、佐天、桜野、香乃と関原、前田に分かれて。

「あ、あいうおんとうーばいदैす………なあ涼。ネックレスって英語でなんて言うんだ?」

「そのままネックレスだろ。しかも、それじゃ『私はこの……を買いたい』だし。」

前田と関原は困っていた。その理由は、言葉が通じない事だ。ホテルは真門が日本語の大丈夫な所を選んでくれたが、街ではそうはいかない。関原達中学1年生程度の英語では日常会話すらままならず、ネイティブの英語を聞きとることができないのだ。結果として値段を聞くこともできず、買い物ができなくて困っていた。

「えっと。じゃあ、はうるんぐ……」

「長さを聞いてどうする?。」

店員も困った顔をしている。

「ねえ君達、値段を聞きたいの?」

「うお！日本語!？」

白羽達に話しかけて来たのは、流暢な日本語が全く似合わない、金髪に蒼眼なショートカットの少女だった。

「ねえ、どうなの?」

「あ、ああ。値段を聞こうとしてたんだ」

それを聞くと、少女は店員にきれいな英語で値段を聞き、関原に教えてくれた。

「その値段なら買うか」

前田は少女に通訳してもらい、無事ネックレスを買う事が出来た。

「君って物好きね。わざわざイギリスまで来て買うものが、十字架のネックレスって」

「いや、何か日本で見たことない感じのヤツだったから……」

「おお、キミ鋭いね。これはイギリス政教の十字架よ。たしかに日本じゃ見ないかもね」

「そうなのか」

と、少女と関原が雑談をしていると、前田が突然関原の頭をはいた。

「微妙にいたっ！何すんだよ！」

「とりあえずお礼を言えよ。」

「あ……………悪い忘れてた。ありがとう」

「ああ、気にしないで。って、そっだ、君たち名前は？私はアリス・シャーリーね」

少女は、はっと気がついたように関原と前田に尋ねた。

「俺は前田涼。」

「俺は関原純二だ」

「そっか……………」

アリスは少し残念そうに目を伏せた。

「ん？人さがしか？」

「うん、ちよっとね。待ち伏せしてたんだけど全然来なくてさ…………。よし！ヒマだし君たちのガイドと通訳をしてあげよう！！」

「よし！これでもう英語に困らねえぜ！」

「結構適当なんだな。」

白羽達の事をすっかり忘れている関原達だった。

第八十話：アリス・シャーリー（後書き）

作「と、言う事でアリス登場！」

桜「またライバル!？」

作「さあ、そこら辺は作者の気分次第!!」

桜「これ以上増やしたら……」コ・ロ・ス

作「よし!止めておこう!!」

桜「小学校までは私が独占してたのに……」

作「出会ってたのは香乃の方が早いんだけど、一緒にいた時間では桜野がトップ何だよね」

桜「なのに私の話ってないわよね? 1章は若干私もヒロインしてたけど、メインは佐天ちゃんぽいし、2章はモロ香乃ちゃんだし、3章は一応、涼君と初春ちゃんでしょ? 4章はどうからしないけど、題名的に私はないし。ねえ作者……死ぬ?」

作「大丈夫です!物語の中核を担う話として準備しております!」

桜「よろしい。じゃあ、次回予告!」

作「………言ってしまった。どうしよう……」

桜「ん?何か言った?」

作「いいえ！何も！！」

桜「じゃあ、予告して」

作「普通に旅行をエンジョイする白羽達！しかしその裏では……！」

桜「と言う事で……！」

作・桜「次回をおたのしみに……！」

第八十一話：襲撃

「ねえねえ翔。あの店行こうよ」

「じゃあ白羽、その次この店」

「……私はあつちの美術館」

白羽達は、思いっきり旅行を満喫していた。店員との会話も、携帯のアプリケーションでクリアし、問題は……

「3人共…休もうぜ」

「…まだまだ」

3人に引つ張りまわされて白羽が疲れている事くらいだった。

同時刻、白羽達を監視する人影があった。

「どうする？^{ターゲット}目標がそばにいるから、女を人質にするには無理がある。やはり、男を人質にするか？」

「だが、男の方は両方それなりに戦えるぞ。ある程度の人数でかからなければ」

「では騒ぎが起こらないように人払いをしておこう」

さらに、同時刻。他にも、同じ人物について話をする影があった。

『で、目標とは接触できたのかい？』

「ううん、全然見つからないからほかの日本人と一緒にいる」

『……君は何をやっているんだい？目標の捜索には君しか出ていないんだ。しっかり頼むよ』

「私にはっか任せないで師匠も来ればいいじゃん」

『僕は見た目で警戒されるから行けないと説明したはずなんだけどね』

「ははは、分かっているならやめればいいのに」

はあ、と通信の相手はため息をつき「あまりサボらないようにね」と念を押して通信を切った。

「分かっているよ」

少女は、ある少年の写真を見て呟いた。

「お、きたきた」

「ごめんね」。煩い上司が催促の電話してきたんだよ」

「本当に大丈夫なのか？」

関原達は、アリスにロンドンの街を案内してもらっていた。

「うん、大丈夫大丈夫。いつも口うるさい上司だし、君たちを案内しつつ探してるからね」

「それなら良いんだが。」

「ささ、次行こうぜ」。次はあのみ……………せ？」

関原は気付いた。土産物の店を指差し、その店を見て。

いなかった。

誰も、1つ子1人いなかったのだ。

「……………」。

さらに、次の瞬間には数十人の怪しい集団に囲まれていた。

「何だコイツら……………」

「逃げて！とにかく逃げて！！」

瞬間、アリスの様子が激変した。両ポケットから数えきれないほどのカード、それも、1つ1つの文字に魔術的意味のこもったカードを取り出し、それを周囲にバラまいた。

「ここは…私がかいとめる！Defetiigo821、原初の炎よ！我を包め！」

瞬間、炎が吹き荒れた。関原達の周りを包む様に炎のベールが発生し、そこから1筋、に炎の道が現れた。

「君たちはあそこから逃げ」

アリスの言葉を遮り、水の弾丸が炎のベールを貫きベールの中で爆発した。その水は炎のベールを生滅させ、その穴から数人の敵が入ってきた。

「ツツ！！早い！君たちさっさと」

「涼！」

「ああ。」

またしてもアリスの言葉を遮り、今度は関原と前田が言った。そして、タイミングをずらして敵へ突撃する。その間は約10メートル。

「これでも喰らえ！」

関原がスーパーボールをポケットから取り出し、それを敵へ投げつけた。敵は訳が分からず一瞬考える。そこを狙い、関原が指をパチンと鳴らした。瞬間、スーパーボールが爆発し、爆煙をまき散らし

た。

「!!!」

「爆風オンリーだ安心しろ」

敵が突然の事に驚いていると、敵の後方から声が響いた。

「後ろがガラ空きだよ!。」

うあ!がは!と叫びが聞こえてきた後、煙の中から、ガスマスクを付けた前田が出てきた。

「4、5人やつつけて、ヤツらの声で混乱させてきた。逃げるなら今だ。」

「ははは………君たち何者?」

「「超能力者だ」。」

第八十一話：襲撃（後書き）

次回予告

関「超能力者だ」

作「地味に気に言っているセリフです」

関「テスト前なのに現実逃避して作ったもんな」

作「黙れ！その話はするんじゃない！」

関「しかも、まだテスト終わってないし、実テと期末の2連ちゃんだしwww」

作「煩い！アリスはお前のヒロインにする予定だったが、白羽のヒロインにするぞ！？」

関「ははははは、ところであの『超能力者だ』ってのは翔の『都市伝説だ』に掛けてるんですか？」

作「（思ったより効いたな）。まあ、そうなんだよ。最初は全キヤラにある予定だったんだけど、ヒロインたちの考え付かなくて……」

関「そもそも戦わねえから名乗らねえしな。特に佐天」

作「うん、一応予定あるんだよね」

関「マジで！？どんなシチュエーションで？」

作「ひ、み、っ」

関「……分かったよ、じゃあ」

作・関「次回をお楽しみに！」

第八十二話：追撃

「超能力者…ってことは学園都市の!？」

「ああそつだ!」

「で、どうする?戦うのか、逃げるのか?。」

関原達が話している間にも、炎のベールは少しずつ破られ、関原が起こした爆煙は晴れて行っていた。

「そつ、そつね。数が数だからやりあつたら勝てないし、逃げましよう」

アリアははっとした様子で返事し、関原達と共に出口から逃げ去った。

そしてある程度逃げ、敵が見えなくなった所でアリスは立ち止り、関原達に尋ねた。

「はあ…はあ……でさ、君たちが学園都市の超能力者って本当?」

「あ、ああ。と言うかお前こそ魔術師だつたんだな」

関原が何気なく言うと、アリスは驚きと喜びとの入り混じった表情をし、関原と前田を交互に見た。

「超能力者で魔術を知っているってことは……君たち？白羽翔の関係者？上条当麻の関係者？……それとも……」

アリスはキツとした目つきで関原達を睨み、ルーンカードを関原達に向けて言った。

「上条さんって人は会ったことはある。でも、俺達は翔の仲間だ。」

「……そっか良かったよ」

アリスは口を綻ばせ、ルーンカードをしまいながら言った。

「私はイギリス聖教必要悪ネセサリウスの教会の魔術師よ。今回の仕事は、白羽翔君の搜索と護衛、あと連行。だから白羽翔君を探していたの」

「イギリス聖教って、十字教3大勢力だよな？」

「そうよ。で、さっきのはたぶんローマ聖教のヤツらね」

「たしか、それも十字教3大勢力だったな。」

「白羽翔君じゃなくこつちを狙ったのは、たぶん君達を人質にするため。そして、それをしくじったんだから、こつちを追って来るか……」

アリスは言葉を切り、目を伏せた。それを見て関原と前田は気付いた。

「女子たちか!？」

「数で押されれば翔1人じゃ守りきれないってことか!。」

「うん、人質を取ってしまえば白羽翔君は攻撃できない。そう言う子なんでしょ?」

関原と前田はコクリと頷いた。

「で、どうするの?どこに行くか分かってる?」

「女子たちが引つ張りまわしてるだろうから、何かデートっぽいとこだな」

真剣に白羽の居場所を考え始める2人に前田がツッコんだ。

「いや、電話掛けるよ。」

「!!!!」

「そんな『はっ!その手があつたか!!』みたいな顔するなよ。しかも2人そろって。」

そう言いながら前田は携帯を取り出し、白羽に電話を掛ける。だがプルプルプルルル……

出ない。白羽が電話にでないのだ。佐天と桜野にも電話を掛けてみたが、やはり出ない。

「不味い。もうすでに翔は襲われてるかもしれない!。」

「師匠！白羽翔がローマ聖教と思われる者に襲われてる可能性があります。搜索を」

ヒュンと言う風切音が聞こえたと思った瞬間、アリスの手にあった霊装が地面に突き刺さった。

「アリス、やばいぞ。人数がさっきの比じゃない」

アリスが辺りを見回すと、100人前後の敵に囲まれていた。

「さっきのが様子見だったとすると、翔の方に行ってるのも足止めか。」

「やばいわね……逃げ切れそうにもないし、時間を稼いで応援を待つしかないわ」

アリスが魔法名を呟き、ルーンを構える。前田はクナイを取り出し、関原はスーパーストールを構えた。

「敵はそれを見越して短期決戦でくると思うがな。」

「まあ、あんだだけいれば逆に動きづらいだろ」

「いくよ」

「「おうー！」。」

第八十二話：追撃（後書き）

次回予告

作「いえーい、やっと元のペースに戻った！」

前「まあ、これでストックなくなっただけだな。」

作「言わないで……それは言わないで」

前「次はまた遅れるな。」

作「実テなんか嫌いだー！ー！ー！」

前「その1週間後は期末だ。」

作「学校なんて嫌いだー！ー！ー！」

前「まあ、ほどほどに頑張れよ。」

作「その優しさが痛い」

前「そろそろ内容の話に移ろうか。」

作「今回は、白羽達とあの男が合流！？」

前「それでは。」

作・前「次回をお楽しみに！」。

第八十三話：ステイル「マグヌス

（何か、おかしい……）

同時刻、白羽達も同じような集団に襲われていた。いつの間にか辺りに人がいなくなり、気がつけば囲まれていたのだ。

（何だろう、これは）

だが、白羽は異和感を覚えていた。敵は白羽達に攻撃こそしてくるが、何となく手加減をしているように思えたのだ。

（持久戦……はないよな。地力でこつちが勝ってるみたいだし）

「ねえ翔。コイツら……何か変じゃない？」

「ああ、俺も思ってた。どう思うっ？」

「……足止めかも」

「でも、」

何で、と言いかけた所で白羽は気付いた。

「じゅんと涼！」

だがちょうどその時、プルルルルと言う音がし、敵の1人が電話を取った。そして、1言2言話すと白羽達の方を向いた。

「白羽翔。お前の仲間を預かった。大人しくこちらへ来い」

機械音の様に平坦な声が、白羽達に呼び掛けた。その主は携帯電話を白羽達に向け、モードをスピーカーへと切り替える。

『離せ！離せって言うてるでしょ！！』

だが、そこから聞こえてきたのは白達が全く知らない声だった。

「「「「「誰？」」」」」

「「「「「！！！！！！」」」」」

（今だ！！）

白達の予想外の反応に敵が驚いたその瞬間、白羽が羽ばたいた。羽を展開し、一気に敵を半数近く薙ぎ払った。

「「「「「……………」」」」」

一気に戦力をそがれた敵は、じりじりと後ろへ後退していく。

「ならこつちをー！！」

「よせー！」

だが、敵の1人が飛び出した。その男は一瞬硬直した白羽の脇を通り抜け、守る者がいない佐天へと駆ける。

（しまった……………）

「うおおおおおおおおお!!!」

「吸血殺しの紅十字!」

その時、炎の十字架がその男を焼いた。男は暫らく叫び声を上げていたがやがて呻き声き代わり、ついに声を発さなくなった。

「ふう、先にこちらに出会ってしまったか」

炎の十字架の主は、2メートルにもなるよな身長を持ち、煙草をくわえジャラジャラと指輪を付けた赤髪の神父だった。

「ッ……くっ!」

敵のボスは赤髪神父と白羽達を交互に見た後、引きあげて行った。

「おい!待てよ!!!」

「深追いは止めた方がいい」

白羽が集団を追いかけようとすると、赤髪の神父がそれを止めた。

「でも、間違つて捕まってる人が!」

「大丈夫、それは僕の弟子だ。心配することはない」

「あんた……何者なんだ?」

「僕はステイル^{ネセサリウス}マグヌス。イギリス正教必要悪の教会の魔術師だ」

赤髪の神父は煙草の灰を落としながら、そう名乗った。

「くそっ！」

関原は走っていた。敵がどこに向かって言ったかは分からないが、方向だけは掴んでいた。だから走る。前田には別れて白羽を探すと言ったが、関原はアリスを救うために走っていた。

（アリスは、俺達といたせいで連れてかれちゃったんだ。なら）

なら、自分が行くしかないと、関原は走っていた。

第八十三話：ステイル「マグヌス（後書き）」

次回予告

ア「私捕まっちゃったね」

作「しょうがない。ヒロインだもの」

ア「私、戦うヒロイン希望」

作「もうちょっと我慢しよう。と言っか、アリスって次いつでるんだろう?」

ア「どういう事?」

作「アリスってぱっと思いついたキャラだから、これから出る予定がないんだよね」

ア「ちよっと!酷くない!?!」

作「大丈夫、最低でも最終章には食い込ませるから!」

ア「もっと出番をください」

作「そして次回、ちよっと関原が頑張るぜ!」

ア「そして私はどうなるのか!?!」

ア・作「次回をお楽しみに!?!」

第八十四話：救出

（見つけた！）

ロンドンの市街地から一本抜けた裏通りで、関原はアリスを運ぶロ
ーマ正教の魔術師たちを見つけた。

（あんにやる、変なところ触ったりしてねえだろうな）

今は休憩なのか、白羽と戦っていた方のグループとの待ち合わせな
のか、動き出す気配はない。関原はその通りと交差する通りの角で、
タイミングをはかっていた。飛び出せば、もう後には引けない。

関原はスーパーボールの残り数を数えた。残りはもう20個に届か
ない。

（全滅とかさせれる玉数じゃねえな。助けたら一気にとんずらこく
か）

関原は覚悟を決め、角を飛び出した。

（くそつ。情けない。ルーンカードがないと何もできないなんて…

…ルーン以外の魔術も学んどけば良かったな）

アリスはルーンカードを取り上げられ、身動きのできないように縛
られていた。さらに、アリスの傍には魔術師が待機し、アリスに地
力の逃亡は難しい。それに、たとえその魔術師を潜り抜けたとして
も、通りの両側の少し離れたところに数人の魔術師が見張っている。

その他の構成員はどこかへ行っていて、今がチャンスと言えばチャンスなのだが。

(友達なんていないし、師匠は………助けに来てくれるわけないか
…あゝも〜。私どうなるのよ)

そんな事を思ったその時、轟音と共に爆発がまき起こった。その爆発によって起こった爆風は少し離れた所にいた魔術師を壁に叩きつけ、気絶させた。そして、たった今出来た突破口から1人の影が近づいてくる。

「純二君!?!」

「ははっ！騎士様のお通りだ!?!」

そう言いながら関原はスーパーボールを放り投げ、関原と魔術師とのちょうど中間地点で指を鳴らせた。パチンと言っ音から1テンポ遅れ、爆煙が巻き起こった。

(この距離なら爆弾は使えない。ならば)

この煙の中でアリスを助けてそのまま逃げる。そう魔術師は判断し、アリスを掴んでおこうとした。

だが、

「考えが単純なんだよ!?!」

「しっがっ!?!」

背後から背中に飛び蹴りを喰らい、そのままグーで連打された。魔術師は殆どまともな抵抗も出来ず、気絶した。

「大丈夫か？お姫様」

関原に手を貸され、アリスは立ち上がった。

「ありがと……でも、何で来たの？」

「何言ってるんだよ。仲間だろ？」

さも当然とでも言うように、関原は答えた。

「さあ、とつとと逃げるぞ！」

ちょうど煙が晴れ、関原とアリスが逃げようとしたその時、どこかに行っていたグループが帰ってきた。しかも、白羽達の足止めをしていた集団も引き連れて。

「げっ！増えてる」

「ど、どうするの？魔術が使えないから、私今ただの女の子だよ」

「しゃあないな、練習中なんだけど……新技だ！」

関原はスーパーボールを4つ取り出し、敵の少ない方へ1つ、多い方へ3つ投げた。だが、それは真っ直ぐ敵に投げたのではない。壁にあたり、複雑に反射するように投げたのだ。どこへ行くか分からないスーパーボールに、敵はどこへ回避していいか分からず戸惑っている。

「そんな適当で」

「適当じゃねえぜ。全部計算してる」

「な!？」

スーパーボールは敵を惑わすように右へ左へ跳ね返り、敵の中央へ落ちた。それに合わせ、関原が起爆する。

「くくくくく!!!」

「馬鹿め、指を鳴らさなきゃ起爆できないとでも思ったか!」

「どづいつ事?」

「指を鳴らす必要があるのは、1つだけ起爆させるとか、そういう集中しなけりゃいけない時だけなんだ。普通に全部起爆させるときには指なんか鳴らす必要はねえ」

そう言いながら関原はさらにスーパーボールを4つ投げる。そして、それで敵がひるんだ隙に敵の少ない方から敵の包囲網を抜け出した。

(ちょっとカッコイイじゃん。騎士様)

第八十四話：救出（後書き）

次回予告

ス「……何で僕なんだい？」

作「この章に今現在出てるメインキャラで、唯一出てないのがお前だからさ」

ス「はあ、さつさと済ませよう」

作「うん、こっちはこっちでテスト勉強の合間だしな」

ス「次回、関原はアリスを救えるのか？」

作・ス「「次回をお楽しみに」！！」

作「ステイルのテンションが低い！！！」

第八十五話：ハッピーエンド

「まあ、ここなら見つからないだろ」

追手を振り切った関原とアリスは、小麦粉か何かの倉庫に隠れていた。倉庫の中には中が詰まった袋が大量に積んであったが、全て倉庫の奥の方へ固められており、かなり広いスペースが開いていた。

「で、どうするの？ここじゃ助けは来ないと思うよ」

「ははは、アリス君。君は携帯電話というものを知らないのかい？」

「あゝ。なるほど」

自信満々に関原は携帯を取り出し、『涼』へと電話を掛けようとした。だが、

「しまった。ここ電波が届いてねえ」

「密閉空間だしね……」

「仕方ない。ちょっとドアを開けて……………あ」

関原がドアを開けると、ちょうどさっきの集団が通りかかったころだった。

「……………」

全身からどっと汗が噴き出した。

「タイミング考えるよ!!」

関原とアリスはバックステップで後ろへ下がり、関原はスーパーボールを両手に2つずつ構えた。敵は1瞬状況がつかめていなかったようだが、すぐに我に返り、倉庫の中へと入ってきた。

「……………」

敵は静かに、だが確実に間を詰めてきている。その時、関原が動いた。構えていたスーパーボールを全て投げたのだ。

だが、さっきの通りの様な狭い場所しかあの複雑な反射は起こせない。それが分かっている敵は、スーパーボールの爆発に巻き込まれない様にかいし、関原へと向かう。だが、

「^{チェイス}方向転換」

そう言いながら関原が指を鳴らすと、スーパーボールが小さな爆発を起こし、敵が固まっている所へ向かった。

「部分的な起爆。そして、その推進力での方向転換だ!」

パチンと言う指の音から1テンポ遅れての爆発。不意を突かれた敵は10人位が戦闘不能の状態になった。

「あ、これは」

その時、倒した敵が落としたのか、大量のルーンカードが爆風に乘って流れてきた。

「行くぜ！」

「うん！」

「フルバースト
全放出！！！」

関原が7個スーパーボールを地面に叩き付けた。それは、関原が操れる最大数全てだ。そのスーパーボール達はそれぞれ違う場所で小さな爆発を起こし、複雑に進む。

「くそお！」

敵の1人が、目の前の床に飛んで来たスーパーボールを半ばヤケで切ろうとする。だが、スーパーボールは斜めにイレギュラーバウンドを起こした。

「リフレクション^{チェイス}
乱反射。方向転換で削れた部分で跳ねるから、イレギュラーバウンドが起こるんだよ！」

そして、斜めに飛んだスーパーボールは方向転換^{チェイス}で魔術師の頭上に飛び、爆発した。元から体重を前に掛けていた魔術師は、爆風によって顔面から床に叩きつけられた。

「小僧、後ろがガラ空きだぞ」

「巨人に苦痛の贈り物を！」

「ツツアアアアアアアアアア！！！」

関原の背後を取り、その背中に剣を付きたてようとした魔術師は、

横からやってきた灼熱の炎剣に体を包まれた。そして、地面を転がって体を焼く炎を消そうとする。

「師匠みたいな温度は出せないから殺せないけど、ちょっと苦しんでね」

「あと8人。残弾は……0かよ！」

「（純二君、私もルーンカードが残ってない）」

（くそっ）

関原とアリスは善戦し、敵をほとんど戦闘不能にすることに成功したが、そこまでだった。最初に関原が見積もった通り、全滅させるほどの準備は整っていなかった。

「終わりだな。諦める……」

「純二君……」

「騎士様はお姫様を守れませんでしたっつてか。たしかにそうかな」

関原の言葉を聞き、魔術師たちは関原とアリスの方へ近づこうとする。だが、関原の言葉は終わっていなかった。

「でも、このお話はハッピーエンドだぜ」

「？」

「たしかに、騎士おれみたいな脇役は退場だ。でもな……脇役は俺だけじゃねえ、雑魚おまえらもだ。……え？じゃあ誰が残るのかって？そんなの、お姫様と」

その時、全員の耳にバサツという羽音が聞こえた。

「王子様ヒーローだろ？」

関原が言い切った、その瞬間、壁の1部が吹き飛んだ。そして、そこから関原達を魔術師たちから守る様に白い羽根の少年が現れた。

「君が……白羽翔君？」

「お待ちせ」

「遅せえよ。あんだだけバンバン鳴らしてたのに」

そう。関原が戦っていたのは、時間を稼ぐのと同時に場所を知らせるためでもあったのだ。

「……退散！」

唐突に、敵のリーダー格の男が叫んだ。そして、次の瞬間には出入り口へと全員が向かっていた。

「あっ！待ちやが」

「イノケンテイウス魔女狩りの王!!」

声と同時に、出入り口を塞ぐように撰氏3000度の炎の巨人が現れた。その前には、赤髪の神父も炎の剣を構えている。

「君たちには聞きたい事が少しばかりあるんだ。退場はもう少し待ってもらおうかな？」

「師匠！」

前には撰氏3000度の巨人を従える超一流の炎の魔術師。後ろには超能力と魔術の両方を使う聖人。魔術師たちに、選択肢はなかった。

第八十五話：ハッピーエンド（後書き）

次回予告

作「次回投稿遅れます」

白「いきなりマイナスだな」

作「次章はまだ構想しかできてない！」

白「あゝあ。ちなみにどんな話？」

作「お前の知らないところで起こっていた話さ」

白「誰の話？」

作「お前のしているヤツであることは教えてやるっ」

白「きになるな〜」

作「最悪夏休みには出すから！」

白「ガンバ」

作「では」

白・作「次回をお楽しみに！！」

第八十六話：後日談

「ようこそロンドンへ。私がイギリス正教の最大主教かつ必要悪ネセサリの教会のトップ。ローラ＝スチュアートだ」

事件の少し後、白羽は聖ジョージ大聖堂に呼び出されていた。白羽の前には、自らの3倍はあるであろう金髪を持つ女性が待っていた。

「白羽……翔です」

「そう緊張するでない。私とお前は今対等だ」

「……単刀直入に聞きます、俺を呼んだ理由は何ですか？」

白羽は、ローラに厳しい視線をかけながら質問する。

「そう急ぐな。時間はあるける」

「……………ける？」

「……な、何か！おかしき所がありけるか！？」

白羽のオウム返しに、ローラは慌てふためいて取り乱す。

「いや、何で古語？」

「おのれ土御門……ちゃんとしける日本語を教え直せとあれほど」

ローラは下を向いてブツブツと唱えている。白羽はその姿に軽く引

きながら、ローラに質問をする。

「で、あの…俺を呼んだ理由は……？」

「そうだな。まずはそれから話しけるか……白羽翔よ、お前は魔術サイドと科学サイドが微妙なバランスを取っている事はしりけるな？」

古語はもう気にせず、白羽は頷く。

「だが、そのバランスが崩れかけている。その理由が」

「超能力と魔術の両方を使える、俺」

「そう、だが問題はそこではない。お前が聖人である事にありける。魔術サイドで大きな意味を持つ聖人、それが科学サイドにいうのが問題でありける。だから、魔術いサイドはお前を狙っている。小さな結社から、3大宗派までな」

「でも、だからって俺が魔術サイドに行くのは」

そこで、白羽の言葉を遮ってローラが言った。

「話は変わるが、何故にローマ聖教はお前の仲間を連れ去ろうとしたと思いきる？」

「人質にするため？」

「では、何故にイギリス聖教はそれをしない。いや、しなくても良いと思いきる？」

白羽は首をかしげ、少し考える。だが、答えは浮かばない。

「土御門や禁書目録の事は知りけるな？」

ローラのその一言で、白羽はひらめいた。

「つまり、ローマ聖教にはないけれど、イギリス聖教には学園都市とつながりがある」

「イギリス聖教に来るのであれば、学園都市との関係を切らずに済む。だからイギリス聖教は人質など取る必要がない」

「……俺がイギリス聖教に入るメリットは？」

白羽が尋ねると、ローラはニヤニヤとした顔で、指を立てた。

「まず1つ、イギリス聖教は3大宗派。小さき結社などはその名を恐れて勧誘などしてなくなるであろう」

「2つ目は？」

「フリーの魔術師がどれほど危険か、お前は知っているか？」

白羽の頭に、2人の魔術師の姿がよぎった。

「お前がイギリス聖教に入るなら、香乃由美も共に入ること許さう。そして最後に、世界を救える」

「は？」

最後の1言のせいで、白羽の思考は完全にストップした。数秒固まって白羽ははっとし、ローラに聞き返す。

「それってどういう事ですか？」

「今魔術サイドと科学サイドのバランスが崩れかけ、戦争が起こるかもしれないほどになっている。そしてお前は、その引き金になってしまいかねぬのだ」

「……俺はイギリス聖教に入っても学園都市から離れる気はないですよ」

「それで良い、一番の目的はお前を魔術と科学の両方に所属させてバランスを取ることにある。それに、学園都市で動ける魔術師は少ない。学園都市での魔術的事件にお前は関わってもらおう事にする」

ローラは1つの十字架を白羽に渡した。だがそれは、普通の十字架ではない。ローラの腕ほどもある巨大な十字架だった。今までどこにこの視界の良い部屋でどこに隠していたのか、白羽はふと疑問に思ったが、ローラにその十字架を手渡されるとその重さに意識を向けざるをえなかった。

「それは聖十字サンククローチと言いける霊装なり。天使テレスマの力を込めて切れ味を出す、お前にちょうど良き霊装だ」

「……これをどうしろと？」

「何、ただの祝いなるよ」

白羽の困惑をよそに、ローラは曇りなく微笑んでいた。

「よう、お姫様」

「やあ、じゅん君」

白羽達が宿泊しているホテルのフロントで、関原は隅っここの椅子に座っているアリスに声を掛けた。そして、そのままその隣に座る。

「ん？どうしたの？」

「アリス見てたらさ、またかって思ってたな」

「？」

突然話し始めた関原に、アリスは首をかしげた。

「俺さ、昔は桜野の事が好きだったんだよ。好きで好きで堪んなくてさ、守ってやりたいって思ってたんだ。でも、いざマジで危険な事になったら……怖くて……俺は何もできなくて」

俯いていて関原の表情はアリスにはよく見えなかったが、その語調にじみ出た悔しさは感じていた。

「で、翔が桜野を助けて桜野は翔にもうメロメロな訳よ」

「ふうん、そうなんだ。で……何で『またか』なの？」

「アリス、好きだ」

「へ！！？」

突然の告白に、アリスは顔を真っ赤にしてあたふたとしている。そんなアリスを見て、関原は頬笑み少し泣きそうな顔で言った。

「ごめんな、困らせる様な事言つて。ちゃんと守りきれもしくなかつた俺なんかより……翔だよな」

関原はそう言つて、部屋の方へ戻つて行こうと立ちあがった。だが、

「待つてよ、どこ行くの」

アリスが関原の手を掴み、それを止めた。

「何だよ？これ以上カツコ悪いとこ見せさせないでく」

関原の言葉を、アリスは……唇で止めた。

「な、ちょ……え？」

「好きだよ、じゅん」

「で、でも」

「でもじゃないよ。ピンチの時にちょっと助けてくれた位じゃ私は

好きになったりしないよ、無理だと分かっても必死に守ってくれ
たじゅん君が……私は好き」

さっきのアリスの様に、今度は関原が顔を赤くしてあたふたとし始めた。それがおかしくて、アリスは声を上げて笑った。それにつられて、慌てふためいていた関原も関原も、笑っていた。

第八十六話：後日談（後書き）

作「あゝ遅くなった」

関「今回は夏休みの講習やら塾やらe t cのせいで遅れたっていつてます」

作「あゝローラ」

関「ローラの口調が難しすぎたと言ってます」

作「あゝ次の話」

関「次の話が全然できないと言っています」

作「あゝ休む」

関「忙しくて書くのが全然できないので少し休載すると言っています」

作「あゝorz」

関「土下座してます。ってか俺に解説をさせんなよ!!」

作「もう……疲れたよ」

関「がんばれ！せめて俺とアリスの話をもうちよつと書いてくれ！！」

作「……希望者がいれば誰の番外編でも書く」

関「読者のみなさん！関原！関原純二に清き一票を！！」

作「それでは、少し時間を開けますが」

関「次回をお楽しみに！！」

関「ってお前は言わねえのかよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2117m/>

とある都市（まち）の都市伝説

2011年11月12日21時06分発行